

(表紙)

貞久公
自正慶二年
至建武二年

前編
舊記雜錄
卷十七

元徳二 元弘一 正慶二 建武二

自正慶二年辛未

至建武二年乙亥

五代道鑑公

1620

〔山田氏藏〕

大隅式部孫五郎入道之慶申、薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭所務事、重申狀如此、守下知狀、可沙汰付彼所務於道慶之由、先度被仰之處、不事行云、早速可申左右也、仍執達如件、

正慶二年正月廿日
〔癸酉〕
修理亮(花押)

澁谷新平次入道殿
〔重基〕

澁谷又次郎入道殿
〔重博〕

1621

〔樺山氏文書〕

日向國守護職事、任先例、可令致沙汰者、繪旨如此、悉之、

元弘三年二月三日
勘解由次官在判

嶋津上總前司入道館
〔貞久〕

1622

〔延時文書〕

ゆつりわたすしそく又三郎入道ほうふつか所ニ

さつまのくにさつまこほりなりえた名内なりをかのてんはくさんやむらゝの事

しよつほつけほんもんにミえたり、

右、たうみやうてんはくさやかかりくらむらゝにをいて

ハ、沙弥かくねんかちうたいさうてんたうちきやうさをいなき地也、しかるにしそくあまたありといへとも、心

さしふかきによて、又三郎入道ほうふつをちやくしとして、したいてうとのせうもんならひニくわんとうあんと

の御下文以下大番けいこしゆこの状をあいそへて、多いたいをかきて、かくねんかしひつをもて、ゆつりわたすところなり、くわんと御くうしといふ、さんやかりくらといふ、ほんせうもんをまほて、へんぎんせしめ、あいかしむへきなり、しゝそんくゝにいたるまで、たのさまたけなくちきやうさをいあるへからす、仍爲後日ゆつりしやう如件、

正慶二年ミツのとの壬三月五日 沙弥覺念(花押)

子息平忠村(花押)

爲證人

沙弥道法(花押)

平 忠藤(花押)

僧 良種(花押)

沙弥光祐(花押)

1623

「山田家蔵」

大隅式部孫五郎入道々慶申、薩摩國谷山郡内山田・上別符地頭得分物事、重申狀如此、谷山五郎入道(兼唐)背下知狀并度々催促無沙汰云々、早相尋實否、載起請之詞、可注申也、仍執達如件、

「元弘三年ニ当ル」【癸酉】

正慶二年潤二月三日

澁谷新平次入道殿(重唐)

修理亮(花押)【英時也】

1624 「全」

大隅式部孫五郎入道々慶申、薩摩國谷山郡内山田・上別符地頭所務事、重申狀如此、守下知狀、可沙汰付彼所務於道慶之由、被仰澁谷新平次入道・同又次郎入道等之處、不事行云々、早相尋實否、載起請之詞、可注申也、仍執達如件、

正慶二年潤二月三日

山門郡司入道殿(高尾野ノ兼一)

修理亮(花押)【英時】

1625

『臺明寺文書』

奉寄進

衆集院阿弥陀堂

大隅國曾於郡重富名内折橋田七段事

右、寄進志趣者、爲入阿出離生死證大菩提乃至法界衆生平等利益、相副調度證文等、所奉寄進也、仍寄進狀如件、
正慶貳年壬二月九日

施主比丘尼妙願(花押)

「妙願折田寄進状」
「右ノ原書ハ、旧御番所御文書ニ番箱中ニ一巻アリ」

1626

『比志島氏文書』

さつまのくにミついへのみんのうちゆす(油須木村)のきむらのさい
け田そのならひニさんやらの事、みきのところハ、せう
あんかちうたいさうてんのそりやう也、しかるを、しろ
のようとう貳十(六)わんニこんねんミつとのとのとりのと
しの正月一日より、うのとしの十二月晦日ニいたるまで、
七かねん作七をかきて、かのところ段歩ものこさす、うゑ
はらのへうあみた佛のそく女の方ニうりわたすところ
也、たゞしいや七殿のふんすいてん五反、そのいそハ、
これをのそく、又ちとうりやうけはうのねんくにをいて
ハ、せんれいにまかせて、たうちきやうにつきて、きた
あるへく候、もし七かねんのうちに、をゝやけわたくし
につけて、かのところさある事候ハ、ほんのようとう
に、はうれいのりふんをそへてきたすへく候、よて爲
後日状如件、

正慶二年みつのと 壬二月十五日

ひくにせうあん(花押)

1627

『本田二郎親兼入道道観傳 入來本田氏文書也』
下

山門院西方内名田等事

本田宮内左衛門入道道観分後二郎ト云

手作分

六段十 峯本 五段 平田 一段十 舍迫

一名々分

久富六町 光成貳町 桃木田六段

右、守坪注之旨、爲給恩、可令知行之状如件、

正慶二年潤二月十九日 道鑑(花押)

1628

『道鑑公御譜中』

「太平記十一卷有之」

元弘三年癸酉即正慶二年也三月廿七日、足利治部大輔高氏率三

千餘騎、先于大手大將名越尾張守高家、三日已前進發於

鎌倉、四月十六日、所以京著也、同月廿七日、向八幡山

崎、大手大將尾張守高家、於久我繩手、赤松氏之一族爲

佐用左衛門三郎所射殺、由是、從軍七千六百餘騎悉敗、

逃死者或鮮矣、高氏爲搦手大將、率五千餘騎、向西岡下

居桂河西端、而爲酒燕之際、聞高家軍敗戰死之告、則欲

遂素懷、越大江山陳丹波州篠村矣、同年五月七日、高氏發篠村、向六波羅挑戰之際、六波羅軍敗、兩六波羅欲逃去關東之路、於苦集滅道邊、北條左近將監時益中矢死矣、

北條越後守仲時從二千餘騎、過番馬驛之際、太敵遮前路、漸滅從卒且馬疲力倦、共四百三十二人遂自殺矣、又新田

太郎義貞、去三月賜先帝之綸旨、稱虛病從千劍破歸我本國、竊便宜攻鎌倉、北條相模守高時法師宗鑑之軍敗、

元弘三年癸酉五月廿二日、於葛西谷東勝寺宗鑑已下一門自殺、都鎌倉中自殺五千餘人也、長門州探題遠江守時直

京都合戰聞火急故、則催驪籠百餘艘、乘軍來至于阿波鳴渡之際、京都關東俱以爲源氏被滅、悉已順王化云尔、由

是、反船於鳴渡、下九州欲加彼國探題、到于赤間關、則筑紫探題修理亮英時、昨日已爲小貳大友島津所攻亡、九國

二島爲公家之扶、聞此言則從卒漸散落、而僅爲五十餘人漂泊于柳浦海上、欲結纜於彼此島嶼、則爲官軍所防支、

進退去留無如之何、於茲乎、使一价請降於小貳島津、以年來好不淺之故、即以容之迎來、而後君之御外威峯之

僧正俊雅、先是笠置城没落之時、配流于筑前州、今亦聖運開一時、都鄙爲一統、故有九州成敗之勅許、是以與小

貳爲指南、教時直見僧正、時直膝行頓首、敢不平視、

昨日有佗人悲、而今日來自己上、天運循環無往不復、人不可不思也、

1629 「貞久公御譜中」

〔写在水引權執印〕

九州士卒事、宜隨分國守護人催促之處、或捨役所、馳向他國、或分遣子息親類由候、有其聞、於如然之輩者、可被處罪科之旨、可被相觸薩摩國地頭御家人、至違犯輩者、可被注進交名候、以不蒙免許、有歸國之輩云、不日可被催進也、仍執達如件、

正慶二年四月一日

〔英時〕
修理亮御判

〔貞久〕
嶋津上總入道殿

1630 九州士卒事、隨分國守護人之催促、可誓固役所之由、御

教書如〔此脱之〕、然早可被存知其旨也、仍執達如件、

正慶二年四月一日
沙弥在判

〔上書〕
薩摩國地頭御家人御中

〔御教書并守護施行等案 權執印〕

1631 『正文池端氏藏』

先帝御事、今年三月十七日関東御教書今月廿六日刻子到
來、案文如此、爲凶徒等誅伐、相催大隅國地頭御家人、
可發向伯耆國云々、早相具庶子等、可被致軍忠、仍執達
如件、

正慶二年四月廿七日 前參河守(花押)

柵寝弥次郎殿

1632の1 「越前島津氏七代忠兼譜中」
七代 忠兼

五郎三郎 左衛門尉 周防守

1632の2 自伯耆國蒙 勅命候之間、參候、相催一族、可有合力候、
恐々謹言、

「朱カキ」元弘三年

四月廿七日

高氏(花押)

周防五郎三郎殿(忠兼)

1633 「道鑑公御譜中」

「樺山氏文書」 「写有之トアリ」

大隅國守護職事、任先例、可令致沙汰者、繪旨如此、悉
之、

「即正慶二年也」
元弘三年四月廿八日 (高倉光守) 勘解由次官在判
嶋津上總(貞久)前司入道館
「此四月廿八日之正文、旧御番所二番箱御宝鑑中ニアリ」
(張紙)

1634 「全」

「正文有之」

自伯耆國蒙 勅命候之間、參候、令合力給候者、本意候、
恐々謹言、

元弘三年

四月廿九日

高氏(花押)

嶋津上總入道殿(貞久)

1635 元弘三年癸酉五月、北條高時誅せらる、兩六波羅及び九
州探題一時に打亡され、北條氏亡ぶ、北條氏執權九世、
凡一百十五年にして亡ぶ、

1636 「道鑑公御譜中」

「写在高岡衆指宿左近兵衛忠真」

武藏修理亮英時誅伐之時、分取壹人、門真余 并親頼忠繼
被疵事、令見知了、仍執達如件、
元弘三年

五月廿七日

道鑑在判

指宿郡司彦次郎入道殿

1637

「道鑑公御譜中」

「正文在田布施衆二階堂三左衛門定行」

〔二階堂〕
隱岐三郎兵衛尉行久謹言上

欲以去月廿五日、爲薩摩國守護總州方御手一番、押寄

武藏修理亮博多宿所北門、令乘越築地、令追伐數輩人

等、令分取生取、依抽合戰忠勤於戰場、云總州方、云

江州方、旁令申訖、其後爲守護御方、被加分取生取等

檢見上者、被經急速御沙汰、預恩賞、弥成弓箭勇、子

細狀、

右、令致合戰忠勤之條、無其隱者、被經急速御沙汰、預

恩賞、弥爲令成弓箭勇、恐言上如件、

元弘三年六月 日

〔裏二有之〕(貞久)
(花押)

1638

「在太平記十一卷」

元弘三年癸酉正北條相模守高時滅亡於鎌倉、京都之六波

羅亦已没落矣、其後長門之國探題遠江守時直請降於官方

之小貳與嶋津、年來之好以不淺故、迎來而後、君之御

外威峯之僧正俊雅、先是、笠置之城没落之時、配流于筑

前州、今亦聖運一時(律脫之)開、都鄙爲一統、故有九州成敗之

勅許、是以小貳嶋津時直見于僧正、時直膝行頓首、敢不

平視、昨日者他人之哀、今日者自己悲哀哉、

1639

「執印文書」

〔繪旨〕

薩摩國八幡新田宮所司神官等申、初任神拜廳宣事、任例、

不可致其沙汰之由、被仰國司候早、可令存知給之旨、

天氣所候也、仍執啓如件、

〔年紀不詳〕(元弘三年)
六月四日

謹上 右衛門督殿

〔山田文書〕

1640

武藏修理亮英時誅伐時軍忠事、申狀給候了、仍執達如件、

元弘三正慶二年癸酉也六月八日
具簡(花押)

嶋津式部孫五郎入道殿

1641

「正文在嶋津安藝守久雄」

鎮西合戰之次第委細承候早、早速靜謐之條、爲悅候、且

注進狀之趣、經奏聞候了、恐々謹言、

元弘三

六月十日

高氏(花押)

嶋津上總入道殿

〔此文書、道鑑公御譜中ニアリ〕

1642

〔在道鑑公御譜中〕

日向國守護職事、可被存知者、

繪旨如此、悉之、以狀、

元弘三年六月十五日

右衛門權佐御判

嶋津上總入道館

1643

〔山田氏文書〕

山田・上別府のちとう所務の事ニよて、こうあん十年

くわんとう御下知の正文一通、同所務条々の事ニよて、

正あん二年のちんせい御下知正文一通、同所務わよの

事ニよて、正慶元年のちんせい御下知の正文一通、同

地頭職安堵の御下知の正文一通、年かう同前同所務と

くふんの事ニよて、せい御下知の正文三通、

一山田・上別府兩村を道慶ニゆつらるゝけんちの狀也、

かのあん、本狀房(性カ)これをかく、かのゆつり狀の正文ハ、

そうりやうたゝむねのあつかり狀の正文一通、同しそ

くさたひさのあつかり狀の正文一通、この狀らハ京へ

いそきのほせらるへきよし申下了、のこる和与狀御下

知以下いしうゐん・きいれの田蘭はくちくわうやらの

したいせうもん、同御下知らの正文ハ、それははゝの

もとにあるへき也、しせん【龜三郎】の事あらん時ハ、かめ三ら

うとよりあひて、わけてとらるへき狀如件、

元弘三年六月廿四日

たうけい(花押)

諸三郎殿

(コロニ、一六四八号文書ノ奥書ヲ記ス、衍ナルベシ)

1644

〔權執印文書〕

薩摩國御家人新田宮權執印良暹、依世上動乱事、馳参令

在京候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元弘参季七月三日

僧良暹上

進上 御奉行所

承了御判

1645

〔執印文書〕

〔繪旨〕

薩摩國新田宮執印職、當知行之上者、不可有相違者、

天氣如此、仍悉之、以狀、

元弘三年七月三日

式部少輔範圍(花押)

1646 『戴重久篤兼譜』

元弘三年癸酉、初 後醍醐帝謀誅北條高時、徵武士土岐

賴兼等、高時間知、乃殺賴兼等、尋欲廢 後醍醐帝、帝

如笠置招叡山徒、召楠木正成使以討賊、高時乃立 光嚴

帝、戰爭日起、後醍醐帝又如隱岐、自隱岐如船上山 伯

於是五月、足利高氏克六波羅、新田義貞取鎌倉、 光嚴

帝廢、此月二十五日、我 道鑑公及小貳大友等、殺探題

英時北条修於博多館、六月、 後醍醐帝還京師、去正慶

年號、七月、篤兼應召軍行、乃報主將、此役不詳所至何國姑闕俟考

1647 『重久氏文書』

大隅國御家人重久掾篤兼、爲軍忠令馳參候、以此旨、可

有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月 日

藤原篤兼

進上 御奉行所

1648 『山田文書』

嶋津大隅式部諸三郎忠能・同舍弟龜三郎丸等謹言上

欲早任當知行旨、下賜安堵 綸旨、備將來龜鏡、薩摩

國谷山郡内山田・上別府兩村地頭職、同國散在名田島

相傳所領等事、

副進

一卷 所領相傳文書等

右、就被下 綸旨於忠能一族、嶋津上總前司貞久法師名

鑑、令誅罰武藏修理亮英時之時、忠能父子共懸先、令生

捕抽軍忠之間、可浴恩賞之旨、以別紙言上、至當知行所

領等者、早下賜安堵 綸旨、欲備將來龜鏡矣、仍恐言

如上件、

元弘三年七月 日

「右書ノロニ如此有之」

「奉行人藏人式部少輔」

「彼宛所へ、おしこうち、まてのこうち、三条はうもんの中ほと、まてのこうちをもてむね門也、此申状八月三日上、同六日安堵りんし給はる、彼申状案文、同清書、少輔殿充書之」

1649 「山田氏文書」

嶋津式部孫五郎宗久法師法名道慶謹言上

欲早被經御 奏聞、浴恩賞、施弓箭面目、武藏修理亮

英時誅伐合戰勲功事、

右、依 綸旨、去五月廿五日被誅伐英時之時、道慶同子
息諸三郎忠能相共馳向于先陣、致合戰、忠能令生虜英時
從人次郎兵衛尉畢、仍嶋津上總入道并大友近江入道被遂
檢見、先度已所被注進也、然早被經御 奏聞、浴恩賞、
且特施面目、且弥爲抽忠勤、恐々言上如件、

元弘三年七月 日

此事、以早打之便、宜令注進候了、可被存知其

旨候、

道鑑(花押)

〔上書〕
「式部孫五郎入道申状」

〔底本ニハ道鑑花押ノ上ニ花押ヲ記シ、高越後守ト記シアルモ、写本ニヨリ一六
五三号文書ノ袖判ノ混入ト推定、省略ス〕

1650

『水引執印文書』

(本文書ハ一六四五号文書ト同文ニツキ省略ス)

1651

『水引執印文書』

(本文書ハ一六三九号文書ト同文ニツキ省略ス)

1652

『水引執印文書』

新田宮神官等訴申兩条事、奏聞候之處、於國領島等者、
停止國衙之濫妨、於神拜者、念可切出之旨、可成聽宣旨
被仰下國司候了、且可令存知給、仍執達如件、
(元弘三年) 九月十二日
〔舊之〕
□宮亮兼□
謹上 左中將殿

1653

〔山田氏文書〕

(高越後守師卷)

(花押)

嶋津大隅式部孫五郎宗久法師法名道慶爲御方致軍忠、所馳參
也、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月十日

沙弥道慶(花押)

進上 御奉行所

1654

「一見了、左少將」

薩摩國指宿郡司彦次郎入道成榮、令馳參御方(候以)此旨可
有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月十三日

沙弥成榮判

進上 御奉行所

1655 『入来院氏家臣武光氏文書』

薩摩國武光三郎知行分領、任先規、不可有相違者、

天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年七月廿日

左中弁(花押)

武光三郎館

【包紙】
【武光三郎館】

1656 「道鑑公御譜中」

「写在高岡衆指宿左近兵衛忠真」

武藏修理亮英時誅伐之時軍忠事、申狀給候了、仍執達如
件、

(元弘三年)
七月廿八日

(大友貞宗)
具簡在判

指宿郡司彦次郎入道殿

1657 「在道鑑公御譜中」

「正文在出水衆篠原主水」

薩摩國御家人萩崎小次郎入道淨意今月廿八日馳參御方候
上者、爲後證下給御判、欲備龜鏡候、以此旨、御披露候、
(可有脱カ)

恐惶謹言、

元弘三年七月廿九日

沙弥淨意

進上 御奉行所

(高氏)
承了(花押)

1658 『入来院氏文書』

澁谷九郎平典重謹言上

欲早日依傍例、且任忠功、申 賜身暇企參洛、令言上

子細、今年五月廿五日合戰抽忠勤子細事、

右、合戰之時、於所之戰場、勵隨分忠勤之条、武藤筑後
孫次郎并對馬左近將監具被見知早、仍雖可令參訴、當所

御下向之間、爲令言上事由、參洛于今所令延引也、早依

傍例、任忠功、下賜身暇爲令上洛、恐之言上如件、

元弘三年八月 日

1659 「伊作家二代宗久譜中」

「正文在手鏡」

嶋津大隅左京進宗久法師、當知行所、被聞食了者、天
氣如此、悉之、以狀、

元弘三年八月五日

(岡崎範國)
式部少輔(花押)

1660 『山田氏文書』

〔道鑑公御譜中〕

- 一 四通 関東御下文正文
 - 一 二通 義祐狀正文(我所)
 - 一 三通 菩薩房・同法橋房并道願手継正文
 - 一 二通 五ヶ所事和与狀正文
 - 一 二通 御使覺忍并訴人教以請文
 - 一 一通 時村御狀正文
 - 一 一通 ふかん狀正文(發物)
 - 一 廿八通 京都大番并石築地以下ふかん請取狀正文
 - 一 一通 佛念讓狀正文(念書)
- 右、目錄如件、
- 元弘三年八月十日 義範(花押)

〔比志島島文書〕

比志嶋文書憑阿御方より給候て、京□に持参仕候目錄事、

嶋津大隅式部諸三郎忠能・龜三郎丸等當知行地、被聞食了者、天氣如此、悉之、以狀、
元弘三年八月五日 式部少輔(花押)

〔臺明寺文書〕

大隅國臺明寺々領當知行之地事、任一同 宣旨、管領不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、
元弘三年八月廿九日 權左少弁(花押)

〔此正文、旧御番所御文書二番箱中、臺明寺文書一卷中ニ在リ〕

〔山田氏文書〕

嶋津式部孫五郎入道道慶、依世上騒乱事、自薩州去月十六日令馳参候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、
元弘三年八月廿日 沙弥道慶上

進上 御奉行所

承了(花押)

進上 御奉行所

元弘三年八月十日

沙弥道鑑上(貞久)
〔右名ノ下裏有之〕
(花押)

〔正文在田布施衆二階堂三左衛門定行〕

薩摩國阿多郡一分地頭隠岐三郎兵衛尉行久申、武藏修理亮英時誅伐合戦之時、分取生虜等事、加檢見候畢、仍解狀謹進覽之、以此旨、可有洩御披露候乎、道鑑恐惶謹言、

〔道鑑公御譜中〕

〔正文在渋谷忍兵衛重増〕

薩摩國白濱三郎道季法師今者□

去五月廿五日於鎮西博多、武藏修理亮英時□討死

并從類等被疵致軍忠上者、預御注進、欲浴恩賞子細事、

右、彼日英時誅伐之時、道欽懸先陣攻入北門、令討合數

輩之敵、□令死去畢、次旗指平七兼直所被疵也、此

等次第當國中□郎入道総州扶持人并伊作田又三郎、大隅國加

治木彦五郎見知訖、仍疵在所等、守護方并筑州被遂實檢

畢、然□道欽自身討死之子細、預御注進、浴恩賞、向後

爲施弓箭之面目、粗言上如件、

元弘三年八月 日

承候早 道鑑(花押)

〔本文書ハ一七〇六号文書ト同文ニツキ有略〕

〔高尾野土人出水藤之丞藏 後醍醐帝繪旨〕

薩摩國和泉稻左衛門二□入道法有□不可有相違者、

□仰下狀如□、

元弘三年十月二日

〔洞院某世 左少弁(花押)〕

〔高岡土指宿十郎右衛門藏本〕

嶋津庄日向方富山七郎左衛門義道申、嶋津院住人右衛門

五郎致追捕苅田以下狼藉由事、訴狀副具如此、早土持掃

部左衛門入道相共苳彼所、且遂檢見、且企參上、可明申

旨相觸之、可被執進請文、若令難澁者、載起請文之詞、

可被明申也、仍執達如件、

元弘三年十月十三日

沙弥(花押)

揖宿郡司入道殿

〔道鑑公御譜中ニ、正文在高岡衆指宿左近兵衛忠真〕

〔權執印文書〕

薩摩國新田宮權執印良暹、世上依動乱事、馳參令在京候、

以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年十月廿三日

權執印良暹

〔權執印文書〕

薩摩國新田宮權執印并五代院政所兩職等事、領家御下知

如此、早依代相傳之旨、被補任彼職之上者、弥抽忠勤、

可被致御祈禱之誠、仍執達如件、

元弘三年十月 日

預所肥後守平朝判

權執印御房

元弘三年十一月九日

式部大丞(花押)

1671 『入來院氏文書』

澁谷平三重宗後家祖舜當知行地、不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年十一月九日

式部大丞(花押)

1675 『入來院氏文書』

澁谷弥三郎入道後家舜阿當知行地、不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年十一月九日

式部大丞(花押)

1672 『入來院氏文書』

平氏女寅三當知行地、不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年十一月九日

式部大丞(花押)

1676 『入來院氏文書』

澁谷新平二入道定圓當知行地、不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年十一月九日

式部大丞(花押)

1673 『全』

澁谷九郎典重當知行地、不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

元弘三年十一月九日

式部大丞(花押)

1677 『入來院氏文書』

薩摩國那答院与入來院堺一野・河床・中木庭村等事

1674 『全』

澁谷平二五郎重勝當知行地、不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

右所者、以去正安三年十二月廿五日、重利曾祖父澁谷次郎太郎入道妙行預鎮西御下知訖、仍相傳當知行之地也、而澁谷六郎房靜重今者死去、捧越訴狀就致訴訟、多年雖及其沙汰、所詮、一族相論事、非本意之間、於彼一野・河床・中木庭村者、相副妙行所給御下知、永代所去渡澁谷平二

【後美濃守】
五郎重勝也、且爲後證、澁谷左衛門尉重棟加判形訖、向
後不可有違乱變改之儀、仍去狀如件、

元弘三年十一月十日 平重利(花押)

左衛門尉重棟(花押)

1678 『入来院文書』

さつまのくにけたうゐんといりきのゐんのさかひ、一(二)野
々・かはとこの御けちつくしに候、とりよせてまいらせ
候へく候、かのむら／＼、御ほんちきやうのことくにさ
りわたしまいらせ候うへへ、しさいあるへからず候、御
けちをまいらせ候はんほと、このしやうを進候也、仍狀
如件、

元弘三年十一月十日 重利(花押)

(包紙) 『いちのゝ・かわとこ』

中こは・けとういん 井くろぎ中津河 判形
入来院さかいの事

1679 『正文在池端氏』

大隅國祢寢院南侯一分地頭祢寢弥二郎於知行分者、重下
使者候程者、不可有相違之狀如件、

元弘三年十二月二日 掃部助(花押)

1680 『正文在水引權執印』

(花押)

八幡宮領新田宮權執印良暹申、當宮々仕等并權大別當、
以被預置燈油料田等、入進質券、令闕如所役之由事、訴
狀具書遣之、子細見狀欵、爲事實者不可然、相尋彼宮仕
權大別當等、載起請之詞、念可被執進請文之旨、領家仰
所候也、仍執達如件、

元弘參年十二月十二日 沙弥(花押)

新田宮殿上檢校御房中

1681 『道鑑公御譜中』

『正文有之』

又久富狀二通、加一見候了、宇波崎・塩屋事申て候
狀者、是ニ可入候之間、留置て候、今一通ハ返進之
候、又山門院ハ故殿御存生之時より、半給分ニ給候
し間、殊更鹿倉事ハ存知候て候ほと、委細申候、
御文条々、委細承候了、

一里多尾爲牧内哉否事、牧内をは本田淨觀之時、就固立

候、実おひたしくて候し、里多尾者爲宗馬立て候、

故殿御狩之時、我々も実餘射て候し所にて候、立鹿倉

と申、馬立場と申、無不審候、牧内之外と申候之条、

勘法次第候、次誠牧内外と申候者、其支證を可出之由

被仰候て、可被相尋候、瀬浦・賀志浦・〔季子カ〕里里多尾・脇

平・宇波崎・塩屋崎・尾嶋・小名者皆替て候へとも、

何も牧内立鹿倉にて候、各別御申候覽事、返々不可思

儀候、

一久富百姓等追放事、追放候ほと之事者、重科現形候欵、

何事罪科ニ追放候けると、此段可被尋候、

一北原代官三郎太郎男私検断事、承候了、先日如申候、

道鑿手領事ハ、是にて可有沙汰候、彼仁等をハ是へ可

給候、又事次第をハ委可承候、

一其外問事者、先日も如申候し、諸事其にて可有沙汰候、

一博多肥後豊後合戦事、重合戦候て、官方打勝候、將軍

方皆被追散候之由、自或方申て候し間、無心本存候之

處、重合戦者無跡形事候之由承候、目出度候、旁以目出

承候事、返々悦入候、定それにも聞得候欵、恐々謹言、

十二月十八日

道鑿(花押)

1682

〔道鑑公御譜中〕

〔正文在出水野田山内寺〕

極樂寺住持職事有御住、被致天長地久之御祈禱執務候者、

恐悦候、恐々謹言、

正月十一日

道鑑(花押)

1683

〔伊作宗久譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

目安

嶋津大隅左京進宗久法師法名道惠雖抽拔群軍忠、未浴恩賞

愁吟無極子細事、

去年元弘四月廿八日 綸旨、五月廿二日嶋津惣領上總入

道鑑下賜之、同廿五日率一族以下群勢等、押寄鎮西管

領英時城墾之刻、道惠爲脇大將被差別群勢、捨身命懸先、

攻戦之間、自身被疵、親類郎從等致分取生虜、抽軍忠之

条、道鑑并大友近江入道具簡等遂檢見之子細具勒于狀、

被与奪奉行人大外記頼元方早、凡於脇大將者、惣大將一

烈被抽賞之条、傍例不可勝計、爰限道惠一人、被准雜兵

群勢等、相漏無偏之徳化者、忽可失弓箭之面目者也矣、

仍目安

〔右上傳ニ有之〕(案カ) 二条殿・久親・大外記以上三方進之
〔恩賞事目安〕 建武元二十六年

1684 〔道鑑公御譜中〕

薩摩國市來院名主職、豊後國井田郷地頭職菊王、爲勲功賞、可被知行者、天氣如此、悉之、以狀、

建武元年二月廿一日 左衛門權佐(花押)

嶋津上總入道(貞久)

〔右正文、旧御番所御文書ニ番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ〕

1685 〔權山氏文書〕

鎮西警固并日向薩摩兩國事、任綸旨、可被致其沙汰之狀如件、

建武元年三月十二日 御判

嶋津上總入道(貞久)

1686 〔調所譜中敦恒傳〕

建武元年甲戌、前此 後醍醐帝謀誅北條高時、皇師不克、帝如笠置、召楠木正成等、使以討賊、高時立 光嚴帝、兩帝分朝、戰爭日起、諸國大乱、敦恒在廳專致忠勤、二

條關白道平卿聞而有感、乃四月四日、使左衛門尉經清致目代書、以褒獎之、二條家乃謙徳公令弟兼家卿之裔族也、

1687 〔全家藏文書〕

二条殿御狀

(花押)

當國在廳調所彦三郎致忠勤之旨、被聞食早、神妙之由、可被仰舍之候國宣所也、仍執達如件、

〔時建武元〕

四月四日

左衛門尉經清

大隅國御目代殿

1688 〔道鑑公御譜中〕

〔正文在都之城野村大右衛門〕

薩摩國牛屎院篠原平九郎高國中、當院内別符村地頭職、爲勲功賞、被宛行由事、

綸旨如此、早山門弥次郎入道相共、可被沙汰付當村地頭

職於高國也、仍執達如件、

建武元年四月八日 沙弥(花押)

在國司入道殿

1689 『道隆公御譜中』

大隅國守護職事、任先例、可令致沙汰者、繪旨如此、

悉之、

建武元年四月廿八日

〔右衛門佐在判〕
勘解由次官
(高倉光守)

嶋津上總前司入道館

1690 『在樺山氏文書』

大隅國守護職事、任先例、可令致沙汰者、繪旨如此、

悉之、

建武元年四月廿八日

(高倉光守)
右衛門佐在判

嶋津上總前司入道館

1691 『比志島氏文書』

薩摩國滿家院内比志嶋彦太郎義範謹言上

欲早達 天聽、任善政、糺賜本物返地事、

右、壹所者、義範重代相傳之所領也、而此内山口田壹町并

竹内屋敷壹ヶ所、為同國伊集院大隅助三郎忠國童名大丸去

正□為本物返令入置于貳拾貫文之處、既過半倍送□

上者、早任證例可知行之旨、下預 御牒、為備向後龜鏡、

恐言上如件、

建武元年五月 日

1692 『全』

檢非違使廳下 薩摩國衙

當國滿家院内比志島彦太郎義範申山口田壹町并竹中屋

敷壹所本物返事

右、訴狀如此、早令尋成敗、有子細者可被注進者、

建武元年五月六日

左衛門權少尉(ヨシムネ) (花押)

1693 『都城富山氏藏』

日向國富山鋪房快實申、嶋津庄日向方北郷宮丸名内富永

成清等事、舍兄同孫四郎義恒隱蜜親父富山掃部左衛門入

道覺成讓狀、押領下地無謂、所詮、快実所帶任親父覺成

讓狀案文、快実可令執行之狀如件、

建武元年五月十日

源朝臣御はん

1694 『安養院文書』

(花押)

大隅國向嶋西方奉河原道勝安置香福寺藥師如來之敷地并

佛聖燈油田等事、任伊賀法橋快秀置文之旨、所奉寄進當

寺也、早天長地久、殊可申本家領家之御祈禱也、且雖爲何預所弁濟使、此寄進分、向後永不可有違乱妨之由、依領家仰、下知如件、

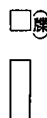
建武元年五月十七日

法眼隆然奉

1696

『入來院氏文書』

雜訴決斷所



相模國吉田上庄上深屋村內北尾屋敷田畠在家立野、美作國河會庄十町南村內土志谷村田畠在家、薩摩國入來院中村內副田村田畠在家等事、
右、當知行不可有相違者、以牒、

建武元年六月三日

少判事中原朝臣(花押)

左中弁藤原朝臣(花押)

1696

『山田文書』

嶋津式部孫五郎入道之慶謹言上

欲早谷山郡司五郎入道覺信代教信預武家御下知并勅

定違背咎、捧請文上、被書下彼狀於銘、薩摩國谷山郡

山田・上別符兩村地頭所務同得分物等事、

右、巨細先進言上、事舊訖、爰就帶道慶武家御下知、於

決斷所被經重之御沙汰之刻、覺信代教信恐于勅定違背之咎、捧請文之上者、欲被書下彼狀於銘、但教信云所務如元可返付之篇、云抑留得分物可糺返之段、令承伏之上者、雖書載不實於請文、爲枝葉之間、不能委述、若及御

不審者、追可令言上也、仍恐之言上如件、

建武元年六月 日

1697 〔全〕

薩摩國谷山郡內山田・上別符兩村惣地頭所務事、式部孫五郎入道之慶可破正中二年和与狀之由、掠給鎮西下知狀之間、件裁許爲非據之条、去年於決斷所御沙汰訖、而於和与契約得分物者、任先例、於郡司所倉可勘渡之由、載和与狀之處、以前五ヶ年分內半分於京都可沙汰之由、被仰出間、在京計略依難爲治、彼兩村惣地頭所務如元可返付道慶之由、去年十二月十七日捧請文之處、今月十三日於決斷所如被仰出者、於惣地頭所務者、可返付道慶云、以前五ヶ年惣地頭得分物、來九月中可勘渡于道慶之由、被仰下候之条、爲代官身難治之由雖相存候、應上裁、捧請文候、所詮、遂結解、地頭得分之內、於用途者、可致九月中沙汰候、至未分者、九月中難治之間、十一月中可

勘渡候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武元年六月十七日〔甲戌〕 沙弥覺信代教信請文

〔此判ニツラ真
中ニ有之〕
〔合奉行入願進〕
〔合奉行入奉有〕
〔奉行入明成〕
〔ワラニアリ〕
〔花押〕
〔花押〕
〔花押〕

1698 『山田氏文書』

〔本文書ハ一六九七号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1699 「蒲地氏文書」

〔花押〕

薩摩國河邊郡内黒嶋郡司職事、以円覺如本所被返付也、
可被存知其旨之由、依仰執達如件、

建武元年六月廿六日 觀忍奉

千竈六郎左衛門入道殿

1700 薩摩國河邊郡内黒嶋郡司職事、自京都所宛給六月廿六日

任御〔審之〕□下之旨、如本可致其沙汰之狀如件、

建武元年七月十七日 (花押)

黒嶋郡司入道

1701 『写誦訪数馬家蔵』

注進

建武元年七月三日嶋津庄日向方南郷濫妨狼籍謀叛人等

交名人等事

遠江掃部助三郎〔規矩高政〕 高時一族

同舍弟助四郎

筒井了覺縁實

野邊孫七盛忠

竹井六郎兵衛尉

同与一

同弥三郎

橋口太郎左衛門入道一類

中野助法橋隆増

平良執行入道円意一類

栗屋毛八郎左衛門尉守時家人

久所十郎兵衛入道同家人

末次大夫房

上井治部房

宰相房

西生寺大貳房

同少輔堅者

同加賀阿闍梨

布施四郎兄弟高家人

肥後兵衛次郎入道淨心同

津野四郎兵衛入道父子五人

救二郷源太守時家人

同郷弁濟使藏人宗頼一類

高木孫三郎

中務嶋太宮司藤内兵衛尉一類(霧之)

角二郎入道等一類

梅北孫太郎貞兼當郷弁濟使

三俣先公文次郎左衛門尉重久兄弟

檢崎次郎左衛門入道

同右衛門四郎

松崎平次郎

富山十郎義治

串良弁濟使孫六

中野左衛門四郎兼冬

右、此外數輩雖有之、且注進如件、

建武元年七月 日

地頭代沙弥道喜判

1702

「伊作家文書在文庫」「伊作久長譜中正文在卷本トアリ」

預置 御用途事

合參拾貫文者

右、爲御使葛部殿沙汰、所預置之狀如件、

建武元年八月十九日

左衛門尉憲俊(花押)

1703

『入來院氏文書』
(端裏書)
「きよしき殿より」

甲戌ふたむれのとくふんちうもん」

ふたむれの六郎二郎入道のさいけの一年中のとくふん

ちうもんの事

そたう 一七石七斗 延米とかきの定

一壹貫三百文 くわ代

一五百文 あい・あかねの代

一三百九十五文 ふようとう

一壹貫文 くうしれう

一三百文 からをのしろ

一百文 とりこのいと

一三百文 そのゝはくのそたう

のいねのはらのさいけくわうや

一七反延米一石五斗五升のいねのはら

せに三貫八百九十五文

よね九石二斗五升

けんむくわんねん九月八日

御大くわん浄慶(花押)

1704 『臺明寺文書』

雜訴決断所牒 大隅國臺明寺

可令早任先例、停止寺内甲乙人乱入狼藉及狩獵、莊嚴

笛竹、抽御祈禱精誠事、

牒、任久安六年藏人所外題・建仁二年同所下文并天福以

來武家度々下知狀等、停止寺内甲乙人乱入狼藉及狩獵、

莊嚴笛竹、可抽御祈禱之精誠之狀、牒送如件、以牒、

建武元年九月十日

左少史兼左衛門權少尉高橋朝臣(花押)
(後卷)

中納言兼侍從藤原朝臣(花押) 前筑後守藤原朝臣(花押)
(九条公明) (小田貞知)

從二位藤原朝臣 左衛門權少尉中原朝臣(花押)
(四条隆實) (近衛隆政)

正三位藤原朝臣(花押) 左衛門權佐兼少納言侍從伊賀
(堀河光盛) (岡崎範國)

守藤原朝臣

左少弁藤原朝臣
(高倉光守)

〔此正文、旧御番所御文書二番箱中臺明寺文書之二卷中ニ在リ〕

1705

『樺山氏文書ニアリ』

『道鑑公譜中』

鎮西警固并日向薩摩兩國事、任綸旨、可被致其沙汰之狀
如件、

建武元年九月十二日

傳氏 (花押)

嶋津上總入道殿
(貞久)

「右、御宝鑑中ニアリ」

1706

「御番所旧御文書二番箱中御宝鑑三帖ノ内ニアリ」

鎮西警固事、於日向薩摩兩國者、致其沙汰、殊可抽忠節

者、天氣如此、悉之、以狀、

建武元年 九月十日

左衛門權佐(花押)
(岡崎範國)

嶋津上總入道館
(貞久)

1707

「御文庫伊作家文書三番」「伊作家久譜中正文手鑑有之トアリ」

雜訴決断所下 嶋津左京進宗久法師道名所

薩摩國伊作庄半分南方并日置北郷半分南方等地頭職事

右、件所々地頭職、道惠當知行不可有相違之狀、下知如件、

建武元年九月廿九日 左少史高橋朝臣(花押)

中納言兼侍從藤原朝臣(花押) 前筑後守藤原朝臣(花押)

從二位藤原朝臣 左衛門權少尉中原朝臣(花押)

正三位藤原朝臣 左衛門權佐兼少納言侍從伊賀守藤原朝臣

左少辨藤原朝臣

1708 『山田氏文書』

雜訴決断所下 忠能并龜三郎丸所

薩摩國谷山郡内山田・上別符兩村地頭職事

右、件兩村地頭職、忠能并龜三郎丸、當知行不可有相違之狀、下知如件、

建武元年九月廿九日 左少史高橋朝臣(花押)

中納言兼侍從藤原朝臣(花押) 前筑後守藤原朝臣(花押)

從二位藤原朝臣 左衛門權少尉中原朝臣(花押)

正三位藤原朝臣 左衛門權佐兼少納言侍從伊賀守藤原朝臣

左少辨藤原朝臣

1709 『正文在權執印』

〔引返シウラニ〕 國宣案 本物返事 建武元年十月七日 到同二四六日

當國々分助二郎入道々然申、石塚四郎入道・同三郎入道

・在國司女子中禪尼・天辰与次清三入道・新田宮權執印

・武光一郎大郎入道・泰平寺禪行・谷山孫八等、本物返

田地抑留由事、申狀十通副具書等、遣之、不日企參上、可明

申之由、面々相觸之、急速可被申散狀、若有異子細者、可有注進旨、國宣如此、仍執達如件、

建武元年十月七日 散位在判

薩摩國在廳武光三郎殿

1710 『入來院氏文書』

雜訴決断所牒 平氏女字寅三所

美作國平野村内色田壹町事

牒、當知行不可有相違者、牒送如件、以牒、

建武元年十月八日 右大史成志安倍(花押)

少判事兼左衛門少尉中朝臣(花押)

正二位藤原朝臣(花押) 前丹後守大江朝臣(花押)

正二位藤原朝臣(花押) 明法博士兼右衛門大尉中朝臣

從三位平朝臣(花押)

式部權大輔藤原朝臣(花押) 右中弁藤原朝臣(花押)(類教)

1711 『山田氏文書』

雜訴決断所牒 薩摩國守護所

嶋津式部孫五郎入道之慶子息忠能申、當國谷山郡内山

田・上別府兩村所務并得分物事、

牒、件兩村所務以下事、任谷山五郎入道覺信代教信請文、

宜知行之由、令下知之狀、牒送如件、以牒、

建武元年十一月十一日 左少史高橋朝臣在判

中納言兼侍從藤原朝臣御判 前筑後守藤原朝臣在判

修理大夫藤原朝臣 左衛門少尉中原朝臣在判

正三位藤原朝臣 左衛門權佐兼少納言侍從伊

賀守藤原朝臣

左少辨藤原朝臣

1713 『山田氏文書』

豊前國草美彦三郎入道跡、式部孫五郎入道道慶可令知行

者、天氣如此、悉之、以狀、

建武元年十一月廿六日

左衛門權佐判(網略範圍)

1714 『山田氏文書』

嶋津式部孫五郎入道之慶子息諸三郎忠能申、薩摩國谷山

郡内山田・上別符得分物事、御牒并訴狀如此、可被奉行

之由候也、仍執達如件、

建武元年十一月廿七日

成阿(花押)

有保三郎入道殿

1715 『道鑑公御譜中』

〔正文在渋谷如兵衛重増〕

白濱三郎入道之欽・寄田弥三郎道緒申、薩摩國入來院内

上副田村地頭職各半分事、薩摩郡之司弥太郎相共可被沙

汰付道欽・道緒等也、仍執達如件、

建武元年十二月十八日

沙弥(花押)(貞久)

牛屎郡司入道殿

1712 『伊作宗久譜中』

〔正文在手鏡〕

筑後國小家庄地頭職志田三郎左衛門尉跡爲勲功賞、大隅左京進入道

道惠、可令知行者、天氣如此、悉之、以狀、

建武元年十一月廿六日

左衛門權佐(花押)(網略範圍)

「伊作宗久譜中」

「案文在山田七郎右衛門久通」

嶋津大隅左京進入道、惠謹言上

欲早任恩賞 綸旨、被成下御牒(於筑カ)後國、司守護、被

沙汰居下地、當國(小カ)庄地頭職(志田三郎)事、
(左衛門尉跡)

副進

一通

右、地頭職者、道惠爲勲功賞、所被拜(領候カ)、早任 綸旨、

仰于國司守護、賜御牒、沙汰居下地於道惠、爲全知

行、恐、言上如、

建武元年十二月 日

『入來院氏文書』

和与

澁谷平六重氏(今者)死去、女子等与同重躬子息彦次郎重時(今者)死去、

舍弟鬼益丸相論、重氏跡所領等相模国吉田庄内上深屋

北尾屋敷田島立野、美作国河江庄内龜石・土師谷田島

山野、阿波国大野新庄内八分壹、薩摩国入來院内下副

田村田島在家山野等事、

右所、者、爲重氏死去之跡間、鬼益丸雖帶大塔宮令旨并(護良親王)

吉田一位御牒、所詮、以和与之儀、至永代、子、孫、止(定男)

彼所、望上裁違乱、付女子方畢、此上爲後證一族等所令

加連署之判形也、隨而、重躬子息鬼益丸所令拜領令旨御

牒等正文、一通不殘、女子方令渡進早、若猶以後日、云

重躬子息等餘流、於致沙汰者、以一族一同之儀、被經

上裁、罪科可被行申者也、仍爲後代龜鏡、和与之狀如件、

建武元年十二月十九日 鬼益丸代藤原家綱(花押)

沙弥定重(花押)
(祐重)

平 重文(花押)
(高元)

平 重親(花押)
(重德)

平 重躬(花押)

平 重房(花押)

沙弥定圓(花押)
(重基)

『道鑑公御譜中』

其後同条御事候哉、承度候、雖何ヶ日不申入候、聊不存

等閑候、御同心ニ候者所仰候、抑京都御教書并御内書到

來候、自當方可付申由、被仰下候間進候、急、御請文可

然候、隨而任御教書之旨、御發向候者、先此境ニ御出、

可目出候、諸事申談、同心ニ可注進仕候、恐、謹言、

十二月廿五日

貞頼(花押)

嶋津上總入道殿

1719 「伊作家二代宗久譜中」

「案文在山田七郎右衛門久通」

目安

嶋津左京入道道惠代道慶恐言上申候、筑後國小家庄
地頭職事、

一通 繪旨

右、地頭職者、志田三郎左衛門尉跡、爲勲功賞、去年十一月廿六日道惠拜領之間、任法可被沙汰居下地之由、就令言上、爲章緒奉行、去十一日御沙汰之時、披露之刻、号當庄本主、志田三郎兵衛尉今年正月捧案堵(ト)、爲御奉行、同日申沙汰之間、就之可有御奏聞之由、有御沙汰間、

1720 「右書之裏ニ有之」

御牒哉、御沙汰參差畢、朝敵与同之族落通之後、經年月不蒙 勅免、号本主掠給安堵、繪旨、於令濫妨勲功地者、恩賞拜領之輩爭可全知行哉、其上安堵、繪旨事、去々年十月以後一向止之、被与御牒之處、如此黨類、以不知行之地掠給御牒、令濫妨所々之間、是又去年十月以後于今被聞之、敢無御沙汰、何況於 繪旨哉、尤不可有之欵、將又本領并由緒地所望事、無別功者不及御沙汰云々、彼仁朝敵与同之後、別功何事哉、不顧身之咎、猥及上訴之条、罪科重疊也、旁以難及對揚欵、所詮、於其身之許否、繪旨之眞偽者、宜爲上裁、至當庄者、爲勲功賞上者、先賜御牒爲全知行、恐々目安如件、

建武二年二月 日

章緒返答候条、令參差者也、如道惠所給 繪旨者、志田三郎左衛門尉跡云々、武州誰人哉、不審也、若假名欵、本主志田三郎左衛門尉者、関東兩國司・右馬權頭持時重代(北条茂時)祗候人也、仍彼跡守護人度々關所注進之間、道惠去々年博多合戰之時、爲脇大將自身被疵之上、家僕郎從等大略手負生虜分取等數輩之間、依彼賞令拜領之上者、爭可被押

仕候ところに、かゝるわつらひいてき候よしを、一句書入候ハ、や、かせんのしたいをいゝのせ、ねんころにたつねき候しあひた、かやうに存候、もし又目安を御そらんなんともや候はんすらん、それにつけても、一句入たく存候、かやうの事も委申承候へとて、けさまいりて候へ共、ものへ御出とて見參入候へて、罷かへりて

候、此事廿日披露申候へんする、とうかんあるましきよ

しを申され候、いづれも御あんを給候て、御書は人
にあつらへて書候へく候、さのミ早と恐入候、恐と謹言、

二月十八日 とう慶(花押)

進候

「目安案 伊作殿拜領小家庄事」

「山田氏文書」

1721 嶋津式部孫五郎入道と慶謹言上

欲早任國宣賜御施行、被止大隅五郎太郎入道と智子息

助三郎入道と助【宗久初室へ道助ノ妹】死去、并同女子藤原氏【今者】等跡輩知

行、薩摩國伊集院内嶋廻田地・古江園・源太迫・桑迫

・三小原・馬渡田・世戸口田地并福山村内山下田・

古葉田園等事、

副進

一通 國宣案

右、田園等者、道慶相傳之地、入置質券本錢返等之間、

任傍例就訴申、被成下國宣畢、早任彼狀、賜御施行、如

元欲全知行、仍恐と言上如件、

建武二年二月 日

1722 『池端氏文書』

ゆつりわたす

大すみのくにねしめのゐんさたのむらの内【孫 松 寿 丸】はまた七た

ん、をなしきやまのくちのそのらの事、

みきのでん【田 圃】ゑんらへ、れんふくかちうたいさうてんのし

りやうなり、しかるにひこまつしゆまろニ御くたしふミ

いけのせうもんらをあひそへて、ゑいたいをかきりてゆ

つりわたすところなり、よてこ日のためにゆつりしやう

くたんのことし、

けんむ二ねん二月十日 れんふく(花押)

1723 『調所氏譜敦恒傳』

建武二年乙亥二月、前此在廳官等動至侵掠敦恒以調所書

生及主神司職所食職田等、至是敦恒陳實白諸其目代、目

代以聞二條關白良基卿、乃二十四日、使左衛門尉經清致

目代書、以諭敦恒勿必變之、四月二十四日、目代得報、

乃傳敦恒以國宣旨、亦二條家謙徳公令弟兼家卿之裔族也、

1724

「全文書」

二条殿御下状 在御判

當國調所^(書)生并主神司職等事、知行不可有相違之由、可

令下知在廳敦恒給之旨、國宣所候也、仍執達如件、

建武二年二月廿四日 左衛門少尉經清

大隅國御目代殿

1725

『全文書』

「關東御下知之狀」

大隅國調所書生并神司職以下得分等事、傍輩在廳等動任
雅意押妨之由、訴申之間、令注進國前之處、國宣如此、
於向後者、不可有其煩候、仍執達如件、

建武二年四月廿日 目代源在判

調所彦三郎殿

1726

『秩父氏文書』

内裡大番從來三月朔日可致勤仕薩摩國地頭御家人交名
之事、次第不同、但、當參分鎧甲直垂、^(調度懸)てうつかけあ
るへく候、以上、

大隅次郎三郎 式部孫五郎 周防藏人

澁谷新平入道^(重基) 澁谷小次郎 矢神左衛門五郎

澁谷弥次郎 澁谷彦三郎入道 知覽四郎

光富又五郎 指宿郡可入道 朝岡孫三郎

建武二年二月晦日

1727

『比志嶋氏文書』

内裡大番^{自三月}可致勤仕薩摩國地頭御家人交名事、^{次第不}
同、但^{當參}鎧直垂、てうつかけ有へし、

大隅二郎三郎 式部孫五郎入道

周防藏人三郎 澁谷小四郎入道

澁谷新平二入道 澁谷弥二郎

矢上左衛門二郎 智覽四郎

澁谷彦三郎入道 光富又五郎入道

指宿郡可入道^{「孫一」} 朝岳強三郎

比志嶋^(義範)彦太郎

建武二年二月卅日

1728

『入來本田氏文書』

下

可早以本田孫次郎久兼、為薩摩國山門院内本田左衛門
次郎親兼跡半分除塩屋、代官職事、

右以人、為彼職、守先例、可致其沙汰之狀如件、

建武二年三月十一日 道鑑(花押)

1729 『写在藤野氏』

所被補大隅國守護職也、存其旨、可致沙汰者、天氣如此、悉之、以狀、

建武二年三月十七日 左衛門權佐(花押)

嶋津上總(貞久)前司入道館

「右、御宝鑑中ニアリ」

1730 『比志島氏文書』

(花押)

契約 薩摩國滿家院之内郡名、小山田・油須木・東俣井比志嶋等御年貢事、

上原三郎久基

比志嶋彦太郎義範

右以人、所補任彼職也、任被請申之旨、有限御年貢以下、如先例、可被致其沙汰、如此契約之上者、無別咎者、更不可有改易之儀、仍名主百姓等宜承知、敢勿違失、故以下、

建武二年三月廿七日 良舜奉

1731 佛身(寺脱之)領薩摩國滿家院内郡名、東俣・油俣木(須カ)井比志嶋名御年貢事、

合伍貫文者

右、兩名分建武元年御年貢送、所請取如件、

建武貳年三月廿七日 良舜奉

(花押)

1732 佛身寺領薩摩國滿家院内郡名御年貢事

合壹貫文者

右、建武貳年分御年貢分、且所請取如件、

建武參年二月廿七日 良舜奉

(花押)

1733 嶋津式部孫五郎入道・慶子息藤原忠能重言上

薩摩國谷山郡司五郎入道覺信他界間、其子細守護所注

進上者、對於彼跡子息平五郎左衛門入道隆信相傳當知

行上者、重欲給御牒、當郡内山田・上別符兩村抑留年

々地頭得分物等事、【此二字元本落之】

副進

一通 覺信代教信請文

一通 御牒

右、兩村地頭職者、親父道慶重代相傳之地也、而爲全得分物、令契約覺信之處、背契狀之間、武家沙汰之時、就訴申、道慶預度之下知畢、天下一統之後、捧彼狀及上訴、爲俊春御奉行、忝賜決断所御牒之處、於地頭所務者、雖去渡之、至得分物等者、背覺信請文、猶以不叙用之間、被仰下國司守護所之刻、覺信去年十二月令他界畢、爲亡者之上者、對於彼跡相傳隆信、被下御牒、爲糺賜以前抑留得分物等、恐恐言上如件、

建武二年三月一日

(雜目裏判)
(花押)

1734 『入來院氏文書』

(繪裏書)
「牒案」平野(村分)
(花押)

雜訴決断所 牒 美作國冨

當国林野保内平野村一分地頭平氏女申、四郎左衛門尉(貞三)

當村内色田壹町濫妨事、副申狀
具書

牒、無所申相違者、止其妨可全知行、若有子細者、宜被注進者、牒送如件、以牒、

建武二年五月七日

左兵衛尉源

按察使(兼室長隆)藤原朝臣 判在

正二位藤原朝臣

從二位藤原朝臣 判在

右大史(成定)安倍 判在

左衛門少尉田使宿祢 判在

右衛門少尉中原朝臣(高倉兼朝) 判在

右中弁藤原朝臣

1735 「伊集院氏弥五郎久兼譜中」

「正文在高岡衆指宿左近兵衛忠實」

薩摩國揖宿郡司彦次郎入(道成)榮申、山口三郎入道了一跡

并(御書)書如此、早任被仰下之旨、急速可參洛之旨、矢上

左衛門五郎相共、相觸了一跡輩、可被執進請文、若不叙

用者、載起請之詞、可被注進也、仍執達如件、

建武二年五月廿五日

伊集院弥五郎入道殿 (貞久)
沙弥(花押)

1736 「道鑑公御譜中」

「正文在高岡衆平山左京」

筑前國箱崎八幡宮之事、往代當門跡由緒之舊領候、如元被加還附之下知候者、別而可爲武運長久懇祈候、猶申舍

仁秀法印候也、

五月廿八

(花押)

嶋津殿

建武二年乙亥、尊氏兄弟爲朝敵、同十一月二十五日、蒙討手宣旨、

1737 『見太平記』

北條相模二郎時行爲誅討、建武二年七月、奉勅高氏閔東發向之時、天子賜諱之字、改高字稱尊氏、且復許東八ヶ國官領、又征夷大將軍之號者、可依今度忠否云々、

1741 『入來本田氏文書也』

足利尊氏・同直義以下輩有反逆企之間、所被追討也、針原孫二郎久兼發向鎌倉、可被致軍忠者、天氣如此、悉之、以狀、

1738 「都城本田某文書」

薩摩國役所二条万里小路大番事、自今年三月一日至同七月一日、山門院内針原・横峯・内野分、所被勤仕也、仍狀如件、

1742 『水引執印文書』

雜訴決斷所牒 薩摩國守護所 當國一宮八幡新田宮所司神官等申、沽却并質券地等事、

建武二年七月六日
〔兼阿也〕
本田孫二郎殿
沙弥〔花押〕

解狀具書

1739 「御家譜ニハ本田伝藏トアリ」
『本田兼阿傳 入來本田氏文書也』

(本文書ハ一七三八号文書ト同文ニツキ省略ス)
「此文書、道鑑公御譜中ニアリ」

牒、爲糺決、來十月十日以前、可參洛之旨、相觸東郷三郎左衛門入道已下交名人等、可執進面々散狀者、牒送如件、以牒、

1740 『全』

左中辨藤原朝臣
(中御門宣明)

建武二年八月十一日
前筑後守藤原朝臣〔花押〕
(小田貞知)
明法博士兼左衛門權少尉
(近衛兼政)
左京大進中原朝臣〔花押〕

1743

『山田氏文書』

仰給候谷山郡山田・上別符檢断物事、任御教書之旨、可令參向候之處、折節依所勞火急候、言上其子細於御請仕候了、恐々謹言、

八月九日

〔朱ニテ〕「加世田別府地頭代」
僧仁卷在判

〔上カキニ〕
「かせたの別符のちとう代の返事のあん、山田・上別符のけんたんさ

たの事 御けうそつけらるゝよしの事」

1744

『道鑑公御譜中』

「太平記三十三四ニ有之」

足利宰相高氏奉可誅討北條相模次郎時行之 勅命、欲赴關東、于時所許東八ヶ國管領、且復賜 御諱尊字、改高字稱尊氏、已於遠江國初合戰得勝利、誅時行於鎌倉、振武威於關東之際、與新田左兵衛督義貞忽爲氷炭、是以義貞裁奏狀、請追討乎尊氏兄弟、且有讒口亂眞者、任義貞之請、建武二年乙亥十一月八日、義貞率六萬七千餘騎、進發京都赴東海道、又擲手大將 大智院宮・彈正尹宮已下、士大將江田修理亮行義・大館左京大夫氏義・島津上總入道・同筑後前司已下率一萬餘騎赴東山道、三日後義貞也、

1745

『道鑑公御譜中』

「正文在財部兼川田勘助義治」

河田智門房慶喜申、薩摩國宮里郷内正岡名下床並田地六反本物返由事、訴狀二通副具如此、子細見狀欵、早遂結解、過半倍者、可返付本主、若論人石塚三郎入道覺念・莫祢源朝房跡及異儀者、召調一問答訴陳、薩摩郡司弥太郎相共可被注進也、仍執達如件、

建武二年八月廿七日

〔貞念〕
沙弥(花押)

國分助次郎入道殿

1746

『藤野氏文書四十三通ノ一』「此文書道鑑公御譜中ニアリ」

太政官符大宰府

應令貞久法師領知、中宮職領管大隅國寄郡内下大隅郡大柵寢院、鹿屋院、串良院、小原別符、西俣村、百引村、横河院、曾小川村地頭領預所職事、

右、得彼職去月廿六日解狀備、件庄庄者、爲當職領重色之地、貞久法師致知行、所勸課役也、望請恩裁、以貞久法師、爲件庄預所職、被定置之年貞、無懈怠者、不可有向後牢籠之旨、將被下官符、弥專勸役者、從二位權中納言兼春宮權大夫左衛門督大學頭藤原朝臣實世宣〔洞院〕奉 勅、

依讀者、府宜承知、依宣行之、符到奉行、

修理左宮城使從四位上行左中辨兼春宮亮藤原朝臣(中御宣明)(花押)

修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰(花押)

建武二年十月七日

「右、御宝鑑中ニ正文アリ」

(本文書、字面ニ「太政官印」三アリ)

「權執印文書」

1747

薩摩國一宮八幡新田宮所司神官等申、沽却并質券地□

決断所御牒副訴狀具書、并御奉書如此、早任被仰下旨、可被申

散狀候、仍執達如件、

建武二年後十月一日

沙弥覺(ヨメズ)□

權執印御房

1748 『入來院氏文書』

可誅伐新田右衛門佐義貞也、相催一族、不日可馳參之狀

如件、

建武二年十一月二日

左馬頭御判(直義)

澁谷新平(重基)二入道殿

1749 「在文庫」

所被補大隅國守護職也、存其旨、可致沙汰者、天氣如

此、悉之、以狀、

建武二年十一月十七日

左衛門權佐御判(尚崎範國)

嶋津上總前司入道殿(貞久)

「義目裏判」
「花押」

「此文書、道鑑公御譜中写有之卜片書アリ」

1750 『在太平記十四卷』

建武二年十一月八日、尊氏・直義爲追討新田左兵衛督義

貞進於京都、東山道之勢者擲手故、三日引後進發、大將

大知院宮・彈正尹宮、士大將十餘人之内、嶋津上總入道

・同筑後前司在之、

1751 『在同十五卷』

建武二年正月廿日、去年鎌倉攻ニ下向之軍衆、東坂本上

着、其内嶋津上野入道・同筑後前司在之、

1752 『廣濟寺文書』

伊集院寺脇内円福寺阿弥陀堂免櫛平蘭壹所并小山下田三

段事、件園寺桑代地利物公事檢断加徵米等、阿弥陀堂七

所奉免除也、但於大犯者除之、仍狀如件、

建武貳年十一月廿七日 (伊集院) 助久判

「伊集院氏三代忠親ノ弟左兵衛尉助久ナリ」

「伊集院氏譜中ニ在リ、助久疑ナシ」

1753 『写在新納嫡家』

下 嶋津下野四郎時久

可令早領知日向國新納院地頭職之事

右、爲勲功之賞所宛行也、任先例、可領掌之狀如件、

建武二年十二月十一日

「新納家元祖時久ノ譜中ニ在リ」

1754 『伴譜兼重傳』

建武二年乙亥、初

後醍醐帝謀誅北條高時、徵武士土岐頼兼等、高時間知、

乃殺頼兼等、尋欲廢

後醍醐帝、

帝如笠置、使大納言師賢招叡山徒、召楠正成於河内、命

以討賊事、高時乃立

光嚴帝、戰爭日起、

後醍醐帝又如隱岐、自隱岐如伯耆船上山、當此時足利高

氏克六波羅、新田義貞取鎌倉、

光嚴帝廢、我

道隆公等殺探題英時於博多館、

後醍醐帝還京師、去正慶年號、至是尊氏・義貞爭權交惡、

十月、

帝右義貞、詔討尊氏云々、正成既奉 詔、爲

帝深竭忠策、以討賊軍、十二月、兼重亦遙奉其詔、乃據

三俣院高城、菊池掃部助武俊據肥後菊池城、伊藤藤内

左衛門尉祐廣據諸縣莊八代城、皆一厥心以應義貞軍、

各舉部下兵、劫掠隣近、武威大振、十三日、伊藤祐

廣及伊藤弥七・伊藤弥八・益戸弥四郎行政等、收兵略

地、入國富莊、肥後健軍、日向國富莊及島津庄等、當時保足利氏邑、見比志島氏古書、

1755 『日向記』

建武二年十二月十三日、鬪乱依有其聞、祐持モ土持一族

ヲ相伴ナヒ、欲令上洛之處ニ、義貞方祗候人伊東藤内左

衛門祐廣・同一族弥七祐貞・同弥八祐勝・益戸孫四郎行

政・同四郎兵衛尉秀名以下凶徒等、國富庄以下所々令乱

入、同十五日、右一族穂北郡司平嶋三郎以下黨類、國富庄河北富郷楯籠政所、依致濫妨狼籍、相隨彼黨類、國中平均ナラシメント披露シ、同廿七日、一族井土持・矢野・河越等相伴、揚旗宿所ヲ打出、同廿九日ニ、伊東弥七・同弥八宿所場ニ押寄追落之、燒拂、然ニ伊東藤内左衛以下凶徒等、同廿四日、足利殿御領島津庄穆佐院政所ニ楯籠、逮于合戰、殺害シ、放火狼藉致スノ間、同一族井土持一黨ニ左衛門太郎親綱・同次郎重綱・惟信宣榮以下馳向、同晦日一日一夜於彼城散々合戰シ追落シ、祐廣親類若黨以下數十輩討捕ケル云々、

1756 「高尾野士出水氏文書」

讓与 三郎五郎保音

薩摩國和泉庄久成名内御既田壹町貳段久光名内南部横

枕壹町井口斤新開天三段久吉事
役久事

右、彼所領者、眞證相傳當知行之地也、而保音依立嫡子、爲代官令上洛之間、先於件田地者、所讓与也、相殘所領者、追可讓与、此上者無他妨令知行、於有限御公事者、隨于分限可令勤仕者也、次自然号眞證子息、成其煩之輩者、可申行罪科之狀如件、

建武貳年十二月十八日 沙弥眞證(花押)

「右ノウラ」
「爲後證、封裏字」 (花押) (花押)

1757 「藤野家文書」

字孫石丸所

右人、爲彼寺別當職、於有限寺役等者、任先例、致沙汰、可抽御祈禱忠之狀如件、

建武二年十二月廿一日 寶日(花押)

祐心(花押)

1758 「伴譜忠重傳」

建武二年十二月二十三日、大宰少貳賜杉左衛門次郎保有

入道書曰、去月二日教書、使討新田義貞、宜率一族來會

之、二十四日、祐廣取穆佐城、本院政所亦
係尊氏封邑 弥七・弥八據

堤宿所、

1759 「高尾野士出水藤之丞藏」

被誅伐新田右衛門佐義貞由事、如去月二日關東御教書者、相催一族以下軍勢等、可馳參云々、任被仰下之旨、不日可被參上候、仍執達如件、

建武二年十二月廿三日

大宰少貳(願也)(花押)

一杉左衛門次郎入道殿
「イナシ」

1760

一廿六日、大宰小貳賜富光九郎道貞書曰、去月二日教書、
使討新田義貞、宜率一族來會之、

1761

「富光氏文書」

被誅伐新田右衛門佐義貞由事、(如脱之)去月二日関東御教書者、
相催一族已下軍勢等、可馳参之由、任被仰下之旨、不日
可被参上候、仍執達如件、

建武二年十二月廿六日

大宰小貳(願也)(花押)

富光九郎殿
(道貞)

貞久公 建武三年

前 舊 記 雜 錄 卷 十 八

〔國史道鑑公〕

建武三年丙子南朝廷元元年、春正月二十七日、足利尊氏與官軍

戰於京師、平記、拋道鑑公伯譜、島津道慶、稱左衛門尉、孫次郎、改久

兼從、公戰於鴨河原、有功、系圖、所載道鑑公一見狀、國

分又次郎友光、從、公戰於法城寺、有功、拋道鑑公、拋道鑑公、大館氏明、

光言上狀、按太平記、建武三年正月二十七日、山門大衆攻神樂岡城、北

之、楠判官上杉伊豆守、島山修理大夫、足利尾張守、擊破尊氏軍、參考太平

自雙林寺將軍塚法勝寺、出二條河原、鴨川白河、擊破尊氏軍、參考太平

記引梅松論云、正月二十七日辰刻、義貞破尊氏、直義軍于河原、月日

並與一見狀言上狀合、但初說太平記、嫌於戰在二十八日、然細觀之、則云

則云二十六日、官軍諸將宿下松山科等處、以明日辰刻為戰期、即月日

時刻、皆與梅松論合、但太平記以此戰為建武二年事、與一見狀不合、參考

參考、則建武二年四字、蓋疑之也、今按太平記、建武二年十月、新田

足利、上確執狀、十一月宣旨、遣義貞討尊氏、不克而還、尊氏引軍西

上、明年正月八日、尊氏軍八幡山下、敗義貞、義助、帝幸東坂本、十

一日、尊氏入京師、十二日、北畠顯家至近江愛智川、翌日至東坂本、

十六日、遲明、義貞、顯家攻三井寺、下之、已而顯家反東坂本、尊氏入京

師、擊破尊氏軍、大破之、二十七日、又大破之、則為建武三年正月二十

日事明矣、而太平記以為建武二年事、其說自相矛盾、蓋三二異同、只

爭一畫、太平記始作三、其後互傳、誤欠一畫、遂為二字、於是因襲相

承、不復細考、至彰考館諸儒、乃始覺其謬云、法勝寺言上狀、作法城

寺、統本朝通鑑文保元年春正月、地大震、洛中白河人家、法勝寺

寺、法城寺堂宇門樓傾倒、蓋法勝寺、法城寺並在洛中、法城寺疑是法成

寺、然堀都名所因會、洛中並無法勝寺、法成寺、法城寺、關疑可也

軍士自叙其戰鬪功、上於主將、主將書之曰、一見畢、因面押、宇都宮

字以還其人、是謂一見狀、又有書曰、承畢、亦是一見狀之類、拋太、二

紀清兩黨、據神樂岡、是日山門衆徒攻拔之、拋太、二

十八日、本田久兼戰於神樂岡下、獲敵三人、島津道慶

生捕名和長年家僕和賀尾弥太郎及兵衛二郎、因公以

聞尊氏、尊氏即命誅之、拋道鑑公伯譜、島津支流系圖所載一

見狀、按太平記、正月二十七日、尊

氏開山門大衆攻神樂岡、遺今川、細川等救之、至則壘已陷矣、又遣

上杉、島山等、擊楠判官、結城入道、名和伯耆守、此戰與一見狀日不

同、參考引梅松論云、正月二十八日、山門大衆自神樂岡下、尊氏軍擊

之、獲島西江判官三郎左衛門、本田久兼戰於神樂岡下、島津道慶生捕

和賀尾弥太郎兵衛二郎、豈亦在此戰乎、又按太平記、是年正月二十

日、大智院宮、彈正尹官、至東坂本、応募武士中、有島津上野入道、

久爲大隅國始良西侯地頭代官職、拋島津支 十日、足利

尊氏與官軍戰於攝州西宮、國分友光從 公有戰功、

拋遠矢十郎兵衛家藏國分友光言上狀、太平記、足利尊氏與楠正成戰於西宮、月日、十三日、尊氏如筑紫、拋大日、島津忠能、河

田慶喜、名慶喜、改迎 公及尊氏、遇於赤間關、遂從如筑

前、拋島津支流系圖、山田聖采自 三月二日、足利直義擊菊

池武俊於多多良濱、大破之、拋太平記、太平記、仁木四郎次郎義長、細川陸奥守頭氏、高豐

前守師重、南遠江守宗繼、上杉伊豆守重能、島山阿波守國清、大友、

島津、曾我、白石、八木、岡、鑿庭等二百五十騎、從直義擊菊池軍、

大破之、按島津忠能、河田慶喜、迎公及尊氏於赤間關、遂從之筑紫、

而多多良濱之戰、島津忠能有軍功、見道鑑公奉狀、高尾張守師泰、島津

豐後前司実忠、齋藤孫四郎利泰執達狀、小山田景範有軍功、見直義感

狀、大隅次郎四郎忠充有軍功、見足利直冬感狀、河田慶喜有軍功、見

師泰、実忠、兼政執達狀、則太平記所謂島津者乃道鑑公也、多多良濱

合戰、太平記無月日、而島津忠能軍忠狀、師泰、実忠、兼政執達狀、

並云三月二、河田慶喜斬敵二人、拋有馬長右衛門 島津忠能、

日、今從之、志島津家藏文書、比大隅次郎四郎忠

充部曲多死傷、拋伊集院十右衛門家藏文書、鎌田筑前守清正、清正子

右衛門大夫清春戰死、拋鎌田集 忠充、伊集院久兼之曾

孫、拋伊集院十右衛門系圖、伊集 清正、政佐之五世孫也、

權守師直移文、使禰寢孫次郎清成佐守護人、具舟及水

手柁工、清成、清親之曾孫也、拋小松氏系圖文書、禰寢

十四日、足利直義賜小山田景範書、褒美宮崎多多良濱

之戰功也、拋比志島津 足利直冬賜大隅次郎四郎忠充書、

亦如之、拋伊集院十右衛門家藏文書、此書言建武下殘欠、不可

之、說、其下四日二字可說、今以直義賜小山田彦五郎書

月十四日、故置於此、 十七日、下文、使 公領薩摩河邊郡

大隅本莊、賞有功也、拋道鑑公伯譜、此書無名及花押、當是尊

治三年所領注文、多爾島、財部氏、深河院、簡 菊池武俊既敗、

不能復振、九州二島、望風應足利氏、平記、獨肝付八

郎兼重據日向國三俣院、遙應官軍、尊氏使、公歸討肝

屬氏、拋道鑑公伯譜、肝屬甚兵衛系圖、肝屬氏、出於大友皇子子余

那足、余那足始賜伴姓、云七世至伴藤大監兼行、始居薩摩鹿

兒島神食村、至曾孫兼俊、領大隅肝屬郡并濟使事、拋肝屬典膳家藏

弘安六年十一月十七日伴兼石及其子兼藤連名與兼弘讓狀、三俣院見下

延文三年、神食、誦曰加美之幾、其後誦曰加美伊之幾、遂書上伊敷、

二十六日、尊氏賜禰寢氏書曰、已得 院宣、討新田右

衛門佐義貞黨與、而肝付八郎兼重以下凶徒據城不下、同上、

爰遣島津上總入道擊之、卿等宜戮力共立軍功、太平記

云、後伏見院賜尊氏院宣、參考以為非、賜尊氏院宣者、光嚴院也、太

平記又云、尊氏自筑紫引兵而東、五月一日舟抵安芸松島、三日院宣

至、參考引梅松論云、尊氏走筑紫、比至備後院院宣至、引保曆間記

云、尊氏已至筑紫、院宣至、三說不同、今拋三月二十六日教書、云既

得院宣、則云五月 又賜大隅次郎三郎教書曰、方討肝屬八

郎兼重以下凶徒、宜應守護立軍功、拋伊集院十右衛門家藏文書、

八日、足利尊氏、賜島津道惠、島津忠能、新田宮執印

又三郎友雄、友雄、執印康友五世孫、康、菱刈藤平、菱刈氏家藏

光明帝、仍用建武年號、拋參考
太平記、冬十月十日、

後醍醐帝還京師、〔花山院〕
拋大目
本史、十一月、畠山修理亮直顯、遣結

城孫七行鄉、行里、
或作、友永七郎澄雄及禰寢清種、攻南郷

櫛間城、下之、拋小根占人池端平左衛門家藏文書、結城行郷、
友永澄雄二人脚色不詳、櫛間屬日向州、讀曰

久之末、後世訛曰不久之末、遂改作福鳥、十二月六日、結城行郷、友永澄雄、

與禰寢清種、八郎清道等、攻下財部院新宮城、下之、

拋池端平左衛門、吉利家臣根占越右衛門家藏文書、郡村高辻帳、財部
郷、旧称財部院、凡十七村、其十二村屬隅州鴨野郡、是為上財部郷、

五村屬日向諸原郡、是為下財部郷、其後併十二村、曰北俣村、

曰南俣村、下財部併五村为一村、曰下財部村、今按下財部村与在內
横市村接壤、横市村今有新宮城遺墟、蓋其地本在下財部界内云、以
上極木城、加瀬田城、妙現城、櫛間新宮城、並係肝付氏党与所拋、

清道、清成之庶族也、拋永吉家臣隅、
善兵衛實書、十八日、直顯攻肝付

兼重於三俣院高城、禰寢清種、柿木原孫七兼政、有軍

功、拋池端平左衛門、柿木原平右衛門家藏文書、三俣院高城、即今
諸原郡高城、按日向州称高城者二、其一屬三俣院、其一屬新納
院、皆說曰多加之也字、薩摩州称高城者、一、說曰多變、而新納院高城、
今屬高鍋國、又日向穆佐有高城、說曰多加之也字者、城名、非郷也、

二十一日、

〔以六太及金峯山為皇居〕
拋參考太平記、
南朝之号始此、足利高經、高師泰等攻

後醍醐帝幸吉野、

金崎城、公遣孫三郎頼久引兵助之、拋島津系図、頼久公
之長庶子、或称三郎
兼

左衛門尉、二十三日、足利直義賜本田次郎左衛門尉即久教

書、使與頼久俱攻敦賀凶徒、久兼有病、遣弟資兼、拋島
津支

流系図、金崎城、在越前敦賀郡、故称
敦賀凶徒、凶徒、依當時語、猶云賊党、晦日、禰寢清成與高城

軍戰于城下、拋小松
氏文書、

〔頭注〕

一〇符録四月廿六日、大宰府を打〇、五月一日、異本太平記二四月三日大宰
を立、五月二日安芸着トイ
フ、安芸ノ敵島ニ着云々、

1763

〔道鑑公御譜中〕

〔太平記十五卷ニ有之〕

去年十二月、大智院宮・彈正尹宮爲搦手大將、經東山

道雖赴關東、相圖相違、而不會竹下箱根合戰、入鎌倉、

然而尊氏已逐北赴上方、則徒非鎌倉留滯之時、公家洞院

左衛門督實世・持明院右衛門督入道・信濃國司堀河中納

言・園中將基隆・二條少將爲次・武士島津上野入道・同

筑後前司已下十有餘將率二萬餘騎、建武三年正月廿日、

上着于東坂本、官軍弥増勢、欲向京都攻尊氏、而匪啗惡

日重々、長途疲馬癱、而不得行步、以今月廿七日、定合

戰吉日也、

1764

〔全上〕

〔太平記有之〕

建武三年丙子正月廿九日、京都合戰、將軍方不利、而

尊氏退于丹波州曾地、而後到于攝津州、二月六日、豊島

川原合戰亦不利、引退兵庫、同月八日、乘大伴氏之船、

而赴鎮西、雖從七千餘騎、其勢漸減僅不足五百人、著船

於筑前州多多良濱之湊、上下芒々然、只俟死期之際、依

宗像大宮司招、入渠之館、而後達于小貳入道妙惠、妙惠

即使太郎賴尚、率若武者三百騎、進將軍也、丁此之時、

菊池掃部助武俊、元來屬官方、在肥後州、聞小貳之屬

將軍旗下、則率三千餘騎、先陷妙惠之居城、而後向多多

良濱來、將軍家屯香椎宮、舍弟左馬頭直義、爲對菊池

之多勢、進發香椎宮、從前勇士仁木四郎次郎義長・細川

陸奥守顯氏・高豊前守師重・大高伊豫守重成・南遠江守

宗繼・上杉伊豆守重能・畠山阿波守國清・大伴・島津・

曾我・白石・八木岡・相庭等、共二百五十騎、定必死向

大敵、兵刃既接、則菊池之大勢被懸立、而退于瀉二十餘

町、且復搦手之將、松浦・神田之輩、將軍小勢誤見大

軍、而忽降參、由是菊池退肥後州去也、

1765 「池端文書」

就世上騷亂并諸事、一門一身同心之連書事、

右、於諸事者、成一身同心之思、聊不可有吳儀、何事モ

申談天、可依衆儀也矣、

若於背此旨輩者、日本國中大小神祇冥道御討、可蒙罷也、

仍狀如件、

建武三年正月十一日

清能(花押)
清種(花押)

清武

賴純(花押)

應惠(花押)

清成(花押)

1766 『日向記卷三』

同三年丙子正月八日、肝付八郎兼重子息金童丸并萩原太

郎兵衛尉兼政、率數百騎軍勢、細川殿政所國富庄南叶燒

拂之由風聞スル故、同九日、大田城主太田八郎入道助賴

・右衛門次郎資家・矢野小次郎義基等ニ是ヲ防カセ、同

十日十一日、祐持土持一同ニ穆佐城相働、致合戰追落ス

所ニ、同十二日、兼重同意ノ本郷圖師隨圓子一坪六郎入

道慈圓宮崎池内ノ城ニ楯籠、同十四日、兼重同意者浮田

庄預所ニ楯籠之間、高浮田城塚押寄セ、土持新兵衛尉宣

榮爲手、散々致合戰、大將ヲ虜、同日、浮田庄跡江方預

取瓜生野八郎左衛門尉彼政所城塚ニ楯籠之間、一族并土

持衆ヲ以馳向、相戰追落、則彼城塚ヲ燒拂、直ニ土持又

次郎頼綱相伴、池内城ニ馳向、手痛相働、圖師六郎入道
慈圓・同甥以下生虜誅伐ス、同廿三日、祐廣宿所八代押
寄相戰、燒拂之所ニ、猪見城黨類楯籠、則時馳向テ彼城
雖相責、味方軍勢令討死、或手負等出來、無勢成ニ依テ
引退キ、同廿九日、重而大勢祐廣カ城猪野見押寄、於大
手城戸散々責戰、同二月二日、土持宣榮手負、同三日、
息八郎時榮二ケ所蒙疵、其外軍率數多手負有之トイヘト
モ、續テ同四日迄手痛ク責戰、去トモ難成其功引退、此
旨小串弥四郎重行・若林大炊兵衛秀信令見分之旨、同二
月七日披露ヲソ遂タリケル云々、

1767

『伴氏兼重譜中』

建武三年丙子正月八日、兼重率子金童丸及萩原太郎兵衛
尉兼政等數百騎、師于國富庄、燒夷南加納廳等、十日、
兼重往攻穆佐城、十一日、不拔而退、乃據高浮田城、浮田田
所江方預所於時瓜生野八郎左衛門尉據跡江城、浮田庄跡圖師或
坪一六郎入道慈圓據池内城、在宮崎皆黨兼重、十二日、土
持宣榮帥兵攻高浮田、我兵爲虜、宣榮又攻跡江、八郎左
衛門尉不能防禦、委城而走、宣榮等燒夷跡江、十四日、
宣榮及其族人又次郎頼綱等、俱攻池内城、城將慈圓及其

1768

『真本御領諸原郡大田原村新助藏』

伊東藤内左衛門尉・肝付八郎以下凶徒濫妨事、既及重事
候之處、最前爲御方、被追放御領内候条、日出存候、此
段於公方、具可披露仕候、恐々謹言、

建武三年正月十六日

良□(兼重)在判

土持新兵衛尉殿

1769

『公』

伊東藤内左衛門尉・肝付八郎以下輩、打入御領分候之間、
已及重事候之處、最前爲御方被追放候之条、日出存候、
此段於公方、具可披露仕候、恐々謹言、

建武三年正月十八日

圓觀在判

土持新兵衛尉殿

1770

『伴氏兼重譜中』

二十三日、土持宣榮進攻八代城、前此、城將祐廣委八代
城、據猪野見城、祐廣善拒大敗之、於是、島津庄惣政所

左兵衛尉秀信・日州守護代榮幽等、馳人飛報諸博多館、

以乞援軍、二十五日、少貳筑後守貞經、乃使羽月四郎右

衛門尉元貞歸牛屎院、募兵於廣武又次郎入道等、俱來伐

我黨、

1771 『真本野田土篠原武右衛門家藏』

新田右衛門佐義貞誅伐事、去年被下関東御教書訖、而肝

付八郎兼重以下輩、令同意義貞、於日向國所之舉旗、既

及合戰之由、當國守護代并鳴津庄惣政所等依馳申、所差

遣羽月四郎右衛門尉元貞也、早相催一族、馳向彼所、可

被退治候、仍執達如件、

建武三年正月廿五日

廣武又次郎入道殿

大宰少貳(貞經)

1772 建武三年丙子

正月二十九日、或ハ三月二日鎌田筑前守清正足利直義に

武俊と多々良兵に戰て死之、鎌田右衛門大夫清春亦同しき

二月八日、箕勾狩野介季統同しく多々良兵にて戰死前田

又四郎範茂此年從軍して撰州に戰死とあ、姑く此に載て考を缺つ

1773 「越前島津氏七代周防守忠兼譜中」

(傳氏) (花押)

下向播州、相催一族、(不之)一日可抽軍忠之狀如件、

建武三年二月五日

周防五郎三郎殿(忠兼)

1774 『藏肝付兼重譜中』

二十九日、土持宣榮及富光九郎道貞・土持左衛門太郎・

土持七郎・橘内兵衛尉、合兵復攻園猪見城、(野馳之)二月朔日、

及守護奉行沙弥重賢等進攻之、祐廣拒戰、傷宣榮等、三

日、宣榮及島津莊惣政所秀信・土持八郎時榮等復攻之、

時榮等傷退、四日、宣榮及小串弥四郎重行・若林大炊兵

衛尉秀信等復進攻城、祐廣拒戰却之、七日、土持宣榮呈

惣政所秀信・守護奉行重賢軍忠狀、十日、又呈守護代榮

幽軍忠狀、皆以伐我爲功也、

1775 『真本高岡土富滿大右衛門家藏』

薩摩國祁堂院富光九郎道貞、馳向日向國諸縣郡八代、新

田右衛門佐義貞与黨之仁伊東藤内左衛門尉以下輩、爲誅

伐、去月廿九日、押寄彼城、捨身致合戰、土持左衛門太

郎茂被疵候、且土持七郎・同新兵衛尉、惣政所親類、參河國參河公・同橋内兵衛尉以下、於戰場雖見知候、爲後證可入申候也、恐惶謹言、

建武三年二月四日

大前道貞

進上 土持左衛門太郎殿

『真本御領諸異部大田原村新助藏』

土持新兵衛尉宣榮、於日向國所之致軍忠次第事、

一 去年^{建武}十二月十三日、世上鬪亂之由、依有其聞、一族相共欲令上洛之處、伊東藤内左衛門尉祐廣^{新田右衛門佐祐候人}

・同弥七・同弥八・益戸以下凶徒等、令亂入國富庄以下所之、依致濫妨狼藉、國中平均相隨彼黨類之由、披露之間、同廿七日、一族相共揚御旗、打出宿所候事、^(畢之)

一 同廿九日、押寄伊東弥七・同弥八宿所處、追落之焼拂畢、

一 去年^{建武}十二月廿四日、祐廣以下凶徒等、楯籠嶋津庄穆佐院政所之間、同晦日、一族相共馳向彼城、致散之合戰追落之時、祐廣親類若黨以下數十人討取之畢、

一 正月^{建武}八日、肝付八郎兼重・子息金童丸、并萩原太郎兵衛尉兼政、率數百騎軍勢、打越國富、南加納政所

以下焼拂之、同十日、十一日、寄來穆佐城、致合戰之間、防返畢、

一 同十四日、兼重与同仁、楯籠浮田庄預所、押寄高浮田城堀、於宣榮其日大將、致散之合戰、令生虜候畢、

一 同十四日、兼重^(与脱之)同仁浮田庄跡江方預所瓜生野八郎左衛門尉、於彼政所於城堀楯籠之間、馳向致散之合戰、追落之、則焼拂城堀候畢、

一 同十四日、兼重黨類一坪六郎入道慈圓、楯籠宮崎池内城之間、一族又次郎頼綱相共馳向彼城、慈圓同甥以下生虜之、令誅畢、

一 同廿三日、押寄祐廣宿所八代、焼拂之處、楯籠猪野見城之間、則時馳向彼城雖致合戰、御方勢依討死手負出來、成無勢引退畢、

一 同廿九日、重押寄祐廣猪野見、於大手責戰之時、二月一日、宣榮額、同三日、子息八郎時榮^{右膝}被疵畢、此等子細御見知候畢、

右、宣榮所之軍忠如件、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年二月七日

左兵衛尉宣榮

進上 嶋津庄惣政所殿

進上 嶋津庄惣政所殿

承了 左兵衛尉秀信在判

1777 『真本御領日州大田原村新助藏』

新田右衛門佐殿与同仁、伊東藤内左衛門尉祐廣以下凶徒等、去年十二月廿四日、押寄足利殿御領穆佐院、逮于合戰之由、承及候間、一族馳向、同十二月晦日、一日一夜致合戰追落早、并兼重同意圖師六郎入道慈圓、楯籠池内城之間、正月十二日、馳向彼城、捨身命盡合戰之忠、召捕其身誅伐候畢、其後押寄祐廣之城八代、同廿三日、同廿九日兩度及合戰候之處、自身并子息一人・若黨一人被疵候、適於戰場御見智候之間、爲後證令申候、恐惶謹言、

建武三年二月七日 左兵衛尉宣榮

進上 守護御奉行所

承了 沙弥重賢在判

1778 『真本同上』

同廿九日、重押寄祐廣城猪野於大手責戰之時、二月一日、宣榮額、同三日、子息八郎時榮右藤被疵早、迄于同四日、致散々合戰、若黨以下被疵之衆、小串弥四郎重行・若林大炊兵衛尉秀信、令見智知之早、

右、宣榮所々軍忠如斯、以此旨、可御披露候、恐惶謹言、(有脱之)

建武三年二月十日 左兵衛尉宣榮

進上 御奉行所

承了 守護代沙弥榮幽在判

1779 『樺山家文書』「元祖資久譜中ニ在リ」

下

可令早領知下野六郎資久大隅國始良西俣地頭代官職事右以人、爲勲功賞所宛行也者、守先例、可令領知之狀如件、

建武三年二月九日 『丙子』 『貞久公』 (花押)

1780 「重久篤兼譜」

建武三年丙子、先是、尊氏・義貞爭權交惡、帝右義貞、詔討尊氏、肝付八郎兼重・伊東藤内左衛門尉祐廣等遙應其軍、各舉部兵、兼重據三俣院高城、祐廣據諸縣庄八代城、於是正月、篤兼乃應尊氏師、聞千種宰相家雜掌等據胡麻崎城、在日州救仁郷二十八日、往攻胡麻崎城、二十九日、又攻兼重黨於志布志城、篤兼族人彦次郎祐任死之、家僅源六大和房向經被劊、二月以聞主將、主將未詳、

1781 『重久文書』

大隅國御家人重久大塚篤兼申、自最前爲御方、去正月廿八日、馳向日向國救二郷胡麻崎城合戰、追伐千種(志願)宰相家雜掌等、同廿九日、相向救二院志布志城、責落肝付八郎兼重与黨等時、親類彦次郎祐任令討死、若黨源六小肘右疵、同大和房向經被疵右肩射疵、被見知之上者、軍忠之次第、且賜一見狀、且可被申注進候、仍目安狀如件、

建武三年二月 日

承了 □

1782 『建武三年二月旧記』

島津庄大隅方寄郡田數七百十五町八段三段

内寺社御寄附方

横川院三十九町五段三丈安樂寺天滿宮御寄附

(本文書稱櫻文書中ニテアリ)

1783 『載于肝付氏兼重譜中』

此月、尊氏來筑紫、三月二日、菊池武俊帥師、及足利直義師、大戰於多々良濱、菊池師敗績、由是、九州豪族望風多應尊氏、而兼重奉其姪彦太郎兼隆及伊藤祐廣等、愈

應官軍、完聚分堡、以拒足利軍、乃五日、尊氏賜揖宿郡

司等書、令討菊池黨、十日、又賜土持宣榮書、令戮力於伊東六郎左衛門尉貞祐及島津庄惣政所等、以伐我黨、

1784 『正本高岡土揖宿十郎右衛門家藏』

菊池武敏已下凶徒等誅伐事、可致軍忠之狀如件、

建武三年三月五日

尊氏在判

揖宿一族中

1785 『正本御領日州大田原村新助家藏』

新田右衛門佐義貞与黨以下誅伐事、所被下院宣也、爰菊池武敏并維直(維)雖揚旗、或打取之、或没落早、抑伊東藤内

左衛門尉祐廣并兼重、構城塙云々、令談合伊東六郎左衛門并嶋津庄惣政所代、可對治之狀如件、

建武三年三月十日

在判

土特新兵衛尉殿

1786 『山田氏古文書』

嶋津式部諸三郎忠能、馳參御方、致軍忠候早、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月五日

(山田)
藤原忠能

進上 御奉行所

「高尾張守師察」
承了(花押)

1787

『公土』

(山田忠能)
式部諸三郎宮崎合戰之時軍忠事、無子細候、以此旨、可

有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月五日

「ウラニ此判有之」
沙弥道鑒(花押)

進上 御奉行所

1788

(本文書ハ一七八五号文書ト同文ニツキ省略ス)

1789

「載本田久兼譜中」

久兼屢抽忠戰、太守 貞久公賜感狀、加以預將軍 尊氏

卿及直義之御感也、

1790

本田左衛門尉久兼軍忠事

右、属于嶋津上總前司入道之鑑之手、去正月廿七日、賀

茂河原合戰之時致先懸、被切殺乘馬、同廿八日、於神樂

岡之下、及散之合戰、打取御敵三人畢、同卅日、二條

大宮并西七條合戰之時、致軍忠之次第、下野六郎・同七郎被見知之間、有御尋之時、不可有其隱、然早浴恩賞、弥向後欲抽軍忠、仍恐之言上如件、

建武三年三月十一日

(貞久)
承了(花押)

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ、正文在入來院石見重頼之家臣、清敷本田伝藏ト記セリ」

1791

「道鑑公御譜中」

「正文在田布施衆二階堂三左衛門定行」

薩摩國關所并京進年貢等事、不謂大小諸庄園、嶋津上總入道相共平均令點定、可被沙汰進也、且云先地頭并庄官

下司公文等之名字、云年貢之分限、載起請詞可被注進之、

若寄事於寺社領、雖令遁避、先點之、令糺明實否、可被

注申子細之狀、依仰執達如件、

建武三年三月十二日

(高師直)
武藏權守(花押)

(二階堂)
紀伊權守殿

1792

「越前島津氏七代忠兼譜中」

新田義貞黨類等爲誅伐之、近日京都可有發向之、一族相

共、可被致合戰之忠也、仍執達如件、

建武三年三月十五日 (石橋和卷)
左近大夫將監(花押)

嶋津周防五郎三郎殿

「朱力幸」上書ニ在之
「心忠狀披貳拾六道」

1793 目安

播磨國下揖保庄地頭嶋津周防五郎三郎忠兼申、若黨討
死事、

右、去十六日、鶴宿御合戰之時、馳向樂々山北嶺、致軍
忠之處、於同山西、若黨信淨・珍海・刑部三郎・旗差源
十郎等討死畢、同所合戰之仁、高鼻和三郎太郎・浦上孫
三郎以下輩令見知之上者、賜御證判、欲預恩賞、仍目安
如件、

建武三年三月 日

承候了(花押)

1794 筑前國宮崎合戰致忠功、手者令討死之条、殊以神妙也、

弥可被抽戰功之狀如件、

建武三年三月十五日

(重卷)
(花押)

大平平次郎殿

1795 『道鑑公御譜中』

「写有之」

「尊氏」
御袖判

下 嶋津上總入道之鑿

可令早領知薩摩國河邊郡・大隅國本庄事

右以人、爲勲功之賞、所補任也、任先例、可令領掌之狀
如件、

建武三年三月十七日

1796 「和泉氏譜中」

「正本在田布施二階堂三左衛門定行」

神崎三郎重吉申、筑前國多々良瀨今月二日合戰事、重吉
致分取之条、被見知云々、爲事實否、載起請之詞、不日
可被注申之由候也、仍執達如件、

建武三年三月十七日

平 (兼政)
(花押)

(二階堂)
隱岐紀伊權守殿

(島津実忠)
前豊後守(花押)
(高 師繁)
尾張權守(花押)

1797 「正文在財部衆川田勘介藏」

河田智門房慶喜申、筑前國多々良瀉今月二日合戰事、慶喜打取敵二人之条、令見知之旨申之、爲事實否、載起請之詞、不日可注申、仍執達如件、

建武三年三月十七日

(平七)
兼政(花押)

(島津)
實忠(花押)

(西)
師泰(花押)

酒勾兵部二郎殿

「此文書、和泉氏実忠譜中ニ在リ、実忠觀心二年七月三日死去トアリ」

1798

「山田氏文書」

嶋津式部孫五郎入道々慶自京都合戰之時、令供奉候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月廿日

〔丙子〕
沙弥道慶

進上 御奉行所

〔高越後守師泰〕
承了(花押)

1799

「公」

嶋津式部孫五郎入道々慶謹言上

欲早依度々軍忠、預御注進、浴恩實事、

右、道慶最前馳參御方、去正月廿七日、嶋河原合戰之時、

致軍忠之条、即御見知早、同廿八日、召捕直伯者守長年(名和)若黨和賀尾弥太郎并兵衛次郎、令具參多々須河原、属于當御手申入之處、可被誅之由、直被仰下被切早、同卅日、於五條河原致合戰之条、畠山小松孫太郎見知早、然

早且預御注進、且爲賜御承判、恐々言上如件、

建武三年三月 日

(貞久)
承了(花押)

「大日本史云、延元元年正月廿七日甲戌、藤原実世・源顯家・新田義貞・楠正成、名和長年・前上野介結城宗広等、擊足利尊氏走之、丁丑晦、官軍又与尊氏戰于京師、尊氏大敗西走、遂復京師、太平記爲廿九日云

略」

1800

「山田氏文書」

(本文書ハ一七三三号文書ト同文ニツキ省略ス)

1801

「山田家文書」

嶋津式部孫五郎入道々慶申軍忠事、無子細候、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月廿四日

〔名ノ裏ニアリ〕
沙弥道慶(花押)

進上 御奉行所

1802

「山田家文書」一末文次

薩摩國伊集院大窪大貳房明賢謹弁申

欲早被弃捐嶋津大隅式部孫五郎入道、慶非據支狀、任時綱・慶西置文以下證文等蒙御成敗、同國同院大窪内温穴前田地三段事、

副進

一通 本主時綱置文 寬喜二年二月廿八日

一通 慶西置文 文永六年三月日

右、於田地三段者、爲大窪内、帶本主時綱・慶西置文讓狀、代々知行無相違之處、大隅五郎太郎入道、智息女道慶旧妻不願自狀、押領間、任父祖置文以下證文等、可被停止彼押領之由、訴申之處、如道慶非據支狀者、右田地者、道慶當知行之處、去永仁年中御德政之時、對不知行之佛教房、明賢祖父道西、爲子息治部房明賢亡父代官、於守護方、致謀訴之間、道慶于時宗久當知行之旨、就支申之、恐自科止訴訟之由、道西出狀之間、道慶知行不可有相違由、預御下知畢、進覽右、而明賢對不知行仁道智女子跡、致紆訴之条、希代奸曲也云々、此条言語道斷也、其故者、依于當院所務事、守護方与惣領郡司年來敵方也、道西當院一分領主也、爭於于「末文次」

1803

「重久篤兼譜中」

此月尊氏來于築紫、三月二日、菊池武俊帥師、及足利直義師大戰於多々良濱、菊池師敗績、於是、尊氏聞兼重等完聚分堡、應義貞黨、乃遣 道鑿公、歸自宰府伐兼重黨於薩隅、又遣島山修理亮直顯如日州、亦伐之、二十六日、尊氏賜篤兼書、使戮力 公、以立軍功、

1804

「重久文書」

新田右衛門佐義貞与黨誅伐事、所被下 院宣也、爰肝付八郎兼重以下凶徒構城墾云々、所差遣嶋津上總入道鑑也、可致軍忠之狀如件、

建武三年三月廿六日

(尊氏)
(花押)

(篤兼)
重久掾殿

1805

『載伴譜』

同日、尊氏賜禰寝郡司及別府女子代等書各一通、使戮力公、以立軍功、

1806

『肝付氏家藏』「道鑑公御譜ニハ正文在祿後右近重永トアリ」

新田右衛門佐義貞与黨誅伐事、所被下院宣也、爰肝付八

郎兼重以下凶徒構城塚云々、所差遣嶋津上總入道之鑑也、可致軍忠之狀如件、

建武三年三月廿六日

(尊氏)
〔花押〕

祢寝郡司一族中

1807
『公』

新田右衛門佐義貞与黨誅伐事、所被下院宣也、爰肝付八郎兼重以下凶徒構城塚云々、所差遣嶋津上總入道道鑑也、可致軍忠之狀如件、

建武三年三月廿六日

(尊氏)
御判

別府女子代

1808
『伊作宗久譜中』
〔正文在手鏡〕

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

(尊氏)
〔花押〕

大隅左京進入道殿

1809
『肝付譜兼重傳』

二十八日、復賜大隅左京進宗久入道道惠・本田左衛門尉久兼・杉三郎入道道悟等教書各一通、皆令助公師以伐我黨也、又賜土持新兵衛尉宣榮教書、令助畠山師以立軍功、亦爲伐我也、

1810
『写本見旧記 伊作氏文書と云』
〔本文書ハ一八〇八号文書ト同文ニシキ省略ス〕

1811
『都城本田仁十郎藏 買之入来 本田氏云』

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

〔尊氏花押〕
〔花押〕

本田左衛門尉殿

1812
『高尾野土人出水藤之丞藏』

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

〔尊氏〕
御判

杉三郎入道殿

〔右樂如左〕
〔此正文等、長途之間、不及持參、依然、令校正、所

封裏如件、

貞和七年四月五日

藤原政員(花押)

1813 「真根文書」

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍功之狀如件、

建武三年三月廿八日

御判

莫称兵衛五郎入道殿
大平平太郎殿

1814 『真本御領日州大田原村新助藏』

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、差遣畠山修理亮七郎訖、隨彼催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

御判

土持新兵衛尉殿

1815 『山田氏文書』

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

御判

式部諸三郎殿

1816 『全』

大隅式部諸三郎忠能申、於多々良瀉、今月二日捕頸由事、軍忠之次第有見知云々、爲事實否、載起請文之詞、委細可被注申候也、仍執達如件、

建武三年三月廿八日

利泰(花押)
實忠(花押)
師泰(花押)

澁谷弥四郎殿

1817 『山田氏文書』

大隅式部諸三郎忠能申、於多々良瀉、今月二日捕頸由事、軍忠之次第有見知云々、爲事實否、載起請文之詞、可被注申候也、仍執達如件、

建武三年三月廿八日

實忠(花押)
實忠(花押)
師泰(花押)

財部孫四郎入道殿

〔見于大日本史後醍醐天皇紀〕

一延元元年丙子三月二日己酉、菊池武敏攻足利尊氏于多々良濱不克、阿曾大宮司宇治惟直・備前守秋月某死之、四日辛亥、詔左近衛中將新田義貞管領山陽山陰十六州、往討足利尊氏、義貞會會疾、江田行義及左馬助・大館氏明先發、六日癸丑、江田行義等與赤松則村兵戰于播磨室山敗之、太平記

1822

〔伊作宗久譜中〕

〔案文在山田七郎右衛門久通〕

嶋津大隅左京進入道・惠謹言上

欲早任英時誅伐時恩賞 綸旨、賜御下文、全知行洞院

左衛門督家候人志田三郎左衛門尉不知其名、跡筑後國小家

庄間事、

副進 綸旨 建武元年十一月廿六日

右、當庄者英時誅伐之時、爲勲功之賞、去建武元年十一月廿六日令道惠拜領之間、於決斷所御牒申立、爲三郎左衛門尉父子共左衛門督家候人之間、以彼御口入、申請鎮(ウ)西上了侍侍從中納言殿仁依歎申、押御牒、如被仰出者、可替申与、其間暫可相待之由度・依蒙仰、兩方共爲權門御身之間、謹其替相待之刻、幸爲武家一頭御代之上者、賜御下文、備未來龜鏡、爲施弥弓箭面目、恐言上、

建武三年三月 日

『見太平記十六卷』

一延元元年、菊池掃部助武俊元來宮方也、卒于大軍、寄懸于多々良濱、尊氏將軍香椎宮三三百騎許屯矣、其十四人之内、嶋津在之、將軍方得勝利、菊池敗走也、

〔正文執印家藏〕

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、隨守護催促、可抽軍忠之狀如件、

建武三年三月廿八日

〔尊氏〕
(花押)

新田宮執印又三郎殿

〔正文水引權執印藏〕

1823

『小川氏文書』

武藏國西小河小太郎季久申、筑前國有智山合戰軍忠事、

右、建武三年二月廿八日、令引籠有智山、同廿九日、於御

社谷致合戰忠刻、自身被疵、左股 被射、若黨田兵衛尉・郎從

右馬允指討死、若黨伊与房被疵、右膝被射切、同平内左衛門尉

被疵、左ヒチ被射切、此等子細同所合戰之輩、肥後國託磨豊前

太郎・肥前國曾祢崎左衛門三郎入道等令見知之間、被成

御施行、被尋問實否之處、證人請文依無相違、被經御沙

汰、被入御注進畢、然者、給御證判、爲備後代龜鏡、恐

言上如件、

建武三年三月 日

承了 (頼尚) 太宰少貳(花押)

1824 『山田氏文書』

嶋津式部諸三郎忠能謹言上

欲早預忠賞、弥成弓箭勇、筑前國多々良瀧合戰以下度

々軍忠事、

副進 一通 御教書

一通 役所高尾張守御一見狀 (御奉)

一通 嶋津上總入道々鑿舉狀

二通 御奉行方御奉書

二通 證人等起請文案

一通 上總入道々鑿一見狀

右、建武三年去年二月、將軍家鎮西御下向之刻、忠能長州赤磨関

令馳參、即供奉仕、同三月二日、於筑前國多々良瀧御合

戰候間、捨身命攻戰、自身分取候条、薩摩國澁谷弥四郎

并肥後國財部孫四郎入道等見知之間、於太宰府令言上之

處、爲役所高尾張守師泰・島津豊後前司實忠・齋藤弥四

郎利泰奉行、依被尋下證人等、任實正、書進請文之間、

既可之恩賞之旨、被仰下之處、依御上洛、被闕之畢、然

忠能重大隅國凶徒兼重以下輩、可誅伐之旨、預御教書、

令下國、属于惣領島津上總入道手、致軍忠畢、然早任度

々忠節之旨、浴恩賞、弥爲成弓箭之勇、恐々、

「建武四年の文書なるべし」

1825

「新納家元祖時久譜中ニ在リ」

『写在新納嫡家』

嶋津下野四郎時久申、日向國新納院地頭之事、職イ任建武二

年十二月十一日御下文之旨、可沙汰付時久使者之狀、依

仰執達如件、

建武三年卯月一日

武藏權守(高師直)

日向國守護代(沙弥栄麿)

1826 『入來院氏文書』

(尊氏) 御判

下 澁谷河内入道(重頼)

可令早領知肥前國三根西郷地頭職事

右(以心)此人、爲勲功之賞、所補任也、任先例、可令領掌狀如件、

建武三年四月二日

1827 『写新納喜右衛門家藏』

日向國新納院地頭職事、嶋津四郎拜領之處、濫妨之由其(時久)

聞候、殊忠之仁候、無爲可被沙汰付候、恐々謹言、

【年号不詳、建武二年十二月十一日新納院地頭職之御上文、比三年比ニハ疑ナシ】

八月廿四日 武藏權守師直在判
謹上 畠山修理亮殿(直徳)

1828 『全』

嶋津四郎申候、日向國新色(納)院事、任先例、無煩之様、可

被懸御意候、且此仁軍忠候、隨而當參奉公事候之間、如

此令申候、恐々謹言、

【年号ナシ】

十二月廿一日

武藏權守師直在判

謹上 畠山修理亮七郎殿(重頼)

1829 『全』

其後御在國之躰何様候哉、無心元存候、抑島津四郎所領

日向國新納院内宮頸村事、爲當院内先地頭等知行候之處、

今度始御代官違乱之由被申候、彼仁殊更於京都申承子細

候、其旨執事度々被成施行候坎、何様ニも可被御違乱候(御脱カ)

哉、次領家職事、同任先地例、無子細候様ニ沙汰候者悦(頭脱カ)

入候、尚々無異他子細候之間、如此令申候、諸事急速計

御沙汰候者爲悦候、心事期後信候、恐々謹言、

【年号ナシ、此條考】 十二月廿三日 沙弥明眼在判

謹上 畠山修理亮七郎殿

1830 『調所氏譜中教恒傳』

建文三年丙子四月、先是足利尊氏克六波羅、新田義貞取(武)

鎌倉、既而爭權分黨交惡、

後醍醐帝乃右義貞、詔討尊氏、尊氏及弟直義來於筑紫、

破菊池師、遣 道鑑公等、歸自宰府伐新田黨於薩隅、又

遣畠山修理亮直顯、如日州亦同伐之、至是五月、直義奉

1831

『全文書』

院宣當是持明院、光嚴帝、賜教恒教書、使率一族伐義貞黨、以致軍忠、其所謂左馬頭、乃尊氏弟足利直義也、

新田右衛門佐義貞與黨以下凶徒等誅伐事、所被下

院宣也、相催一族、可致軍忠之狀如件、

建武三年四月五日

(直義) 左馬頭在御判

調所彦三郎殿

1832

『都城土東条利右衛門家藏文書』

下

可令早爲大隅國筒羽野村半分地頭代官職事

東條藤次郎入道之悟

右以人、所補任當村半分地頭代官職也、於有限年貢已下濟物等者、任先例、可沙汰進之狀如件、

建武三年四月十日

道鑒(花押)

「此文書、御譜中ニアリ、正文在梅北東条氏ト記セリ」

1833

『牛屎文書』

注進狀并討死手負交名之狀、披見訖、度々軍忠神妙候、

恩賞事、急可有沙汰之狀如件、

建武三年四月十一日

(直義) 左馬頭御判

(高元) 牛屎左近將監殿

1834

『伴譜兼重傳』

四月、前此蓋彦太郎兼隆將兵成加世田城、遺城今在百引地頭、館東卷里拾町許平

房至是、公帥兵入我肝屬、隔水立營、今距百引加世田城遺城、良位隔川五六町、有地名

陣平、里人相伝、公子六郎資久・大隅助三郎忠國及軍奉行以為公所陣地云、

本田左衛門尉久兼・中條左衛門尉入道祐心等從軍、徵諸郡兵、乃十二日、富光九郎道貞等來會、公軍云々、皆各奉教書會之、同謀伐我也、

1835

『富光文書』

薩摩國邪堂院富光九郎大前道貞、(邪堂) 最前馳參御方候之上者、

弥御一行欲備後代龜鏡、(賜之) 以此旨、可有御披露候、恐惶謹

言、

建武三年四月十二日

(富光) 大前道貞

進上 御奉行所

1836

『重久文書篤兼譜中』

三月二十九日、尊氏賜 公教書、令成隅薩、四月、肝付
彦太郎兼隆等據加世田城、在肝付郡、以黨義貞、十四日、
公賜篤兼書、使速發兵、以攻伐之、

1837

大隅薩摩兩國警固事、去三月廿九日、將軍家御教書如
此、仍當國內肝付郡加瀬田城已下所々有惡黨蜂起者、早
速馳向于彼所、各可致對治也、仍執達如件、

建武三年四月十四日 (貞久)
沙弥(花押)

(篤兼)
重久掾殿

1838

『牛屎文書』

肝付八郎兼重以下凶徒等誅伐事、相催一族、不廻時刻馳
向、可致軍忠之狀如件、

建武三年四月廿一日

(直務)
左馬頭御判

(高元)
牛屎左近將監殿

1839

『在清水來野田主馬』

肝付八郎兼重与同凶徒等爲誅伐、御發向大隅國之間、致
軍忠、薩摩國御家人野田孫四郎入道々玄令馳參候、以此
旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿三日 沙弥道玄

進上 御奉行所

『道鑑公御判』
承了(花押)

1840

『水引權執印文書』

肝付八郎兼重与黨凶徒等誅伐由事、任御教書之旨、薩摩
國御家人新田宮權執印良遲子息三郎次郎俊正令馳參候、
以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿五日 紀俊正

進上 御奉行所

(島津貞久ノ花押アルベシ)
承了

1841

『道鑑公御譜中』

『在財部來延時藤左衛門』

肝付八郎兼重与黨凶徒等誅伐事、爲軍忠、薩摩國御家人
延時又三郎入道法佛令馳參候、以此旨、可有御披露候、
恐惶謹言、

建武三年四月廿五日 沙弥法佛

進上 御奉行所

(貞久)
承了(花押)

1842

〔左右〕

『正文在高岡衆搦宿左近兵衛忠真』

肝付八郎兼重与黨凶徒等誅伐事、爲抽軍忠、薩摩國御家
人搦宿郡司入道成榮令馳參候、以此旨、可有御披露候、
恐惶謹言、

建武三年四月廿五日

進上 御奉行所

沙弥成榮

〔裏三判アリ〕

旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿八日

惟宗友雄〔裏花押〕

進上 御奉行所

〔眞久公〕
承了〔花押〕

1845

『伴譜兼重傳』

1843

『比志島氏文書』

依肝付八郎兼重与黨誅伐事、御發向之間、薩摩國滿家院
比志島孫太郎貞範爲抽軍忠、令馳參候、以此旨、可有御
披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿七日

源貞範

進上 御奉行所

〔眞久〕
承了在判

1844

『水引執印吉太藏本』

肝付八郎兼重与黨凶徒等爲誅伐、御發向大隅之間、爲抽
軍忠、薩摩國一宮新田宮執印又三郎友雄令馳參候、以此

五月、公恐兼重或遣援兵來伐其後、乃五日、遣大隅式
部小三郎、疑此山田氏率柿木原太郎左衛門入道惠佛或作円仏等、如
日州中郷、攻姫木城、今都城有地名姫木以備三侯、六日、公遂
自將、以本田久兼等爲軍奉行、帥二階堂紀伊權守行久・
篠原孫六國道・莫禰次郎太郎成長入道圓也・杉三郎入道
道悟等、進圍加世田城、又使島津左京進宗久入道道惠・
島津六郎資久爲將、率式部諸三郎忠能・杉三郎入道道悟
・次子弥三郎保右等、別攻大手、又使中條祐心爲奉行、
率野上田伊豫房時盛・禰寢弥次郎清種・平田小次郎眞宗
延時法公女婿、法
公疾起、故代師之・郡山弥五郎頼平等、徑攻水寨、杉三郎
入道以其弥三郎保右等先登、斬堀口柵、保右蒙箭創、八
日、道悟及山野彦四郎入道・伊作田兵部丞等、屬島津六
郎資久師、復進攻之、道悟旗持六郎丸被箭疵、十日、我
徒益戸弥四郎行政・益戸四郎兵衛尉秀名・石河内弁濟使

等、及土持宣榮師戰於岩戸原彦尾、

納院

十二日在判賜

土持宣榮書、賞彦尾之功、益戸行政等據石城、十五日在

判賜土持宣榮書、令與佐伯備前權守等、攻石城誅之、二

十三日、我黨別發兵來救之、公乃遣公子資久及大隅助

三郎忠國、率禰寢清種・莫禰圓也・圓也子左兵衛尉政貞

・孫太郎重貞・杉三郎入道等、拒之野崎、多死傷我兵死

之、重貞等傷去、政貞率家僮左近尉等、攻我大門、我兵

發箭却之、二十五日、野上田時盛・郡山賴平・莫禰圓也

・二階堂行久等、夜斫水塞、戍兵堅拒、時盛先登奮勇、

圓也家僮安三郎等中我防箭、二十六日、敵猶進攻、我兵

射傷莫禰家僮權三郎等、然水塞竟被破焉、

1846

『宮之城家臣阿久根氏藏書』

薩摩國莫祢次郎太郎入道圓也謹言上

欲早任鎮西肝付八郎兼重住所加瀨田城并越前國敦賀城

所之軍忠、預恩賞、施弓箭面目、弥播忠節間事、

副進

五通 御教書并御感一見狀

右圓也、於御方軍士、抽忠勤乎、然隨當國守護催促、可

誅伐肝付八郎兼重以下凶徒等之由、被下御教書之間、即

馳向大隅國加瀨田城、捨身命致合戰之時、凶徒等爲後詰

寄來之間、於野崎陣、圓也致大刀打、射落御敵二騎、切

落一騎、子息孫太郎重貞被疵、左手同五月廿五日夜、

打破彼城水手之時、即從安三郎被打破頭、同廿六日、郎

從權三郎被疵左肩、之条、道鑿一見狀分明也、仍圓也不

惜一命、抽軍忠之上、重爲逢京都御要、馳上之處、預御

感御教書、於恩賞者、可有其沙汰之由被仰出畢、且發向

敦賀城、可對治凶徒之旨被仰下之間、應御定、欲令發向

之處、依重病、請以子息重貞於代官、自正月十八日致合

戰、同二月十六日、爲彼城後卷、寄來凶徒之間、致先

懸、重貞切臥御敵一人、同三月五日合戰之時、致矢軍、

同五日夜合戰之時、打入城內、致散之太刀打、切臥御敵

一人早、隨分捨身命、抽軍忠之次第、嶋津三郎左衛門尉

賴久一見狀進覽之、凡圓也鎮西於所之致合戰、云子息、

云郎從以下、度之被疵之条、御感以下御教書并一見狀等

明白也、然早浴恩賞、施弓箭面目、弥爲抽戰功、恐之言

上如件、

1847

『公上』

明也、將又可誅伐肝付八郎兼重之由、被下御教書之間、

即馳向大隅國加瀬田城、捨身命致合戰之時、凶徒等爲後

詰寄來之間、於野崎陣政貞致太刀打、討取御敵一騎、被□

乘馬腹并股畢、其後攻寄大手木戸口之時、郎從左近尉射之

被疵被射實左肩之条、道鑿一見狀同前、仍政貞所之合戰不惜

一命、每度抽軍忠之上、重爲逢京都御要、陵長途、馳上

之處、預御感御教書、於恩賞者、可有御沙汰之由被仰出

畢、且罷向敦賀城、可對治凶徒之旨、被仰下之間、應御

定、欲令發向之處、依受重病、以親類貞國爲代官差遣彼

城、自正月十八日致合戰、同二月十六日、後卷寄來之

時、捨身命抽軍忠、三月五日夜攻落彼城之条、嶋津三郎

左衛門尉賴久一見狀進覽、凡政貞建武二年以來京都鎮西

於所之致合戰、云自身、云郎從、度之被疵之上、迄敦賀

城抽軍忠之条、御感御教書并道鑿等一見狀分明也、然者

早浴恩賞、播弓箭面目、弥爲抽忠節、恐之言上如件、

1848

新田右衛門佐与同之仁益戸弥四郎行政・同四郎兵衛尉秀
名并石河内弁濟使以下、今月十日新納院岩戸原彦尾合戰

段、被致忠節之由、被聞食狀如件、

建武三年五月十二日

在判

土持新兵衛尉殿(實榮)

1849

「御領大田原村新助藏本」

新田右衛門佐与同之仁益戸弥四郎行政以下、楯籠石之城

者、早佐伯備前權守并一族等相共馳向彼城、可被誅伐之

狀如件、

建武三年五月十五日

在判(直顯)

土持新兵衛尉殿(實榮)

1850

「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防五郎三郎忠兼申、自最初楯籠當城堀、一族相共

令勤仕所之役所、合戰之時者、馳向于方之責口、每度抽

軍忠候了、且五月三日、中細尾合戰之時、若黨三村觀性房

被疵左手了、同十七日、於中細尾、同觀性房被疵左手被

畢、赤松雅樂助於戰場見知之上、城中無其隱候者也、早

賜一見之判、可備後證之由、相存候、以此旨、可有御披

露候、恐惶謹言、

建武三年五月十九日

惟宗忠兼(裏花押)

進上 御奉行所

承候了(花押)

「此判ハ赤松円心ト別記ニ見ヘタリ」

1851 『兼重傳』

公大懌時盛等破水塞、二十七日、命時盛爲百引村地頭代官職、賞先登功也、

1852 『正文在田代氏』

大隅國肝付郡加世田城水手夜討事、爲先打攻落之間、以當國寄郡内百引村地頭代官職、所充行給恩也、(重説)至有限年貢濟物者、任先例、可致其沙汰也、次於公方恩賞者、可申行之狀如件、

建武三年五月廿七日 道鑿(花押)

野上田伊与房(時盛)

「道鑑公御譜中ニアリ、正文在田代縫殿清長ト記セリ」

1853 「重久篤兼譜中」

篤兼乃往属 公師、五月、公恐兼重或發三侯兵、以伐我後、乃五日、遣式部小三郎疑山田忠能也、爲大將、率守護代森三郎行重・高木孫三郎久安・池袋某・姬木孫五郎大夫等、往攻王子城、在三侯院篤兼從之、六日、渡河先登有功、九日、又属大手大將大隅入道・搦手大將島津七郎資忠・軍奉行本田左衛門尉久兼等、攻彦太郎兼隆於加瀬田城、

在肝付郡六月、兼隆委城去、篤兼有功、乃以聞公、公如花押還賜之、

1854 「重久家藏文書」

大隅國御家人重久孫八藤原篤兼謹言上

同國肝付郡加瀬田城并日向國三侯院王子城後卷合戰事右、自最前於御方致軍忠之条、先日注進畢、去五月五六兩日、隨御奉書、馳向日向國三侯院王子城、渡河懸先□□与黨凶徒等致合戰之次第、大將式部小三郎・同當國守護代森三郎行重・三侯院高木孫三郎久安・池袋□□・姬木孫五郎大夫見知畢、將又自同九日迄于六月(十日)重彦太郎兼隆城加瀬田致軍忠之条、大手大將大隅入道・搦手大將嶋津七郎并軍奉行本田左衛門(耐久兼)同時ニ合戰、地頭御家人等見知畢、仍粗言上如件、

建武三年六月 日

承了(花押)(貞久)

1855 「宮之城柿木原平右衛門文書」

大隅國菱刈柿木原太郎左衛門入道惠佛謹言上右、於惠佛最前御方、度々抽軍忠之上、肝付八郎兼重・

「正文在財部延時氏」

同彦太郎兼隆以下凶徒等爲誅伐、去五月五日、馳向日向國中姬木城、懸合致合戰之處、自身被疵、右首、矢目、此段當國蒲生太郎・同國横川藤内兵衛討見知之上、其日大將大隅式部小三郎并當國守護代森三郎次郎被逐實檢候畢、然早抽軍忠之上者、預御注進、賜覆勳狀、爲浴恩賞、言上如件、

建武三年六月 日

承了(貞久)(花押)

大隅式部諸三郎忠能軍忠事

右、忠能薩摩大隅兩國凶徒等蜂起之間、就下給御教書、令下國、押寄大隅加世田城、大手大將屬于嶋津左京進入(伊作宗久)道道惠手、自五月六日迄于六月十日、日夜捨身命致合戰早、然早軍忠拔群之上者、且預御注進、且賜御承判、浴恩賞、爲施弓箭面目、恐々言上如件、

建武三年六月 日

承了(道隆公一)(花押)

「山田氏文書」

薩摩國延時又三郎入道法佛謹言上「忠繼」

欲早依數ヶ度軍忠、預御注進、浴恩賞、大隅國加瀬田城合戰事、

右、肝付八郎兼重、同兼高与黨凶徒等爲誅伐之、去月六日、大將給州御發向件城墾之間、法佛可馳參之處、依爲當病差進代官賀平田小次郎眞宗、押寄水手、令合戰、自翌日迄于今日十日、連々致合戰忠勤之条、軍奉行人中条左衛門入道祐心所被見知也、而同十日、被責落城墾、凶徒等令靜謐之上者、早預御注進、爲浴恩賞、恐々言上如件、

建武三年六月 日

「道鑑公御譜中」

「正文在未吉衆加冷木縫敷」

薩摩國御家人郡山弥五郎賴平謹言上

欲早任軍忠、被經御注進、浴恩賞間事、

右、兼重以下凶徒等爲誅伐、令發向大隅國肝付郡加瀬田城、自去五月六日迄于六月十日致合戰、每度抽軍忠畢、爰水手合戰之時、最前渡河責戰之刻、親類脇本三郎左衛門尉義清被疵、右首、射疵、此等次第軍奉行中条左衛門入道并多田彦六・太田又太郎・日置北原又三郎等令見知之上

者、早預御注進、爲望恩賞、言上如件、

建武三年六月 日

(真久)
承了(花押)

1859 『篠原氏文書野田土篠原武右衛門家藏也』

薩摩國牛屎院篠原孫六國道謹言上

欲早預御注進浴恩賞事

右、爲國道御方、度々致軍忠之上、肝付八郎(兼重)・同彦太郎

兼高(經)以下凶徒等爲誅伐、馳向大隅肝付郡加世田城、自去

五月六日迄于今日十日、(致合)戰、抽軍忠之糸、無其隱者矣、

然早爲預御注進、謹言上如件、

建武三年六月 日

〔道隆公御判〕
承了判

1860 『高尾野土出水氏家藏』

薩摩國御家人和泉杉三郎入道道悟謹言上

欲早任軍忠、預御注進、浴恩賞事、

右、去五月七日、大隅國肝付郡加世田城大手城戸口合戰

之時、相具子息等、致一番先懸、責寄堀口、切拂逆迎(本殿)

捨身命致種々軍忠之刻、子息弥三郎保右左殿被同八日、射拔

合戰之時、旗差六郎丸左小被射之段、大手大將嶋津六郎

被見知之上、爲同所合戰仁之間、薩摩國牛屎山野彦四郎

入道并同國伊作田兵部丞見知畢、次同廿三日、野崎懸合

合戰時、又致散々軍忠畢、然早任軍忠、預御注進、罷蒙

恩賞、爲施弓箭面目、粗恐々言上如件、

建武三年六月 日

〔真久公一〕
承了(花押)

1861 『正文池端藏』

大隅國祢寢弥次郎清種謹言上

欲早被經嚴密御沙汰、蒙安堵御成敗、當國多祢嶋内見

和村名主職事、

副進

一通 大將家御下文

一通 守護島津判官忠久施行

一通 手繼狀雖有數通
自余略之

一通 系圖

右、於見和村者、養父佐多孫四郎親政重代相傳地也、爰名

越尾張(龜家)左近大夫代肥後次郎入道淨心、以闕東權威、令押

量彼村於理不盡、持于五郎兵衛入道之糸、希代所行也、

隨而擬令言上之刻、世上動亂之間、于今令延引之處、幸奉仰嚴政御代、欲經上訴折節、彼五郎兵衛入道依令同意于御敵、被誅伐訖、然早帶大將家御下文并忠久施行以下之證文等、清種相傳之上者、被經急速御沙汰、爲預安堵御裁許、粗言上如件、

建武三年六月 日

1862

『權執印文書』

薩摩國新田宮權執印良暹子息三郎次郎俊正謹言上

欲早預御注進、浴恩賞、大隅國肝付郡加世田城連と合

戰間、押寄最前野頸、燒拂乱杭逆向木、致拔群軍忠事、

右、俊正自去五月六日至于六月十日、隨大將軍催促、^(押)

寄加世田城、盡矢種後、燒拂乱杭逆向木、致軍忠之上、

連日之間、云野頸、云水手、將又後卷禦手如此致警固、

抽拔群忠之条、嶋津七郎・宮里郡司九郎入道・本田孫二

郎、爲同所合戰、被見知畢、然早預御注進、浴恩賞、爲

施弓箭面目、恐言上如件、

建武三年六月 日

〔道鑑公〕
承了(花押)

1863

「水引權執印文書」

〔本文書ハ一八六二号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔此文書、前ニノスル所ノ文書同案也、欠タルヲ補シカ爲重テノセタリ〕

1864の1

〔越前島津氏七代忠兼第八郎譜中〕

七代
忠兼

五郎三郎 三郎左衛門尉 周防守

八郎

建武中、属 尊氏卿抽戰功、 卿賜感牘、錄于左、

於赤松城致軍忠云々、尤神妙、河上凶徒誅伐事、不日馳向、致軍忠者、可令抽賞之狀如件、

建武三年六月八日 ^(尊氏)
(花押)

周防八郎殿

忠範

十郎

無子孫、

1865

〔道鑑公御譜中〕

〔正文在小根占衆池端諸右衛門〕

〔端書〕
「建武三年六月十八日嶋津沙弥道鑑之證文」

肝付八郎兼重・同彦太郎兼隆以下与黨人等爲退治、伏大

隅國肝付郡加瀬田城墾、去五月六日、大將御發向之間、同

國祢寢弥次郎清種、自同日至于同六月十日、於搦手水手、

致日之合戰左肩被疵、条、嶋津七郎并軍御奉行本田左衛門尉

久兼・同水手御奉行中条左衛門入道祐心被見知訖、將

又与黨人等爲後卷可寄來之由、有其聞問、隨于大將御命、

去五月廿三日、馳向野崎村、懸先致散之合戰之条、野

崎馳相合戰、大將嶋津六郎・同大隅助三郎見知、仍此等子

細、一族一烈捧目安訖、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年六月十八日

建部清種

進上 御奉行所

承了(貞久)
(花押)

〔上書有之〕
「祿寝弥次郎申」

『正文小根占池端氏』

〔本文書ハ一八六五号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1867

『正文文國分正八幡宮社司澤氏藏』

〔引返シカラニ〕
「中津河板越村寄進状案」

奉寄進

正八幡宮御寶前

大隅國寄郡内板越村

右、爲

天下安穩、將軍家御願圓滿、道鑒所願成就、奉寄進之狀

如件、

建武三年六月十八日

沙弥道鑒(貞久)在判

1868

〔越前島津氏七代忠兼譜中〕

〔華氏〕
(花押)

周防五郎三郎忠兼軍忠神妙、可有恩賞之狀如件、

建武三年七月十日

1869

〔越前島津氏七代忠兼譜中〕

播磨國下揖保庄地頭嶋津周房五郎三郎忠兼申軍忠事、去

五月、將軍家御上洛之時、可警固赤松之城之由、賜御教

書之間、雖致警固、河上凶徒蜂起之由就承及、屬御手、今

月六日、於尼崎神崎宿河原并山崎所、致合戰軍忠之条

非一、旁御見知之上者、且賜御證判、可備向後龜鏡候、

以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年七月廿七日 惟宗忠兼
進上 御奉行所

承候了(花押)

1870 「道鑑公御譜中」

『正文在官庫』

當國新納院・同國教仁郷等(肝付)兼重以下輩濫妨事、忠顯朝臣(穴卷)申狀副具如此、子細見狀坎、早追出彼輩、可沙汰居雜掌者、天氣如此、悉之、以狀、

【建武三年歌】
八月四日

日向國守護館(貞久)

(本文書ハ大日本古文書・島津家文書ニハ、元弘三年ノモノト推定シアリ)

1871 『入來氏文書』

(尊氏)
御判

【校正了】
澁谷平次五郎重勝軍忠神妙、可有恩賞之狀如件、

建武三年八月十七日

1872 「右の裏書」

此正文持參京都之處、有長途之怖畏、校正之案文封裏、

可備後證之旨、澁谷新平次入道定圓依申之、所有其沙汰也、

曆應四年二月廿二日

(色藏氏)
沙弥(花押)

1873 「正文在嬭家川上氏」

河邊郡宮村爲恩給所宛行也、於有限公事等者、任先例、可有其沙汰之狀如件、

建武三 八月廿三日

(貞久)
道鑑(花押)

(川上願久)
孫三郎殿

1874 『入來院氏文書』

(尊氏)
(花押)

澁谷九郎重興軍忠神妙、可有恩賞之狀如件、

建武三年九月三日

1875 『正本在川上東馬家』

菱刈郡田中村号重富、内福原・平寒水名主職事、所申付

也、於有限所當米濟物公事課役等者、無懈怠可致沙汰之

狀如件、

建武三年九月廿日

(貞久)
道鑿(花押)

『夢刈郡本城郷今有村名重富者此也、又馬越郷今有村名田中者』

1876 『比志島文書』

薩摩國滿家院上原三郎久基謹言上

欲早任傍例、仰于在國守護御代官并使節、被鎮當時狼藉、猿渡新左衛門尉秀雄子息大丸、乱入久基所領神隱村、致苅田狼藉無謂問事、

右、當村者、自本主稅所彦四郎常久之手、相副次第證文等、令相傳知行之、仍大番以下御公事勤仕無相違之處、彼大丸無謂令及苅田狼藉之段、希代所行也、然早急速被成下御奉書、可鎮狼藉之由被仰下、致其身者、爲被行所當罪科、言上如件、

建武三年九月 日

1877 『比志島氏文書』

(端裏書)
「りんし以上文書うけとり」

去年きやうとにて、よし(義)のりの給(範)はられて候大はんの時(番)のもの、こんとの上に給(覆)はり候てもち候もの(地)く、
一つ りんしあんと 一つ たいりのふかん狀

一つ (貞久)
すこ方のふかん狀、以上三つうけとり候了、

建武三年九月廿四日

(比志島)
貞範(花押)

頼秀(花押)

1878 『越前島津氏譜中』

三代
行景

左衛門三郎 法名道智

四代
忠政

左衛門三郎

1879

下揖保左衛門三郎忠政申

右、忠政下端并押部志深見御合戦仁、捨身命致軍忠、今月廿日、於丹生寺御合戦、馳向(大)□手、致散々合戦早、仍被射左乳上爲重疵之条、御實見分明之上者、早給御證判、欲備後證之狀如件、

建武三年十月 日

承了(花押)

1880 『越前島津氏忠兼七譜中』

目安

嶋津周防五郎三郎忠兼軍忠事

右忠兼、去九月五日、馳向播州下端之城墪、致至極合戰、令分捕御敵一人之間、即被加實見早、次於押部志深見御合戰、數日抽軍忠、加之、今月廿日、於丹生寺合戰、攻入大手之城戸口、捨身命致合戰之處、忠兼被重疵、右腰被射、若黨橫山左衛門三郎景藤同被疵、左肩被射、左ツフシニケ所、之条、御實見分明之上者、早賜證判、欲備後證、仍目安如件、

建武三年十月 日

(赤松内)
承候訖(花押)

「朱カキ」
「上野前司入道殿御教書」

1881

『肝付兼重傳』

建武三年丙子八月、足利尊氏立

光明帝、○十月、

後醍醐帝還京師、○十一月、畠山修理亮直顯自將屯兵於

日州大田城、在国富庄、徵諸郡兵、以伐我黨伊東藤内左衛門

尉祐廣等、居八代城、二十一日、或為二禰寢清種・八郎清道等

馳至大田城、○野邊孫七盛忠、父名久盛、稱六郎左衛門尉、建武元年禰櫛間院地頭、至是三年、

亦據櫛間城、應兼重師、二十一日、直顯使結城弥七行郷、

1882

『全』

着到

友永七郎澄雄・禰寢清種・清道等、往攻櫛間城、盛忠委城走、○十二月、兼重使部下兵成新宮城、在下財部、五日、畠山直顯率福王寺平三郎眞重、本姓土肥氏、乃次郎實平之三世孫云、等入三俣院、六日、直顯使結城行郷・友永澄雄・楡井四郎頼理・禰寢清種・八郎清道等、如下財部攻新宮城、城兵拒之、亦委城去、九日、直顯進圍我高城、十日、長谷場六郎久純・小川小太郎季久等來助直顯軍、十四日、直顯召禰寢重種等、十八日、稻本十郎氏純亦來助直顯、兼重發大手兵擊之城下、禰寢清種・清道・柿木原孫七兼政奮進急攻、我兵拒戰保城、清種・重綱等傷去、晦日、及禰寢孫次郎清成等師戰於城下、我兵却之、是月、後醍醐帝幸吉野、詔改年號爲延元元年、世謂之南朝、

爲誅伐日向國凶徒伊藤之内左衛門尉祐廣・肝付八郎兼重以下輩、御發向之間、爲致軍忠、大隅國祿孫四郎重種令馳參國富庄太田城候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月廿一日 建部重種

進上 御奉行所

(鳥山直顯)
承了(花押)

1883 『長谷場文書』

(端裏書)
「院宣」

日向方飢肥事、可被全管領者、院宣如此、仍如件、

建武三年十一月 日 參議左少辨在判

鶴一殿

(本文書疑フベシ)

1884 「重久駕兼譜中」

九月十一日、為延元年、念佛寺開山智通和尚遷化、亦推時

○十一月、鳥山修理亮直顯自將屯兵於日州大田城、置于此、

徵諸郡兵、以伐伊東祐廣等、乃二十一日、直顯賜篤兼書、

使亦來會、以伐之、

1885 『正文重久氏家藏』

伊東藤内左衛門尉祐廣・肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、

任被仰下之旨馳參、可被致忠節也、仍執達如件、

建武三年十一月廿一日 源(鳥山直顯)

重久孫八殿(篤兼)

1886 「池端文書」

着到

爲誅伐日向國凶徒伊藤之内左衛門尉祐廣・肝付八郎兼重

以下輩、御發向之間、爲致軍忠、大隅國祢寢弥次郎清種、

令馳參國富庄太田城候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹

言、

建武參年十一月廿一日 建部清種(花押)

進上 御奉行所

(鳥山直顯)
承了(花押)

1887 『兼重傳』

爲兼重對治、所有發向三俣院也、早馳參可被致忠節、仍

執達如件、

建武三年十二月十四日 源(鳥山修理大夫義顯)(直顯)

祢寢八郎殿(清連)

1888 『全』

爲兼重對治、所有發向三俣也、早馳參可被致忠節、仍執

達如件、

建武三年十二月十四日

(鳥山直繼)
源(花押)

祢寢孫四郎殿

1889 『全』

着到

爲誅伐肝付八郎兼重以下凶徒、三侯院大將御發向之間、
稻本十郎氏純爲致軍忠、馳參候、以此旨、可有御披露候、
恐惶謹言、

建武三年十二月十八日

宗像氏純

進上 御奉行所

承了判

1890 『川上譜頼久傳』

建武三年丙子、初足利尊氏・新田義貞等既滅北條高時、
兩雄爭權、戰鬪日起、天下牧伯多應尊氏者、我 道鑑公
亦應之、義貞奉春宮據金崎城、是年十月、尊氏使足利高
經・高師泰等攻金崎城、在越前 敦賀郡、時 公在國、乃遣頼久、
將兵助之、十二月廿三日、足利直義賜本田次郎左衛門尉
久兼・比志嶋彦一範平・莫禰次郎太郎成長入道圓也等御

教書各一通、使與頼久俱往伐賊於敦賀城、久兼・成長等
皆有病、成長遣子孫太郎重貞、久兼遣弟資兼、莫禰左兵
衛尉政貞 亦成 長子、遣族人貞國、同赴之屬師泰軍、

1891 『都城臣本田仁十郎藏書』

度々合戰之間、郎從等被疵之条、尤神妙也、於恩賞者、
追可有其沙汰、將又敦賀津凶徒事、頼久嶋津孫三郎相共馳向
彼城、可抽軍忠之狀如件、

建武三年十二月廿三日

足利直義
(花押)

久兼
本田次郎左衛門尉殿

〔川上頼久譜中、正文在入來衆在本田伝藏トアリ〕

1892 『比志嶋相馬家藏』

度々合戰之間、郎從等被疵之条、尤神妙也、於恩賞者、
追可有其沙汰、將又敦賀津凶徒討治事、頼久嶋津孫三郎相共
馳向彼城、可抽軍忠之狀如件、

建武三年十二月廿三日

足利直義
(花押)

範平
比志嶋彦一殿

貞久公 建武四年

前 舊記雜錄 卷十九

1893

〔國史道鑑公〕

四年丁丑、南朝延元二年、春正月八日、孫三郎賴久、從高師泰攻

金崎城、魏島津系因、此戰及下十八日、三月二日、四日、五日、凡六戰、不見太平記、按建武三年十月十四日、足利氏軍始攻金崎城、四年三月六日城陷、蓋其間十日、島山直顯遣禰寢清

數十戰、太平記書其太略、不暇悉奉云

成・清種・清道等、攻石山城、下之、拋小松氏・池端平左衛門・根占越右衛門家藏

文書、石山城亦係肝付氏党与所拋、諸與郡高城郷、有湯、尾權現、在地頭館西北一里十町有奈、相伝為石山城遺墟、十四日、

禰寢清成與高城軍戰于城下、拋小松氏文書、十八日、本田資兼・

莫禰重貞與金崎軍戰于塹上、拋島津支流系因川上氏譜、本田久兼言上狀、阿久根徳右衛門家藏莫

禰重貞軍忠狀、莫禰重貞軍忠狀云、大將御見知、按是時、本田資兼、莫禰重貞、与賴久俱、屬高師泰部下、然則所謂大將者、豈謂師泰乎、

二月十二日、足利直義賜執印友雄・莫禰圓也・牛屎左近

將監高元教書各一通、使與島津賴久俱攻致賀凶徒、拋執印久

馬・阿久根徳右衛門・國分宮内禰、七郎右衛門家儀榮右衛門家藏文書、牛屎高元、大秦元光之五世

孫也、元光、見第六卷文治三年、拋淵刃弥兵衛系因、大秦、十五日、禰寢清成與高城軍

戰于城下、拋小松氏文書、十六日、本田資兼・莫禰重貞與金崎

援師戰、資兼・重貞先登、重貞獲敵一人、拋本田久兼言上狀、莫禰重貞軍

忠、二十一日夜、高城失火、柿木原兼政・結城行郷・土

持次郎重綱・大隅守護御代官森三郎次郎行重攻東水寨、

不克、拋柿木原平右衛門家藏文書、二十九日、禰寢清成與高城軍戰于城

下、長谷場六郎久純戰于北野頸、拋小松氏・長谷場源助家藏文書、長谷場

氏之先、出自伊予掾純友、純友子直純、為鹿兒島郡司、稱鹿兒島越前守

直純、孫曰永純、永純築東福寺城、始稱長谷場氏、子孫或稱鹿兒島、久

純、永純九世孫、長谷場、即今福昌寺地、三月二日、重貞・資

兼與金崎軍戰于塹上、拋莫禰重貞軍忠狀、本田久兼言上狀、四日、資兼夜與城

兵戰于塚樓下、拋本田久兼言上狀、五日、資兼・重貞夜先登入于城

中、重貞獲敵一人、資兼中飛石、拋本田久兼言上狀、六日、金

崎城陷、拋太平記、延時法佛・知覽院式部三郎・井手籠孫次郎

有戰功、拋宗久旧譜、足利直義感狀、延時九郎兵衛家藏文書、太平記、遣島津駿河守

口治、取皇太子於蕪木浦、此時本國公族無島津三郎、有島津式部

三郎、有知覽院三郎久直、二階堂氏譜觀応三年正月足利直冬下文、有島津式部

之子曰豊後守口宗、号知覽院、口宗之孫曰式部又三郎賴忠、賴忠之孫曰

久直、合而觀之、則知覽院三郎久直、島津式部三郎、知覽院式部三郎、

疑是一人、異稱柿木原平右衛門家藏嘉應元年十月契約狀、有井手籠孫次郎

重貞、諸家大概記、一南山巡狩錄云、七日夜明、島津駿河守忠治開蕪木浦井手籠牛屎氏之別族、七日、賜、公教書曰、今日六月六日卯刻、

人告、青宮在迎之云、異本作今川殿河守
陷越前金崎城、誅義貞以下、燒夷城郭、其俾大隅薩摩地

頭御家人聞知、死、奔仙山、而京師未之知、故教書云云、是日、

足利直義下文、使二階堂三郎左衛門尉行雄、照世之下文

及延慶二年六月二十九日外題安堵例、食薩摩阿多郡北方

田布施之平、豊前金田莊金田村之平如故、文書、外題安堵、

依當時語、按二階堂氏承因、奉行村讓狀於行雄、行雄上之於幕府、延慶

二年六月二十九日、幕府命陸奥守、相模守下書、使行雄傳父邑如讓狀、

所謂外題安堵、行雄、行久之父也、同上、二階堂行久八日、

公賜大隅守護代書曰、今月六日卯刻、陷越前金崎城、誅

義貞以下、燒夷城郭、其俾國中地頭御家人聞知、原柿木

衛門家藏文書、按此年三月六日金崎城陷、明日賜公教書、又明日公賜大

隅守護代書、告以教書之旨、則此年公在京師矣、蓋公去年掃目現前、自

將攻加瀨田城、十七日、三條侍從泰季爲南朝徇地薩摩、

既而復之京師爾、三條隆公旧譜、揖宿成榮延元三年二月五日言上狀、

此徇地、蓋夏四月二十六日、足利直義命孫三郎賴久、島

津道惠、擊大隅助三郎・谷山五郎・鮫島彦次郎入道、

鮫伊作家譜、出水七兵衛家藏文書、指宿左衛門系圖、伊佐平次貞時之

族、有別府五郎忠明者、忠明玄孫曰資忠、島津支流系圖、山田氏文書、

谷山郡可資忠自稱五郎入道覺信、建武元年十二月覺信死、子五郎左衛門

入道隆信嗣、則此年云谷山五郎者、當是隆信、然自弘安以來教書、言覺

源賴朝封得公於薩隅日三州、下教書曰、三州地頭御家人宜爲島津氏私

人、鮫島氏不與焉、鮫島氏乃阿多忠景也、蓋賴朝以叔父之屬翁故、別

而二階堂氏譜、載阿多領主郡司平忠景保延四年十一月十五日親音寺寄進

狀、保延四年、阿多忠景已爲阿多郡司、其後五十餘年、至於建久三年、

鮫島宗家始爲阿多地頭、則鮫島氏非阿多忠景也明矣、而賴朝教書云云、

所謂鮫島氏不與焉者蓋或有其說矣、不可得而知也、聖榮強求其故、乃以

鮫島氏爲阿多忠景、遂言賴朝以叔父之屬翁故加寵異、率合附會甚矣、

自記言、爲朝娶於阿多忠景之女、而鮫岳公旧譜則曰、娶於阿多忠景三

郎國之女、考諸大日本史爲朝臣、爲朝自稱九國總追捕使、以婦翁阿曾

三郎國爲鄉導、大小二十餘載、此此則爲朝娶於大隅助三郎名忠

親、伊集院久兼之孫也、流系圖、二十八日、足利尊氏下

文、使菱刈氏宗人領菱刈院半平地頭職、以賞軍功、拋孫

太師、五月十七日、足利直義賜澁谷平次郎教書曰、方遣

島津賴久・島津道惠、討薩摩國凶徒、卿等宜務立軍功、

島津津支、十八日、賜莫禰圓也・大寺弥六・大田六郎次郎

等教書各一通、亦如之、德宗久旧譜、阿久根益山四郎・古

木彦五郎、以其族叛、據伊作莊中原城、六月十一日、大

隅前司入道道意、島津久島津大隅式部龜三郎丸拔之、殺

古木彦五郎・益山十郎彦六等、大隅式部龜三郎丸、忠能

之弟也、拋島津支流系圖、諸家大概記、以益山氏爲伊佐平次貞時之

郎左衛門時家入道道尊・鹿兒島郡司・知覽院又四郎・光

富又五郎・石堂彦次郎・秋次三位房・益山新次郎・古木

三郎等、戰於阿多郡高橋、斬獲若干人、同上、原文稱市來太

來次左衛門系國、即時家也、是年矢上左衛門五郎高澄攻比志島城、見下

澄或作純、曆三年八月十五日、莫祢門也、攻鹿兒島郡司矢上左衛門五郎

高純於催馬來城、見阿久根徳右衛門家藏曆應四年五月門也軍忠狀、自曆

應三年遊至是年、僅三年矣、則此云鹿兒島郡司則高純也、知覽院又四郎

即知覽郡司平忠世、見島津支流系國山田氏譜、矢上氏見下、時家、政家孫也、拋市來次左衛門系

第二卷文、市來時家據市來城、應南朝、軍勢稍振、同上、有二城

城、一曰鶴丸城、一曰鍋ヶ城、鶴丸城中有地名平城、而曾木人宮里六郎

左衛門家藏文書、宮里種正軍忠狀云、當平城南面拒敵兵、則時家所拋

者在市來別館東南一里三十町余、二十七日、孫三郎賴久攻市來城、

大隅五郎兵衛尉爲軍奉行、島津大隅式部龜三郎丸・莫禰

圓也等率衆來會、拋島津支流系國、延時九郎兵衛、阿久根徳右衛門

尉、名嗣、按遠矢十郎兵衛家藏曆應三年九月十一日資久往進狀、有大隅

五郎兵衛助助久、島津支流系國町田氏譜、有五郎兵衛助助久、助久五郎太

郎忠光五世孫、忠光道公之族、子孫稱大隅某、則大隅五郎兵衛尉、當是町田助久、二十八日、教書使、公

擊吉野凶徒、拋道鑑公旧譜、建武四年八月十日、公遣比志島少輔房之

教書云、吉野凶徒、即指大衆而言、延五元年、後醍醐帝幸吉野、大衆扈之

南朝延元元年、即北朝建武三年也、二十九日、宮里正永・三郎

次郎種正・延時彦五郎忠能、或作忠義、河田慶喜等曾孫三郎賴

久、攻市來城、按島津支流系國、有馬長右衛門家藏文書、宮里孫之

孫、曰河内判官兼遠、兼遠嗣於薩摩、伝五世至信經、信經二子、長曰薩

摩新據信章、是爲高城郡司祖、次曰正信、領宮里郷、是爲宮里氏祖、建

久、凶田帳、有官里郷司紀六太夫正家、即正信、忠能、忠種之弟也、

子、蓋子孫世領宮里郡司職、種正者其支屬也、拋延時九郎兵衛家藏文書

河田慶喜擊走之、燒夷村落、拋有馬長右衛門家藏文書、石谷村在伊集院郷、九日、

足利直義賜島津道惠教書曰、近承、院宣、命島津上總入道

擊吉野凶徒、宜共立軍功、拋伊作家譜、十日、公賜島津道惠

書曰、奉七月二十八日教書、擊吉野凶徒、君其將兵來會、

賜比志島少輔房書亦如之、拋道鑑、延時忠能與市來時

家軍戰于石走、拋延時九郎兵衛文書、石走地名在市來地頭館東南三十五町大里村、十四日、延時

忠能・石原忠充石原忠充即大夜戰于赤崎、拋伊集院十右衛門

書、赤崎在市來地頭館、二十日、石原忠充與市來救兵戰、拋伊

東南一里九町湯田村、集院

府當有恩賞、寡人先賜汝滿家院油須木四町、汝其領之、

拋道鑑公旧譜、油須木村名屬郡山郷、今作油須木、按比志島氏世爲滿家

院郡司、則油須木村、固在其中矣、而今特賜四町者、豈其嘗喪此地歟、

彦一、義範之子也、按比志島傳人系圖、比、十四日、大隅助

三郎國引兵救市來城、孫三郎賴久與莫禰圓也等、還兵

擊之、戰於伊集院郡本、既復圍市來城、拋阿久根徳右衛門家

曆應二年七月軍忠狀、是時國及大隅助勝久詳道助猶在、國遠其父

時應、不應稱助三郎、關係可也、因本合戰勝敗不詳、蓋賴久敗、國軍、國

引退、於是、復圍市來、自十七日至於二十七日、凡數十戰、延

時忠能、斂島弥二郎入道來阿有戰功、拋島津支流系國、鹿兒

家藏文書、斂島次左衛門系、島町人斂島民部左衛門

來阿斂島家高之孫也、門家藏文書、三條泰

季以揖宿氏兵救市來城、拋指宿寺左衛門、島津大隅式部龜三郎

丸・莫禰圓也・比志島孫三郎範經・延時忠能・大隅五郎

兵衛尉・河田慶喜等禦之、自二十八日至於晦日、凡數十戰、島津大隅愛壽丸家臣東條孫七尚元等有戰功、比志島範經・莫禰孫五郎貞友入道覺與・覺與弟乙房丸戰死、覺與・乙房丸、圓也之二子也、拋島津支流系圖、比志島軍人、阿久根徳右衛門、有馬長右衛門家藏

文、大隅愛壽丸、宗久之子、拋伊作家譜、範經、義範之長庶子也、拋比志島、冬十月十一日、本田久兼、從 公攻大和一二上城、又戰於味曾路越、有軍功、拋道鑑公旧譜、久兼言上狀、按二上然拋言上狀曰、從公云云、則公有此行明矣、上、（頭注ニ沙彌重念言狀ヲ記言奉七月二十八日教書、吉野凶徒者、豈是乎、）十八日、矢上左衛門五郎高澄、夜攻比志島城、大隅國人吉田彦次郎清秋將兵救之、高澄引去、拋比志島軍人文書、矢上氏者長谷場氏之族、見長谷場源助系圖、吉田納右衛門系圖、吉田氏系出息長宿称雅純、雅純生助清、助清為國分正八幡宮神職、娶源為重女、生清道、源為重者、鎮西八郎為朝之次子也、領吉田院、以与清道、因以為氏、清道五世孫曰清秋、即彦次郎也、比志島城遺墟、在今府城北比志島村、相去三里許、肝付兼重・野邊孫七盛忠・大隅助三郎・谷山郡司・鹿兒島郡司・知覽郡司等、築壘郡田・清水・鼻連山、十一月二十九日、攻橋木城、重久孫八篤兼禦諸吉水、拋森岡孫之進家藏文書、郡城家臣野辺氏之先、出自武藏横山党、横山党者七党之一也、本姓小野氏、有領武州藤沢郡野辺郷者、因以為氏、又有領日州櫛間院地頭職者、伝至六郎広業、無子以內大臣平重盛第七子土佐守宗実之玄孫左衛門尉盛行為嗣、盛忠、盛行之曾孫也、又小松氏文書、島山直頭注進狀云、建武四年十月十一日、与野辺孫七戰、郡田村者、屬曾於郡清水郷、清水郷弟子丸村有清水寺、亦号真珠院、橋木城遺墟、在曾於郡地頭館西北六町重久村、吉水、地名亦在曾於郡、重久氏出自稅所氏、十二月二十日、足利義興賜大夫判官宗久教書、使發宗久及大隅薩摩之兵、伐開住・西阿以下凶

1894

徒、拋宗久旧譜、太平記、去年十二月二十一日、後醍醐帝幸吉野、宿衛士有三輪西阿、開住不詳、

（注）南山巡狩云、今年懷良親王在征西將軍、筑紫菊池一族奉之、伐近國、事見太平記、後醍醐系圖、按元弘日記、牧島邊遊風云、太平記參考、為懷良事拋此、
官居鎮西在延元三年後此、大草公弼說也、

『山田氏文書』

島津大隅式部諸三郎忠能謹言上

欲早任傍例、預安堵御下文、備末代龜鏡、薩摩國谷山

郡内山田・上別符兩村地頭職事、

副進

一通 系圖

一通 関東御下文案文 正文者在惣領、

一通 忠貞讓狀案文 正文者同在惣領、

一通 関東下知狀

一通 道慶讓狀

一通 鎮西下知狀

一通 綸旨

一通 決断所御下知

右、當職者、忠能父祖代之所職、當知行于今無相違者也、仍手継安堵以下證文等、謹備于右、然早任傍例、預安堵御下文、為備將來證券、恐言上如件、

建武四年正月 日

〔兼重傳〕

延元二年丁丑、即此北朝建武四年先是兼重使兵別戍石山城、遺在高城、以爲外援、至是烏山直顯謀剪羽翼、正月十日、使

高木孫三郎久安・禰寢孫次郎清成・弥次郎清種・八郎清道等、進攻石山城、城兵拒之、傷清種等、城兵不利、委而走、十四日、禰寢清成等寇我高城、兼重擊之城下、

○二月十五日、清成等復攻高城、兼重拒却、二十一日、高城夜失火、直顯乘間、乃使柿木原兼政・結城行郷・

森三郎二郎行重・土持次郎重綱等、攻東水塞、我兵善禦走之、二十九日、禰寢清成復攻高城、長谷場久純攻北野頸、皆防却之、久純等傷去、先是

後醍醐帝使三條侍從泰秀、(季)率名越左近將監高家名越尾張左

後次郎入道淨心飯閑東威、掠多爾島見和村、事見建武四年六月禰寢清種言上狀、又肝屬地頭尾張前司高家見上正中二年、此云左近高家疑此等、來九州討足利黨、以援菊池及兼重等師、時

道鑿公在京師、乃三月、泰季徇地薩摩、立營南方、

今谷山下種元村有地名御所箇原、又距一町許有菊池裏、土人相伝、爲菊池氏奉征西將軍宮、來立營處、又曆應五年七月道鑿公賜莫禰遠屋書云、称四国宮、來薩藩南方專兵我党、以擾邦内云々、又肝屬氏所世藏錦旗爲大塔宮所賜云、如此等說、疑此泰季徇導菊池、奉宮來立營也、然官親入薩未知其拠、遠都鄙人觀泰季至、誤伝爲宮亦未可知也詔賜兼重錦旗、令以麾諸

軍、或爲元弘二年事、疑此誤、今姑置此十七日、河上又次郎家久入道道乘・

揖宿彦次郎忠篤入道成榮等來會應之、於是大隅助三郎

忠國・谷山五郎左衛門入道隆信・鮫島彦次郎入道蓮道

・市來太郎左衛門時家入道道尊・鹿兒島郡司矢上左衛

門五郎高純・知覽院又四郎忠世・光富又五郎友徑入道

心榮・石堂彦次郎入道・秋次三位房・益山新次郎・古

木三郎入道之屬、各以邑應之、兼重兵勢由是復振、二

十二日、大隅忠國等帥兵侵守護町、守護代酒勾左衛門

尉久景徵兵於比志島、乃二十三日、比志嶋彦一丸範平

遣庶兄孫三郎範經往救之、四月十四日、直顯自三俣引

去據穆佐城、

1896

〔肝屬氏家藏旧記〕

一件家之旗ハにしきの旗ニ而候、元弘二年ニ大塔宮之御旗を、三俣八郎左衛門兼重ニ被下候、旗の横廣さ三尺三寸、長さ一丈にて候、鳩居二十五口、旗さほ一丈五尺也、

〔池端文書〕

日向國凶徒爲誅伐肝付八郎兼重、去年十二月五日、大(高)將御發向三俣院間、以同十八日、押卷兼重城郷、云致

1897

合戰時、云攻落石山城時、清種兩度被疵事、(單九)

一去年十二月十八日、兼重城墾自大手城戸出相數輩凶徒等之時、懸先致散之合戰、追入御敵於城戸口、清種被疵訖、右脛射疵、

一今年正月十日、隨于大將御命、攻落石山城之時、懸先於大手清種被疵訖、左手射疵、

右、所之合戰致先懸、自身兩度被疵訖、仍注文如件、

建武四年正月十日 建部清種(裏花押)

進上 御奉行所

見知了、藤原(花押)

1898 『川上家賴久傳』

建武四年丁丑正月八日、賴久以本田資兼・莫禰重貞・貞國等、從高師泰、攻敦賀城、即金崎城、十八日、賴久及資兼・重貞・貞國等、進戰于塹上、二月十二日、足利直義賜執

印又三郎友雄・牛屎左近將監高元等御教書各一通、亦使與賴久俱攻之、十六日、本田資兼・莫禰重貞・貞國・宮

里彦七・東條七郎等與援軍戰、資兼・重貞先登、重貞斬敵一人、資兼被傷、三月二日、賴久及本田資兼進戰於塹

上、四日、本田資兼・豊後弥三郎・牛屎郡司疑是左近將監高元、等、

夜與城兵戰于堠樓下、資兼有功、五日、資兼・重貞及泉

弥三郎・和田九郎高越後守部下、等、夜先登入城中、重貞斬獲、資兼中飛石、六日、遂攻陷之、燒夷城郭、城將新田義貞本詐死出奔云、

田資兼・莫禰政貞代官貞國・延時法佛代官信忠・知覽院式部三郎・井手籠孫次郎等有戰功、賴久乃劾首虜具其功狀、以聞直義云、

1899 『水引執印吉左衛門友賢家藏』

度之合戰之間、自身并郎從等被疵之条、尤神妙也、於恩賞者、追可有其沙汰、將又敦賀城凶徒誅伐事、「賴久也」嶋津孫三郎相共馳向彼戰場、可抽軍忠之狀如件、

建武四年二月十二日 (直義) (花押)

新田宮執印又三郎殿

1900 『加治木桑波田氏藏書』

度之合戰間、親類郎從、或討死、或被疵条、尤神妙也、於恩賞者、追可有其沙汰、將又敦賀城凶徒誅伐事、(賴久)嶋津孫三郎相共馳向彼戰場、可抽軍忠之狀如件、

建武四年二月十二日 (直義) 御判

牛屎郡司左近將監殿

1901 『入来院氏臣武光氏文書』

度々合戰之間、自身并郎從被疵之条、尤神妙也、於恩賞者、追可有其沙汰、將又敦賀城凶徒誅伐事、嶋津孫三郎相共馳向彼戰場、可抽軍忠之狀如件、

建武四年二月十二日

〔藤氏弟足利直義〕
(花押)

〔重兼〕
武光三郎殿

1902 『宮之城柿木原平右衛門文書』

『載兼重傳』

爲兼重以下凶徒等誅伐、三侯院御發向之間、自最初臣馳參、致軍忠之處、去廿一日夜、兼重之城燒失之時、大隅麥刈郡柿木原孫七兼政、於當水手致合戰之間、被射左腰了、仍即時被見知、不日欲被經御注進候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年二月廿二日

〔柿木原孫七(兼)〕
藤原□政

進上 御奉行所

見知了、守護代沙弥榮定(花押)

1903 『財部延時氏藏』

薩摩國延時又三郎入道法佛代信忠謹言上

欲早預御注進、浴恩賞、越前國敦賀城合戰軍忠事、

右、就御教書馳參、致軍忠候早、然早爲預御注進、恐言上如件、

建武四年三月六日

〔島津頼久花押〕
承了(花押)

〔川上頼久譜中、正文在財部兼延時藤左衛門トアリ〕

1904 『宮之城柿木原平右衛門藏』

越前國金崎城凶徒事、今月六日卯時、義貞已下悉加誅伐、燒拂城塙了、普可相觸仰此趣於大隅薩摩兩國地頭御家人等狀如件、

建武四年三月七日

〔重兼力〕
御判

嶋津上總入道殿

1905 『全上』

越前國金崎城凶徒事、今月六日卯時、義貞已下悉加誅伐、燒拂城塙之由候事、御教書如此、早任被仰下之旨、可相觸國中地頭御家人等之狀如件、

建武四年三月八日

道鑿在判

大隅國守護代

「載山田譜」

目安 大隅式部孫五郎入道之慶子息忠能申

薩摩國伊集院地頭御代官非法条之事

一當院内土橋村内嶋廻田一町道慶本領也、然依有要用、

爲大隅助三郎入道之助、入置本物返質券之處、去之年

建武 依諸國一同法、被成下決斷所御牒并國宣守護施行

等、被返付之處、自御代官方被點定彼田作毛、以前五

ヶ年加徵米可懸當作之由、被仰之間、既去年不及耕作

之条、且公物闕如欸、然早自當知行年、始而可致其沙

汰之由、蒙御成敗、欲全公私得分矣、

一同院石谷村内古里馬渡田一町、同村内瀬戸口田二反、

爲道助息女号北女房
今者死去、入置質券、是又依同法、被返付之

處、又依同篇違乱、被押取下地、泉殿御代官福崎五郎

令自作之条、無術次第也、於地頭米者、爲當作沙汰令

弁濟之条、定法也、仍自當知行年可被相懸之處、不知

行分及呵責愁歎多也、早於下地者、被返付之、有限至

地頭課役等者、自當知行之年可致其沙汰之由、欲蒙御

成敗矣、

一同院福山村内大路田・柳田合五段、彼田者、當院別施

入十八町天神御領之内也、然間、令停止諸御公事之条、

自余村之無其隱之處、限彼田五段、稱可相懸加徵以下

公事等、福崎五郎令刈取作毛候条、無術歎也、彼別施

入田懸公事否事、當院内名之有御尋、不可有其隱者也、

就中、於此所當米者、每年天神御供物也、且及有道之

御沙汰候条、御祈禱一分欸、然則任先例、被返付下地、

欲被停止諸公事矣、

一同持丸名内原田垣下田温穴前田分、自去之年建武
二年、六月

迄于去年秋比、夫用途四ヶ度被懸召之間、作人等難合

期者也、仍任法例、欲被經御沙汰矣、

一古江蘭桑迫源太迫三ノ小山ノ原、自去之年秋、福崎五

郎無是非被押取候条、無術者也、早欲返付之矣、

一同古江蘭并福山百姓等、一緣被召仕之条、以同前、

一同御代官年貢濟成等物之雖致沙汰、不出請取之条、欲被經

誠御沙汰矣、

以前条之、於在國雖歎申之、一向無叙用之間、恐之所令

言上也、

建武四年三月 日

1907

「載山田忠能譜」

大隅式部孫五郎入道子息忠能重言上

薩摩國伊集院内馬渡田島以下、自當院御代官方被致押領間事、

右、巨細先度言上早、而自當院御代官方、彼田地等被押領事、同院兵衛三郎所令存知也、有御尋、不可有其隱、

然早被尋究此等子細、被經急速御沙汰、糺給忠能、爲令全地頭御米等、恐々重言上如件、

建武四年三月 日

1908 『古本川上直左衛門所藏』

着到

爲誅伐肝付八郎兼重以下凶徒、去年建武三年十二月五日、大將軍御發向三侯院之間御供仕、眞重福王寺平三郎致軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年三月十日 平眞重

進上 御奉行所

『龜山直顯花押』
『証判文言脱カ』(花押)

1909 『正文池端家藏』

去年十二月十八日、兼重城於大手、自身被疵右肘、今年建武四月十日、石山城破却時、重自身被疵左手之案、令

見知了、此旨可注進候、仍執達如件、

建武四年三月十五日

衾寝弥次郎殿

『土持次郎』
重綱(花押)

1910 延元二年丁丑建武四年とあれども前年二月改元なり

三月十七日、指宿次郎忠泰戦死其場を詳にせず、亦冠してかも考へからず

五月二十五日、比志島彦五郎義範足利尊氏に属し新田義貞と扱の兵庫に戦ひ死之

或へ彦太郎ともあり

九月晦日、比志島孫三郎範經宮方の大将三条泰季指宿の兵等へるを撃て、此月廿八日より晦日まで、市來時家を市來城に救

ての戦に死せり、下の両士も同じ、莫根孫五郎貞友入道覺與

・同弟乙房丸、常陸房範経、又三郎範経旗差

十月十八日、六郎入道比志島彦一丸若党なり、矢上高澄比志島城を夜討せし時戦死

1911 『高岡河上氏文書』

『官軍之爲大将、延元二年三月十七日、下向于九州トアリ』

『三条時從泰季卿之證判』
被聞食了(花押)

爲退治尊氏・直義与黨凶徒、御發向薩摩國之間、爲致軍

忠、市來院河上又次郎(家人)入道導乘最前馳参御方、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

延元二年三月十七日 沙弥導乘上

進上 御奉行所

1912 『戴山田譜』

津野殿脚力のほりの時、二月三日狀同三月十一日到來、委細ニ承候了、自何方も國いまたせいひつせす候へハ、歎入候、是も當時ハ御さたハしまらす候、ハしまり候ハ、一端申候て罷下へく候、御身のすぎはの事、さこそ候らんと察存候て御いたわしく候、孫二郎殿もかひくしくをいたゝれて候らん事悦入候、とくく下向候て、かたくも見たてまつり候ハやと、ねんせられてこそ候へ、今めかしき事にてハ候へとも、したしき中のかたくもて、御渡候へ、万事憑申て候、さてハ山田入道殿よりこれに狀を給へく候、我申事のせふんつかせ給候ハんよし、うけ給にこそ無勿躰候へ、兔もかくも入道殿仰られ候ハん事をそむかれ候ハん事ハ、あさましき事にて候へく候、此後ハ其旨を御存知あるへく候、又ひはの事承候、取てをかせ給へく候、何物にて候へ、入候ハん物ハ京とへ注進までも候ましとてをかかるへく候、又馬代用途の請取の事うけ給候了、大方殿も御狀もまいらせす候、此山臥文かすをいたみ候之間、申入す候、このよし

を御申あるへく候、其上たふせのかくりきくたりの時まいらせて、此脚力いく程なく候間、申入す候由、御心へ候て御申入へく候、若黨共中へもこの由物かたりあるへく候、又宗四郎かたへさやまきの刀くたし候、其様を仰らるへく候、恐々謹言、

三月十八日

山田三郎殿

『道恵』
たうゑ(花押)

1913

『比志島相馬藏』

(伊集院)

薩摩國大隅助三郎忠國以下凶徒等、以去廿二日、寄來守護町之由、就守護御代官御催促、同國比志島彦一丸代孫三郎忠經爲軍忠、御方令馳參候早、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年三月廿三日

源忠經

(酒匂久惠)
承候了(花押)

1914

『水引權執印文書』

薩摩國新田宮權執印良邊代子息三郎次郎俊正申、今月廿二日、大隅助三郎以下凶徒等寄來之時、最前令馳向薩摩山口、致合戰事、

右、散々合戦之条、御見知之上者、早預御注進、弥爲致軍忠之、言上如件、

建武四年三月廿五日

「酒匂殿(久兼)承了在判」

1915 於鎮西加瀬田城、致軍忠云々、尤神妙也、可有抽賞之狀如件、

建武四年三月廿八日

判

稻本十郎殿

1916 『都城臣本田仁十郎藏書』「頼久譜中ニ在リ、正文在入來兼本田傳藏ニ在リトアリ」

目安

本田次郎左衛門尉久兼申、越前國敦賀城合戦軍忠事、
一正月十八日、押寄彼城大手脇堀際、終日合戦之条御見知畢、

一二月十六日、後卷大勢寄來之時、致先懸捨身命、盡軍忠被疵右足射疵之条、同時合戦之仁、宮里彦七・東條七郎等見知畢、

一三月二日合戦、攻寄堀際、致軍忠之次第御見知畢、
一同四日夜、押寄大手城戸口矢倉下、終夜合戦之条、豊

後弥三郎・牛屎郡司等見知之畢、

一同五日夜、最前攻入城之刻、以石被打肩之条、高越後守御手之仁、泉弥三郎・和田九郎等見知畢、

右、久兼依當病、差進舍弟資兼之間、自正月八日迄于三月六日、晝夜抽軍忠之条、證人等分明之上、御見知畢、然且給御一見、且爲預御注進、恐々言上如件、

建武四年四月 日

「頼久花押」承了(花押)

「張紙ニ」「島津孫三郎左衛門尉殿御一見狀」

1917 『高尾野出水藤之丞藏』

「口裏ニ」「恩賞事 道悟申狀案」

貳嶺右京ニ付、上此狀由ニテ持下北狀也(此カ)
薩摩國和泉杉三郎入道々悟謹言上

欲早任大隅國加世田城并野崎城懸合戦軍忠、浴恩賞、播弓箭面目事、

副進

一通 將軍家御教書建武三年三月廿八日

一通 守護人嶋津上總入道道鑿一見狀同年六月日

右、去年三月將軍家鎮西御下向之間、道悟馳參幸府之處、

可誅伐肝付八郎兼重以下凶徒之由、依下賜御教書、屬于

道鑿、同五月六日押寄當城、致散々矢軍早、同七日合戰

之時、道悟相具子息等、最前攻寄大手城戸口際、切拂逆

迎木、不惜身命抽軍忠之刻、子息弥三郎保右被疵、被射

拔左股之条、大手大將嶋津六郎被見知之上、爲同所合戰

之間、薩摩國山野彦四郎入道・伊作田兵部丞見知早、同

八日合戰之時、旗差六郎丸左小肘被射之早、同廿三日野

崎懸合合戰之時、致散々戰、追落兩城早、此等次第、大

將道鑿一見狀明白也、然則任度々軍忠、浴恩賞、爲施弓

箭面目、恐々言上如件、

建武四年四月 日

1918 「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津五郎三郎代右衛門太郎致軍忠之条、尤以神妙、於恩

賞者、可執申之狀如件、

建武四年四月十五日

(花押)

1919 「宮之城柿木原平右衛門文書」

大隅國守護代森三郎次郎行重、被遂實檢了、

建武四年四月十九日

藤原兼政

進上 御奉行所

「直繼花押」
承了(花押)

1920 「高尾野士出水藤之丞藏」
「口裏」
「到七一」

御教書案南方

薩摩國凶徒大隅助三郎・谷山五郎・鮫島彦次郎入道已下

輩誅伐事、相催當國地頭御家人、不日令發向、可致軍忠

之狀如件、

建武四年四月廿二日

嶋津孫三郎殿

「足利直義」
御判

1921 「正文池端氏藏」

大隅國祢寢弥次郎清種、爲誅伐日向國凶徒伊東藤内左衛

門尉祐廣・肝付八郎兼重以下輩、去年十一月廿一日、馳

參國富庄太田城、同廿二日、爲對治兼重馳向、結城孫七

行郷・友永七郎澄雄、相共十二月六日、兼重与黨等楯籠

押寄下財部院新宮城、致合戰、同九日、打向三侯院之刻、

御發向之間、以同十八日、押卷兼重城墪之處、自大手城

戸出相數輩凶徒等防戰之時、清種捨身命懸先、致散々合

戰、追入御敵於城内、於城戸口被疵右歴射疵、訖、隨而行郷

・榆井四郎頼理令見知訖、將又隨于大將御命、今年正月

十日攻落石山城之時、於大手懸先、致散々合戰被疵左手射疵、

訖、仍高木孫三郎久安并同時合戰地頭御家人令見知訖、

然自去年迄于今連日合戰、捨身命抽軍忠、兩度自身被疵

候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年四月廿三日 建部清種(異花押)

進上 御奉行所

『高山直顯花押』
承了(花押)

1922 『写本肝厲氏藏』

爲誅伐日向國凶徒伊東藤内左衛門尉祐廣・肝付八郎兼重

以下輩、大隅國祢寢八郎清道、去年十一月廿一日、馳参

日向國々富庄大田城之處、同廿二日、爲對治兼重、結城

孫七行郷・友永七郎澄雄被馳向間、相共同十二月六日、

押寄兼重与黨下財部院新宮城致合戰、同九日、大將三侯

院列御發向之間、以十八日、押寄兼重城塚、致散々合戰、

將又今年正月十日、楯籠兼重与黨之攻落山城畢、而自去

年十二月迄今年四月之日夜致軍忠候、以此旨、可有御披

露候、恐惶謹言、

建武四年四月廿三日 建部清道上

進上 御奉行所

『高山直顯花押』
承了(花押)

1923 『頼久譜中』

四月 公在京師、前此三條侍從泰季爲南朝來立營於薩州

南方、徵隣郷兵、大隅助三郎忠國・谷山五郎隆信・鮫島

彦次郎家藤等多應之者、足利直義遙聞之、乃二十六日、

賜頼久及大隅左京進宗久入道道惠御教書各一通、使共還

薩募兵於地頭御家人等、以討伐之、

1924 『古本在有馬嘉左衛門手鑑』

(本文書ハ一九二〇号文書ト同文ニツキ省略ス、但シ日付ハ廿六日トアリ)

1925 『伊作家文書云』

薩摩國凶徒大隅助三郎・谷山五郎・鮫島彦次郎入道已下

輩誅伐事、相催當國地頭御家人等、不日令發向、可致軍

忠之狀如件、

建武四年四月廿六日

大隅左京進入道殿宗久

『足利直義』
(花押)

「伊作家二代宗久譜中ニ在リ、正文在手鏡トアリ」

1926 『入來院氏文書』

「校正了」

薩摩國凶徒等蜂起事、於國致軍忠之由、有其聞、殊神妙、所詮、所差遣軍勢也、重令發向、弥可抽忠節之狀如件、

建武四年卯月廿七日 御判（尊氏）

澁谷一族等中

1927 『長谷場文書』

薩摩國長谷場六郎久純申軍忠事

去年建武十二月十日、爲没落三俣院兼重城、大將軍御發

向之間、令御共、致每度合戰畢、仍二月廿九日、於北野頸

致合戰、被矢疵二所右足、之間、則被遂御檢見、預兩軍御

奉行書下之上者、早預御一見狀、欲備後證龜鏡、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年卯月廿九日 藤原久純上

進上 御奉行所

【畠山直顯花押】
承了（花押）

1928 「北郷氏元祖資忠譜中」

建武四年丁丑四月晦日、被任左衛門尉、

1929 『川上譜頼久傳』

五月十八日、足利直義賜大隅式部三郎・大寺弥六・大田六郎次郎等御教書各一通曰、方遣頼久及宗久討賊於薩、

汝等亦宜往立軍功、○敦賀之役知覽院式部三郎・井手籠

孫次郎等有戰功、頼久以聞直義、至是二十七日、賜二人

御教書各一通、賞其功也、

1930 「在文庫伊作家文書中」「伊作家二代宗久譜中案文在卷本トアリ」
（端裏書）

「湯浦井房ニ遣状案文」

薩摩國伊作庄内上湯浦事、於河南者、不可申異儀之由、

承候了、仍狀如件、

建武四年五月十六日

【伊作大隅守宗久入道道惠也】
道惠

1931 「全」 「伊作久長譜中ニ在リ正文在手鏡トアリ」

薩摩國伊作庄内上湯浦事、誤而雖申給安堵御下文、所詮、

於河南伊作者者、向後不可申異儀候、仍狀如件、

建武四年五月十六日

僧善惠(花押)

1932

「水引權執印文書」

薩摩國凶徒等蜂起事、致合戰抽軍忠之由聞食早、殊以神妙也、弥可勵忠節之狀如件、

建武四年五月十六日

(直隸カ) 御判

宮里名主中

1933

「頼久譜中ニ正文在藤野久右衛門久防進上之内トアリ」

「正文藤野氏文書在文庫」

薩摩國凶徒等誅伐事、所差下嶋津孫三郎・大隅左京進入道也、早令發向、可致軍忠之狀如件、

建武四年五月十七日

(頼久) (宗久) (直隸)三年十二月廿三日ノ判ト同之 (花押)

澁谷平次郎殿

1934

「載宗久公御譜中」「正文在文庫手鏡中」

薩摩國凶徒等誅伐事、所差下嶋津三郎左衛門尉・大隅左京進入道也、早令發向、可致軍忠之狀如件、

建武四年五月十八日

(宗久) (延正二年丁丑) (足利直義花押) (花押)

大寺弥六殿

1935

「正文在文庫手鏡中」

「全 有宗久御名故書載畢」

薩摩國凶徒等誅伐事、所差下嶋津三郎左衛門尉・大隅左京進入道也、早令發向、可致合戰之忠節、爰於大隅國加瀬田城、軍忠神妙、可有抽賞之狀如件、

建武四年五月十八日

(直隸) (花押)

大田六郎次郎殿

1936

「載山田加賀守忠經傳」

薩摩國凶徒等誅伐事、所差下嶋津三郎左衛門尉・大隅左京進入道也、早令發向、可致軍忠之狀如件、

建武四年五月十八日

(宗久) (足利直義) (花押)

大隅式部三郎殿

「此ニ云島津三郎左衛門尉ヲバ宗久公ナラント云説アレド、四月廿六日ノ御教書ニ、大隅左京進入道殿ト宛ラレシ同文言ニテ、島津孫三郎殿ト宛ラレ、其添書ニ同年六月廿七日左衛門尉頼久トアレバ、互ニ能ク引合ヒ、頼久ノコトニハ疑ナシ、後ニ桑郷ヲ賜ヒタル御教書モ此ヲ推テ知ヘシ」

「川上禮賴久傳」

「宗久公御譜中」 「正文在文庫手鏡中」

敦賀城凶徒誅伐之間、致軍忠之由、「宗久公」ハ「非也」嶋津三郎左衛門尉「賴久」注

申之条、神妙也、可被抽賞之狀如件、

建武四年五月廿七日 （直卷）（花押）

知覽院式部三郎殿

「全」 「正文在文庫手鏡中」

敦賀城凶徒誅伐之間、郎從被疵之由、嶋津三郎左衛門尉「賴久」

注申之條、神妙也、可被抽賞之狀如件、

建武四年五月廿七日 （直卷）（花押）

井手籠孫「久秀」次郎殿

「兼重傳」

五月、泰季奪守護領、上聞京師、分封功士、乃二十八日、

使左近將監高家命揖宿忠篤入道成榮、權領揖宿郡秋益名、

六月四日、又使高家命河上家久入道導乘、權領河上名地

頭職、皆賞軍忠也、當此時、益山四郎入道等率其家族、

築中原城、在伊作庄據以應我軍、十一日、大隅式部龜三郎友

久・隱岐七郎行貞疑二階等、帥兵攻之、多死傷、城陷、

七月二十一日、鮫島蓮道・伊集院忠國・谷山隆信・市來

時家・矢上高澄・知覽院忠世・光富友經等、往伐高橋、

在阿多郡嶋津久長入道道意乃使其子宗久、率莫彌次郎成時、

葛部孫四郎久善・西郷九郎秀範・三原滿兵衛重吉・山崎

右衛門次郎祐範等、及式部龜三郎友久・隱岐七郎行貞等

俱迎戰於松原口、友久家僅左衛門次郎・宗久家僅莫彌成

時・葛部久善等多死傷之、二十八日、或作二公子賴久

始川上率大隅五郎兵衛尉助久町田・上野四郎太郎・比志島

孫三郎範經或作忠經・延時彦五郎忠能等、入市來院伐市來

時家、八月三日、進攻市來城、即時家所居十日、時家發

兵、及延時忠能・宮里九郎入道・石塚平太郎等師、逆戰

于石走、市來十四日、時家率河上又二郎即此等、與延時

忠能・在國司又次郎・小河小太郎龜島等師、夜戰于赤崎、

亦市來地河上又次郎等死之、事見三國擾亂記及島津道意

1940 「高岡士揖宿十郎右衛門家藏」
（三条泰季）

（花押）

薩摩國揖宿郡内秋益名道鑑法師跡、上裁落居之程、所被預置也、

早可被靜謐甲乙人乱妨之由、三條侍從殿仰所候也、仍執

達如件、

延元二年五月廿六日

揖宿郡司殿

左近將監高家奉判

1941

『高岡土河上次郎左衛門藏』

『泰季花押』

〔花押〕

薩摩國市來院内河上名地頭職道經、節秋、法事、依軍忠、上裁落

建武元年二月ヨリ貞久公市來院名主職トアリ、尊氏ヨリ命スルカ、建武元年ヨリ四年日ニ当ルナリ

居之程、所被預置也、早守先例、可被致沙汰之由、三條侍從殿仰所候也、仍執達如件、

延元二年六月四日

『名越尾張守高家コトカ、城州久我繩手左近將監高家奉ニ於テ討死、子名越尾張左近將監高邦トアレハ高家モ左近將監ト云シナラン』

河上又二郎入道殿

〔家久〕

1942

〔牛屎文書〕

薩摩國牛屎院惣領職并永松・木崎兩名田島在家山野狩倉以下郡司職事、惠佛多年重病間、讓与嫡子高元了、仍下賜將軍家御教書、誅伐凶徒以下、諸事當役勤仕之上者、可申賜安堵御下文候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年六月十五日

沙弥惠佛判

進上 御奉行所

1943 『川上譜元祖頼久傳』

此月、頼久至自京師、抛旧譜、以頼久賜和泉族人執達狀、考之至自京師則応在六月駐蹕考 ○六

月、益山四郎入道・古木彦五郎入道等、既完聚據中原城、在伊作法、以拒我軍、十一日、大隅前司久長入道道意・大隅

式部龜三郎友久・隱岐七郎行貞疑二階堂氏人、等、帥兵攻之、斬彦五郎入道・益山十郎彦六等、遂拔其城、道意部下上原中務丞尚經・鎌田孫次郎長正・右馬七郎入道道本・山田彦太郎忠行等、力戰蒙創、○二十七日、頼久隨四月二十六日御教書、與和泉族等書、使速發兵曰、御教書如是、宜奉旨討薩賊黨、

1944

『戴于有馬嘉左衛門手鑑』

薩摩國凶徒大隅助三郎・谷山五郎・鮫島彦次郎入道以下上二員ニル島津孫三郎殿ト宛タルノ御教書見也輩等誅伐事、去四月廿六日御教書如此、早任被仰下旨、不日可被發向也、仍執達如件、

建武四年六月廿七日 左衛門尉頼久

和泉一族中

『此文書、高尾野士出水藤之丞家藏ス、孰れカ本書たるをしらす』

1945

〔池端文書〕

大隅國祢寢弥次郎清種謹言上

欲早被經嚴密御沙汰、蒙安堵御成敗、當國多祢嶋内見(現)和村名主職事、

副進

一通 大將家御下文

一通 守護嶋津判官忠久施行

一通 手継狀雖有數通自余略之

一通 系圖

右、於見和村者、養父佐多孫四郎親政重代相傳地也、爰名越尾張左近太夫代肥後次郎入道淨心、以關東權威、令(領)押量彼村於理不盡、持于五郎兵衛入道之条、希代所行也、隨而擬令言上之刻、世上動乱之間、于今令延引處、幸奉仰嚴政御代、欲經上訴折節、彼五郎兵衛入道依令同意御敵、被誅伐訖、然早帶大將家御下文并忠久施行以下之證文等、清種相傳之上者、被經急速御沙汰、爲預安堵御裁許、粗言上如件、

建武四年六月 日

『入來院氏文書』

澁谷河内入道宗眞『高城河内權頭重棟入道宗真ノコト也』、肥前國三根西郷地頭職事、任御下

文、沙汰付候也、依仰執達如件、

建武四年七月十三日

宮内少輔太郎入道殿(二色龜氏)

武藏權守在判(高師直)

1947 『正文在小根占土池端氏藏書』

大隅國多祢嶋内現和村名主職事、被致軍忠之上、帶右大將家御下文以下證文等、相傳之条歴然之間、於半分者、先所申付也、至年貢者、爲軍勢兵糧、可被直進之狀如件、

建武四年八月一日

祢寢弥次郎殿(建部清種)

源(畠山直顯)(花押)

1948 『全』

〔多祢嶋現和村名主打渡御教書案日向大將畠山殿〕

祢寢弥次郎清種申、大隅國多祢嶋現和村名主職事、闕所之間、依軍忠、可令管領之由申付了、早莅彼所、可被打渡半分於清種也、仍執達如件、

建武四年八月一日

世戸山彦四郎殿

源(畠山直顯)御判

1949 『川上頼久傳』

文

一人 上原中務丞尚經左股射疵

一人 鎌田孫次郎長正左脇切疵

一人 右馬七郎入道本右膝射疵

一人 山田彦太郎忠行左腰射疵

一同國阿多郡高橋松原合戰事

御敵運道鮫島彦次郎入道・伊集院助三郎志國・谷山五郎左衛門

入道時家・市來太郎左衛門入道道尊・鹿兒島郡司高純・知覽院守平忠又四

郎世・光富又五郎入道・石堂彦次郎入道・秋次三位房

益山新次郎・古木三郎入道以下凶徒等、率數千騎軍勢、

以去七月廿一日、寄來之間、下向子息親類若黨等、高

橋松原口致合戰、依令打捕數輩凶徒等、被疵若黨交名

注文

一人 莫祢次郎成時右肩先射疵

一人 葛部孫四郎久善左肩右股二所切疵

一人 西郷九郎秀範左膝射疵

一人 三原滿兵衛尉重吉左股射疵

一人 山崎右衛門五郎祐範左目上切疵

右、致度々合戰上者、爲賜御一見狀、且目安如件、

建武四年八月三日

建武四年七月廿一日、鮫島彦次郎家藤入道蓮道・伊集院

助三郎忠國・谷山五郎左衛門入道隆信・市來太郎左衛門

時家入道道尊・鹿兒島郡司矢上左衛門五郎高純・知覽院

又四郎忠世・光富又五郎友徑入道心榮・石堂彦次郎入道・

秋次三位房・益山新次郎・古木三郎入道等、來伐高橋、

在阿多郡、大隅左京進宗久及式部龜三郎友久・隱岐七郎行貞

等、迎戰於松原口斬獲數級、宗久家僅莫禰次郎成時・葛

部孫四郎久善・西郷九郎秀範・山崎右衛門五郎祐範、友

久家僅左衛門次郎等奮戰被傷、二十八日、或作二・賴久

乃率大隅五郎兵衛尉助久町田氏・上野四郎太郎・比志嶋孫

三郎範經或作忠經・延時彦五郎忠能等、往攻市來城、八月三

日、及城主時家戰于野頸、延時忠能等有功、

1950 『見字雜抄』「此文書伊作家譜中ニ在リ正文在卷本トアリ」

嶋津大隅前司入道道意申

薩摩國凶徒等、益山四郎入道子息兄弟同一族以下并古

木彦五郎入道子息兄弟以下一族等、率數多勢、同國伊

作庄内中原構城塚立籠間、以去六月十一日、押寄彼城、

責落城塚、御敵等古木彦五郎入道・益山十郎入道・同

彦六以下、依令打捕數輩御敵等、被疵若黨六人交名注

1951

『長谷場文書』

鎮西凶徒誅伐事、致軍忠之由、烏山修理亮七郎所注申也、
尤以神妙、弥勵忠節者、可抽賞之狀如件、

建武四年八月六日

〔重慶〕
〔花押〕

長谷場十郎兵衛尉殿

1952

『同案同月同日ノ文書略』

在判

土持新兵衛尉殿

1953

〔正文在財部有馬長右衛門〕

〔當〕國凶徒市來〔太〕郎入道之城〔可〕被致合戰也、仍執達如

件、

建武四

八月六日

頼久〔花押〕

河田智門御房

1954

『頼久譜中川上』

1955

『財部土延時氏藏書』

目安

八月十日、延時忠能・宮里九郎入道・石塚平太郎等、及
市來時家軍戰於石走、市來 地名、十四日、延時忠能・在國司
又二郎・小河小太郎〔主〕、〔重慶〕、夜與時家戰于赤崎、斬敵河
上又二郎等、

延時又三郎入道法佛申薩摩國市來院所之合戰軍忠事

一法佛當病之間、今日十日差遣捨弟彦五郎忠義於代官之

處、市來太郎左衛門入道以下凶徒等、於當院石走待請

之、致合戰之刻、射臥數輩凶徒等、令追還之条、同所

合戰之輩、宮里九郎入道并石塚平太郎等所令見知也、

一同十四日夜、當院內赤崎合戰之時、捨身命、令致數剋合

戰之条、在國司又次郎并飯島小河小太郎等、令見知之訖、

右、合戰次第、賜承判、預御注進、浴恩賞、爲施弓箭面

目、言上如件、

建武四年八月 日

〔守護代酒匂久兼〕
承了〔花押〕

1956

『莫称文書』

薩摩國御家人莫祢平次郎成助申合戰軍忠事

右、今月十四日、市來院赤崎合戰致軍忠之条、飯島地頭

小川小太郎・武光伴三郎入道・宮里三郎次郎等、同所合

戰之間、令見知早、然者早預御注進、爲施弓箭面目、言

上如件、

建武四年八月 日

〔酒勺殿(貞久) 承了(花押)〕

1957

〔水引權執印文書〕

權執印三郎次郎俊正合戰軍忠事

右、今月十四日夜、市來院赤崎合戰時、致種々軍忠之条、

飯嶋地頭小河小太郎・同小三郎等、同所合戰之間、令見

知早、然早預御注進、爲施弓箭面目、言上如件、

建武四年八月 日

〔酒勺殿) 檢知了了在判〕

1958

〔本文書ハ一九五三号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1959

〔正文在文庫伊作家文書〕「伊作家二代宗久譜中正文在手鏡トアリ」

吉野凶徒對治事、所被下 院宣也、早嶋津上總入道相共、

不日發向、可致軍忠之狀如件、

建武四年八月九日

〔宗久) 嶋津左京進入道殿

〔皇卷) (花押)〕

1960

〔在文庫中伊作家文書〕「伊作家宗久譜中正文在卷本トアリ」

吉野凶徒退治事、去月廿八日御教書、昨日九日到來、案

文如此、早令發向、可被抽軍忠候、仍執達如件、

建武四年八月十日

〔宗久) 嶋津大隅左京進入道殿

〔貞久) (花押)〕

1961

〔比志島氏文書〕

吉野凶徒退治事、去月廿八日御教書、昨日九日到來、案文如

此、早令發向、可被致軍忠也、仍執達如件、

建武四年八月十日

比志島少輔御房

〔貞久) (花押)〕

1962

〔北郷氏元祖資忠譜中〕

建武四年 即延元 二年也 丁丑八月二十二日、大樹尊氏公賜越

中國安部郷于資忠、所以領知也、

1963

『比志島氏家藏』

軍忠事、嶋津上總入道所注申也、尤以神妙、弥猶可抽忠

節之狀如件、

建武四年九月二日

尊氏御判

比志嶋彦一丸

1964

『全』

親父義範討死已下、忠節異于他、於恩賞者、可被相待公
方御計、爲道鑿志間、當知行薩摩國滿家院之内、油須木
四町、号本領、任先例、可領知狀如件、

建武四年九月二日

道鑿(花押)

比志嶋彦一殿

〔此一通ハ、道鑿公御譜中ニ在リ〕

1965

〔日州諸県郡大田原村新助藏本〕

日向國土持新兵衛尉宣榮申軍忠事

目安狀副具書、如此候、忠節之次第、所申無相違候、此
段若偽申候者、神祇冥道御罰可罷蒙候、以此旨、可有御
披露候、恐惶謹言、

建武四年九月十一日

源義顯判

進上 御奉行所

1966

『岩下佐次右衛門藏』

爲宇都宮凶徒誅伐、所令發向也、世間靜謐之間、將軍家
被致御祈禱請誡者、殊忠賞可有申沙汰候、仍執達如件、

建武四年九月十五日

兵庫助(花押)

豐田大進阿闍梨御房

1967

『岩下氏文書』

〔本文書ハ一九六号文書ト同文ニツキ省略ス〕

1968

〔載于南山巡狩録追加〕〔越前島津氏七代忠兼譜中ニ在リ〕

目安

嶋津周防五郎三郎忠兼丹生寺合戰軍忠事

右忠兼、去八月晦日已後現病之間、以舍弟十郎忠範差遣
彼山、今月六日七日兩日、抽軍忠之次第、則御見知畢、
加之、山田凶徒靜謐、致忠節之上、度々軍忠分明之上者、
爲後證欲預御證判、仍目安如件、

建武四年九月廿一日

承候了(花押)

同年九月十四日、大隅助三郎忠國帥兵救市來城、十七日、

頼久進師復圍市來城、至二十七日凡數十戰、大隅五郎兵

衛尉助久率子孫六及酒勾兵衛次郎・穎娃三郎・延時彦五

郎忠能等、進斫水塞、又薄大門、於是、三條侍從泰季遣揖

宿彦次郎忠篤入道成榮、率其代官高野中務丞朝久・高野

淡路房宗榮等、亦救市來、頼久乃使式部龜三郎友久・比

志島孫三郎範經・延時忠能・遠矢次郎太郎入道圓也・小

濱十郎〔民純之
住人等〕、與援軍戰、助久父子・穎娃三郎等奮戰、斬

成榮子揖宿次郎忠泰等數人、大隅助七及上原某降、二十九

日、沙弥〔未詳
姓氏〕與比志島彦一範平書、使護助七等、且命之

曰、凡有軍功宜就頼久報告之、自二十八日至晦日凡數十

戰、時晦日、指宿成榮代官高野宗榮及有間平次郎・山角

平三郎入道・栗下宰相等、續救城兵、大隅助久・上野三

郎四郎・延時等與之鬪戰、我兵一人爲宗榮所斬首、又比

志嶋範經及其家僮常陸坊・旗持又二郎等死之、頼久以聞

京師、乃十月二日、與比志嶋範平書、論其事也、十八日、

矢上左衛門五郎高澄帥兵、夜〔寅〕攻範平於比志島城、城主範

平及使家僮六郎太郎家貞・六郎入道・五郎四郎入道・北

村諸三郎範清及族人右衛門六郎等拒之、多死傷、十九日、

吉田彦次郎清秋帥兵、自吉田〔今大隅地〕、繼救城兵、向佐右
衛門三郎等、自加木懸城來亦救之、遂保比志島城、

1970 『比志島相馬家藏』

降人大隅助七并上原中務丞等事、所預置也、各於御方致

軍忠者、就頼久注進、可有其沙汰狀如件、

建武四年九月廿九日 沙弥〔誓念〕奉在判

比志嶋彦一殿〔範平〕

1971 『全』

舍兄孫三郎範經以下輩等打死事、急速可注進申京都候、

恐々謹言、

建武四 十月二日

〔島津左衛門尉〕
頼久〔花押〕

比志嶋彦一殿

〔川上頼久譜中ニ在リ、正文比志嶋左京義時ニ在リトアリ〕

1972 『揖宿家文書云清左衛門家藏歟』

御袖判

薩摩國指宿彦次郎入道成榮代高野淡路房宗榮申、去九月

1974

『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼、属于當御手、今月十一日、雖攻

沙弥御在判

建武四年十月 日

言上如件、
合戰、抽忠勤之条無其隱、且給御判、且爲預御注進、
右、今季□月廿五日以來、云守護所警固、云城攻後卷

1973

『莫祢氏文書』

薩摩國御家人大平平次郎成助申軍忠事

延元二年十月 日

卅日、爲誅伐嶋津孫三郎賴久以下凶徒等、大將市來院御
發向之間、馳參致軍忠、令分取一人之条、有間平次郎・
山角平三郎入道・栗下宰相子令見知候早、仍爲浴恩賞、
恐言上如件、

1975

『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼属于當御手云々、已下同文略之、

建武四年十月 日

〔道要公〕
承了(花押)

1976

『比志島氏文書』

矢上左衛門五郎高澄、以今月十八日寅尅、引率數多軍勢、
押寄當名比志島夜討、及終日令致合戰之間、手負若黨六
郎太郎家貞、右目下被射了、同六郎入道討死、五郎四郎入道腰骨被射了、
相籠此城候之間、北村諸三郎範清親類右衛門六郎左足被射了、

雖然、城者未落候之刻、大隅國吉田彦次郎以數多勢爲後
卷、令馳來候、將又自加木懸城、向佐右衛門三郎等同馳

登大和國二上城、凶徒落失畢、同日於味曾路越致合戰畢、
同十九日、馳越河內國東條城、致軍忠之条、平良小次郎
・吉田又次郎同所合戰之間、令見知畢、然早任所々軍忠
之旨、且預御注進、且爲下賜御證判、恐言上如件、
建武四年十月 日
〔石橋和義〕
承了(花押)

〔張紙二〕
尾張左衛門佐殿御一見狀と有り

來候間、御敵退散了、重相催所々凶徒等、近日可寄之由
令申候、此等次第急速可有御披露候、恐々謹言、

【建武四】
十月十九日
沙弥誓念
【矢之】
同世
謹上 遠野入道殿

1977 『兼重譜中』

十月、禰寝清種等、從三侯引去、於是兼重及野邊盛忠・
大隅忠國・谷山隆信・矢上高純・平忠世等、入曾於郡、
立塞於郡田清水鼻連山、亦應泰季軍、十一月二十九日、
同攻橋木城戰於吉水、亦曾於郡地

1978 『比志島氏文書』

薩摩國比志嶋彦一丸代頼秀謹言上
欲早預重御注進、浴恩賞、代官孫三郎範經彦一丸并若
黨常陸房六郎入道討死、親類右衛門六郎弁房以下若黨
等被疵事、

副進

二通 大将嶋津三郎左衛門尉書下
并彦一丸申狀「頼久」
二通 奉行人遠矢入道返狀
并彦一丸申狀

右、彦一丸幼少之間、差進舎兄孫三郎以下輩、去年八月、

押寄當國市來城、致合戰、親類弁房被疵了、同九月卅日、

重致軍忠之時、範經・常陸房・旗差又二郎令討死了、同
十月十八日夜、寅、凶徒矢上左衛門五郎高澄以下、爲夜
討寄來比志嶋城、居所、彦一丸令防戰之時、若黨六郎入道令

討死候上、親類左衛門六郎・若黨六郎太郎・五郎四郎入
道被疵了、雖然不被破當城、所致合戰忠也、此等之子細、
大將可有御注進之由、被成御書下候上者、重預御注進、
爲浴恩賞、言上如件、

建武五年二月 日

『此文書、前年の事実故、四年十月ノ場ニ載置也』

1979 『延時文書』

〔延時又三郎入道事〕

目安

延時又三郎入道法佛申薩摩國市來院城塙合戰軍忠事

一今年建武七月廿八日、大將「頼久」下野左發向件城塙之時、法佛
且左衛門尉ナレハ左金吾と云ヘルカ、然レハ系ニ上野介トアルハ下野介ニテナキ
重病之間、差遣舎弟彦五郎忠能於代官、押寄彼城塙野
カ又上下ヲ誤リシモ知ヘカラス
頸之手、迄于八月三日致合戰忠節之条、軍奉行大隅五
郎兵衛尉・上野四郎太郎等見知訖、
「頼久」

一同九月十七日、重大將發向彼城塙之間、忠能自同十七

1980

〔正文在曾木宮里氏〕

薩摩國宮里正永三郎次郎種正申所々軍忠事

一今年七月廿五日、同國市來城仁發向之間、以同廿九日、

押寄水手、至于八月二日、捨身命連々致合戰之上、爲

後卷於平城南手、晝夜警固之条、伊集院郡司四郎於同

所令見知訖、

一自同八月四日、切塞薩摩山、致警固、抽軍忠畢、

一十月九日、自方々之城、打圍御敵、可有合戰之由、種

正等治定之處、凶徒等聞及此由引退畢、

建武四年十一月 日

〔賴久花押〕
承了(花押)

〔川上賴久之譜中ニ在リ、正文財部衆延時藤左衛門ニ在リ〕

1982

〔水引權執印文書〕

薩摩國宮里鄉一分領主權執印良運代子息三郎次郎俊正

申軍忠事

一自七月廿五日、發向市來城之間、日夜致合戰早、

一八月十四日夜、赤崎合戰抽軍忠之子細、守護御代官酒

勺兵衛次郎見知之上、同時合戰之人宮里九郎入道等、

同見知之訖、九月十七日、重馳向彼城合戰、晝夜致攻

戰之条、御見知之上、宮里兵衛三郎・莫称太郎次郎等、

令存知早、同卅日、馳向後卷、致散々合戰之条、石塚

1981

『正文曾木士宮里六郎左衛門』

(本文書ハ一九八〇号文書ト同文ニツキ省略ス)

〔川上賴久譜中ニ在リ〕

日迄于廿七日、或押寄水之手、或於大手連々抽軍忠之

条、軍奉行大隅五郎兵衛尉并酒勺兵衛次郎見知早、

一同廿八九日晦日兩三ヶ日者、向于後卷之手、捨身命致

合戰早、此等次第、同五郎兵衛尉并上野三郎四郎等所

令見知也、

右、軍忠之次第、賜御承判、預御注進、爲浴恩賞、言

上如件、

一同十一日、於澁谷東郷宅万、種正以下御方、爲石上城

破却、打集千臺之津之間、馳參種正御方、焼拂城郷之

条、河田智門(慶喜)令見知早、然者早任軍忠之實、且預御注

進、且爲給御證判、恐々言上如件、

建武四年十一月 日

〔賴久〕
承了(花押)

弥八・宮里兵衛三郎等、令見知早、

右、今季三月以來、云守護所警固、云城攻後卷合戰、盡軍忠之上者、且給御判、且爲預御注進、言上如件、

建武四年十一月 日

〔原久
嶋津三郎左衛門尉殿〕
承了(在判)

1983

〔載山田友久譜〕

嶋津大隅式部龜三郎丸謹言上

薩摩國凶徒等、益山四郎入道并彦五郎入道子息親類一族以下、率多勢、同國伊作庄内構中原城塚、依立籠、以今年

六月十一日、彼城攻合戰之時、依致軍忠、若黨左衛門次

郎友久左衛門被疵、訖、次同國阿多郡高橋松原口合戰之時、依

致軍忠、友久右股被疵、畢、彼兩度合戰次第、隱岐七郎行眞

存知畢、次同國凶徒等構市來院城塚、依立籠、以今年九

月廿九日、御合戰之時、致軍忠、合戰之次第、大將御存

知上、遠矢次郎太郎入道圓也・大隅國小濱十郎実名爲

同所合戰上者、令見知畢、然者早爲預御一見狀、且目安如件、

建武四年十一月三日

〔川上孫三郎左衛門尉頼久〕
承了(花押)

〔上力半〕
〔大隅式部龜三郎丸申狀〕

1984

〔載山田友久譜〕

嶋津大隅式部龜三郎丸謹言上

薩摩國凶徒等、構市來院城塚、依立籠、以今年九月廿九

日、御合戰之時、致軍忠、合戰之次第、大將御存知上、

遠矢次郎太郎入道成貞(円也)・大隅國小濱十郎、爲同所合戰上者、

令見知畢、次以同七月廿一日、同國阿多郡高橋松原口合

戰之時、致軍忠、若黨左衛門次郎友久右股被疵、如此兩

度合戰之間、致軍忠上者、早賜御一見狀、爲備後證、且

言上如件、

建武四年十一月三日

〔川上孫三郎左衛門尉頼久〕
承了(花押)

1985

〔在山田氏支流系図〕

友久

龜三郎丸 式部孫三郎 掃部助 常陸守

〔右觀應二年六月十三日付文書二八、嶋津式部孫三郎友久トアリ〕

1986

〔伊作家譜中〕

伊作三代
親忠

初忠親 宗四郎 左衛門少尉 下野守

1987

「案文在志布志衆阿多飛彈忠具」

嶋津大隅愛壽丸言上
「親忠ノ幼名、別本ニ愛壽丸トアリ」

薩摩國凶徒等、構市來院城墾、依立籠、以今年九月廿九日、御合戰之時、愛壽丸若黨東條孫七尚元以下、致軍忠、合戰之次第、隱岐七郎行貞・知覽院三郎久直令見知訖、然者早賜御一見狀、爲備後證、目安狀如件、

建武四年十一月廿四日

1988

『載山田譜』

薩摩國合戰事、致軍忠之条、尤神妙也、向後弥可抽忠節之狀如件、

建武四年十一月廿九日

(直義)
(花押)

嶋津式部三郎殿

「此文書、伊作家譜中ニアレトモ宛書ナシ、正文在手鏡トアリ」

1989

『比志島氏文書』

税所介敦直代忠直申、祖父正惠遺領薩摩國滿家院郡司職

并名田畠山野以下等安堵事、申狀具書如此、早云當知行之眞偽、云可支申仁之有無、載起請之詞、可被注申之狀、依仰執達如件、

建武四年十二月十二日

散位(花押)

比志嶋孫太郎殿
(忠範)

1990

「道鑑公御譜中」

「正文在田布施衆二階堂三左衛門定行」

將軍家政所進御年貢薩摩國阿多北方錢百五拾貫文事、今年十一月廿八日奉書如此、急速可被申散狀候、仍執達如件、

建武四年十二月十五日

(貞久)
沙弥(花押)

隱岐三郎左衛門入道殿
(二階堂)

1991

目安

薩摩國宮里河田智門房慶喜申軍忠事

一今年建武七月廿五日、同國市來城發向之時、自同廿九日、押寄彼城大手、迄于同八月三日、捨身命致日夜合戰畢、仍山門次郎左衛門尉・大隅式部三郎令見知畢、

一同八月四日、伊集院石谷在家仁楯籠御敵之間、隨御催

促馳向彼所、追拂凶徒等、令燒拂在家之条、莫祢又太郎令見知畢、

一同九月晦日、大隅助三郎(伊集院忠國)・鮫島彦次郎入道以下凶徒等、

致彼城後卷合戰之時、慶喜親類河田弥三郎家弘令討死畢、仍莫祢彦次郎入道所令見知也、然早任軍忠之實、且給御證判、且爲預御注進、恐々言上如件、

建武四年十二月 日

(島津頼久)
承了(花押)

1992
「宗久公御譜中」

開住・西阿凶徒誅伐事、相催一族并薩摩大隅兩國軍勢、令發向、可致軍忠之狀如件、

建武四年十二月廿日

(尊氏將軍判)(直義)
「花押」

嶋津大夫判官殿
(宗久公)

「此正文、御文庫三番箱宝鑑中ニアリ、正文在島津彈正大弼久慶卜記
セリ」

〔國史道鑑公〕

曆應元年戊寅、

是年八月改元曆應、自七月以前、猶是建武五年、南朝延元三年、

春正月二十四

〔宗久公御譜中〕

〔尊氏〕南山巡狩錄追加二

御判

下 嶋津大夫判官宗久

可令早領知信濃國太田庄内大藏郷貞顯地頭職事

右人、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀

如件、

〔延元三年也〕『戊寅』

建武五年正月廿四日

〔表紙〕

貞久公

自建武五年
至曆應三年

前編 舊記雜錄 卷二十

日、教書使大夫判官宗久領信濃國太田莊大藏郷地頭職、
詔宗久二十七日、足利尊氏賜三郎左衛門尉頼久大隅桑
旧譜

郷東西、拋川上式部家藏文書、郡村高辻帳頭書目、桑西郷・桑三

月十三日、本田久兼從足利氏、與南朝軍戰于八幡有功、

拋道鑑公旧譜、三月十三日、八幡合戰、不見太平記、然參考引元弘
日記裏書云、延元三年三月、官軍不利、五月二十八日、
持定朝臣・家房朝臣等屯八幡、六月數十戰、七月十一日、官軍去八
幡、則三月十三日合戰、蓋在三月數十戰之内矣、延元三年、北朝曆
應元年、十四日夜、澁谷吉岡孫次郎入道下日當山城、
即是歲也、

而據之、拋森岡孫之進家藏文書、入來院主馬承凶、祇答院氏祖重
之族也、日當山城、西光寺衆徒竟乘法眼所守、蓋祇答院氏之
遺墟在日當山地頭館西北十餘町西光寺村、十五日、森行重與地
頭御家人等合兵攻之、上、十六日、本田久兼與南朝軍

戰于天王寺于安部野、捕虜二人、拋道鑑公旧譜、太平記、
而安部野合戰在五月二十二日、与此不
合、安部野合戰疑非五月二十二日也、十八日、肝付兼重・野
邊盛忠率薩州凶徒、圍築瀬左衛門太郎宅、橋木・姫木

・荒瀬諸城出兵、救之、兼重・盛忠、退保鼻連山、拋
岡孫之進文書、姫木城在清
水郷地頭館西十六町上、二十日、兼重・盛忠、引兵攻

橋木城、森行重與地頭御家人禦諸姫木崎、擊破之、上、

夏四月十七日、本田久兼從大夫判官宗久成兵庫、拋宗
久旧
譜、六月二日、本田久兼從宗久戰于湊河城、上、三日、

久兼攻前城、破其軍、上、二十七日、久兼從宗久軍于八
幡、上、秋七月九日、與八幡救兵戰于洞塔下、上、十一日、

島山直顯遺禰寢清成・清種・清道等、攻平山式部少輔於日向南郷大和田城、肝付兼重之黨也、拋小松氏・池端平左衛門、根占

越右衛門家藏文書、八月十一日、足利尊氏任征夷大將軍、拋統本朝通鑑、

二十八日改元、上、教書命 公、禁侵寺社本所邑及關

所地者、拋道鑑公旧譜、教書、閏七月二十九日也、今置於此、使与晦日收局相連、本所、見第一卷文治元年、公

諭守護代、晦日、平久景諭薩摩國地頭御家人、同上、道鑑公

旧譜、止言守護代、不言其人、按酒勾利兵衛文書、平久景、朝景之後、稱左衛門、為守護代、執印久馬文書、稱曆應二年守護代、酒勾次郎左衛門、而此云公諭守護代、晦日平久景、

諭地頭御家人、則守護代為久景、從可知矣、

二年己卯、南朝與、禰寢清成・清種・清道等攻大和田

城、踰年不克、夏四月十三日、陷之、拋小松氏・池端平左衛門、根占越右衛門家藏

文、清種又攻猪俣新左衛門尉於上財部城、亦肝屬兼重

之黨也、拋池端平左衛門家藏文書、豊後守實忠遣其將士、守給黎院上

籠、今給黎部喜入郷上村有地名上籠、網屋二城、二十一日、島津圖書助

國攻陷之、村田帥阿闍梨如嚴有戰功、拋村田五郎左衛門家藏三條侍從一見狀、

村田氏出自鼻也氏、有五郎経秀者、始以村田為氏、如嚴、経秀十世孫也、按村田如嚴從國有戰功、而三條侍從賜如嚴一見狀、則國時応南朝、

從可知矣、澁谷石見權守重棟、遣其將士守祁答院温田城、

六月朔日、澁谷安藝權守經重攻陷之、村田如嚴有戰功、

經重遂據温田城、二日、澁谷又次郎入道・在國司弥二

郎等、帥牛屎・和泉・山門・莫禰軍數百騎、攻之、經

重・如嚴等善禦之、數日不克、又次郎入道等敗走、同上、

村田如嚴与渋谷經重共陷温田城、而三條侍從与如嚴一見狀、則渋谷經重亦応南朝、從可知矣、村田五郎左衛門文書、止稱渋谷又次郎入道、

名闕、按東郷総左衛門家藏文書、前此九年、元徳二年四月、有渋谷又二郎重幸法師覺禪、後此四年、康永二年九月、有渋谷又次郎入道覺禪、

則此云渋谷又次郎入道者、乃覺禪也、東郷総左衛門系又、覺禪初名重幸後改氏重、稱太郎左衛門尉、渋谷実重五世孫也、実重見第三卷氏詳見下文和二年、

弘安四年、在國司兵衛尉政保・牛屎・菱刈等、與澁谷氏合軍、圍酒勾久

景・延時法佛・河田慶喜等於碓山城、二十二日、攻之

甚急、城且陷、石原忠充・市來小太郎引軍來救、適有

鳴鏑出自新田宮、入於賊陣、城中聞之、以為有神助、奮

戰甚疾、賊兵敗走、拋道鑑公旧譜、伊集院上右衛門、有馬長右衛門、延時九郎兵衛家藏文書、是時谷山氏、

較島氏之属、拋谷山以南地、稱為南方賊、相良氏承文、大織冠鎌足

後胤遠江守維兼、始稱相良氏、子孫居肥後球麻郡、出水七兵衛文書

伴成房領薩摩和泉莊弁濟使及下司職、建久因田帳、有和泉郡下司小

大夫兼保、即成房之玄孫、善子孫世領下司職、政保者其後世也、碓

山城遺城、在北郷作左衛門別館北十五町許、其地属、南方賊及澁

薩摩郡平佐郷天辰村、新田宮在碓山城西二十五町許、

谷氏、退保入來院淵上城、二十九日、莫禰圓也・相伴

三郎保末等攻之、秋七月三日、下之、石原忠充有戰功、

拋伊集院上右衛門、出水七兵衛、阿久根徳右衛門家藏文書、淵上城

遺城、在入來院麻婆婆別館東南二十五町、其地属入來郷裏之名村

八月十三日、島山直顯復攻高城、拋池端平左衛門、根占越右衛門家藏文書、肝付兼重於高城、見建武三年十二月、又見四年二月、自四年一月至此、凡閱十四月、豈曠日持久而不克乎、抑還軍休兵、而後復攻之也、

十六日、

後醍醐天皇崩于吉野、拋大百、後村上天皇立、十八日、足利直義建塔婆於薩摩國

泰平寺、以藏舍利二粒、拋道鑑公旧譜、泰平寺在水引郷、二十七日、直

顯拔高城、拋道鑑公旧譜、根占越右衛門家藏文書、東福寺城、即東城西北一里許、十五日、七郎左衛門尉資忠為大手將、三郎右衛

家房、自肥前松浦莊、徙日向州三俣院、依肝付氏、及

高城陷、兼重欲死之、家定止之、乃逃兼重、而已為兼

重死、拋江田源助系圖、系圖、家定五代祖、曰小野太郎家綱、家綱次子、次郎家長、領日置郡大田、因以大田為氏、家長生式部少輔家忠、家忠生式部大夫家氏、家氏補肥前松浦莊早濠福方名地頭職、居松浦莊、改為江田氏、家氏生式部少輔家房、家房生家定、家綱為日置北郷下、

三年庚辰、南朝興、春正月二十四日、世子大夫判官宗久

卒、拋宗久、三月三日、教書使、公擊薩摩國凶徒、拋道鑑公旧譜、

此書無名及花押、然拋下文、賜島津道惠書、足利直義賜島津道惠

有直義花押、則此亦為直義書、從可知矣、公旧譜、

教書、亦如之、拋伊作、秋七月十日、足利直義賜二階堂

紀伊權守行仲、應岐三郎兵衛尉行久、書、以褒軍功、拋道鑑公旧譜、

改稱紀伊權守、名行仲、鑑公、二十日、公奉三月三日教書、賜大井小四郎書、

使發兵、同、八月、公率禰寢清種・孫四郎重種、相保

末等、攻伊集院壹字治城、又攻市來城、皆下之、市來

時家隆、拋道鑑公旧譜、根占越右衛門、出水七兵衛家藏文書、伊集院郷大田村有一字治城遺城、在地頭館西北三町余、

重種、清道之子也、拋隅善兵衛、肝屬兼重逃自高城如鹿兒

島、與中村彈正忠秀純・矢上高純連和、於是、兼重及

秀純據東福寺城、高純據催馬樂城、聲勢相倚、公反

自伊集院、分兵攻之、十二日、三郎左衛門尉師忠攻東

福寺城、拋道鑑公旧譜、根占越右衛門家藏文書、東福寺城、即東城西北一里許、十五日、七郎左衛門尉資忠為大手將、三郎右衛

門尉六郎、改稱三、資久為搦手將、攻催馬樂城、拋出水七兵衛德右衛門家藏文書、城有大手口、有搦手口、攻大手冬十一月二十

日、為大手將、攻搦手者、為搦手將、皆依當時語、

一日、足利直義使島津道惠領信濃太田莊神代郷、薩摩

日置莊、伊作莊南方地頭職、如久長文保元年十月二十

二日讓狀、拋伊作、二十七日、莫禰圓也・圓也孫彥次郎

貞遠・姪孫四郎貞雄等、自搦手攻催馬樂城、戰甚力、

被創者衆、拋阿久根徳右衛門家藏文書、十二月六日、師忠夜攻東福寺

城、禰寢重種有戰功、拋根占越右衛門家藏文書、

四年辛巳、南朝興、春二月十六日、資忠・資久復攻催

馬樂城、拋阿久根徳右衛門家藏文書、夏四月二十六日、師忠拔東福寺

城、二十八日、拔尾頸小城、禰寢清種・重種等有戰功、

拋道鑑公旧譜、根占越右衛門家藏文書、閏月朔日、禰寢清種・重種又從資忠攻

催馬樂城、十六日、大破其軍、同、公將復擊薩摩凶

徒、秋七月七日、賜郡山頼平・宮里了性房・武光伴三

郎入道書各一通、戒師期、拋道鑑公旧譜、末吉人宮里重右衛門・阿久根連華寺所藏文書、入來

院主馬家藏武光氏系圖文書、武光伴三郎者、高城郡司高信五世孫也、

按高信父曰信章、而新田宮天檢校系圖云、國通・善男・中兼・仲兼、

兼信・安信・信口・信経、凡八世、信経二子、長曰信章、為高城郡司、少曰正信、出為宮里紀大夫正住嗣、宮里孫之進系圖云、武内宿禰

數十世孫、曰河内判官兼遠、兼遠・兼信・信成・安信・信道・信経、凡六世、信経三子、長曰信章、為高城郡司、次曰正信、領宮里郷、

因以為氏、二説大同小異、未知 八月十五日、公攻伊集院助
孰是、官里氏已見上建武四年、

三郎 圖書助改、口國於伊集院平城、禰寢清種、重種等有戰
功、稱助三郎、

功、拋道鑑公旧譜、根占越右衛門文書、平城遺墟在
伊集院郷古城村、北去地頭館半里余、今称内城、 一二十八日、

公攻加世田垣本城、七郎左衛門尉資忠・相保末・弥三
郎保三・莫禰圓也等、有軍勞、拋出水七兵衛・阿久根徳右

南方徒、衛門家祿文書、垣本城、蓋
党所拋、初三池木工助入道道智、以其女名名妻、道義

公、以河内州丹下郡西島為湯沐邑、名名生 公及女阿
久理、與阿久里西島、阿久理亦以與 公、由是 公為

西島地頭職、有田村助三郎者、侵奪西島、公訟於幕
府、細川兵部少輔顯氏令守護代泰光逐助三郎、使 公

領西島如故、已而道智女孫米米又與 公爭西島、訟於
幕府、有司治之、曲在米米、卻其訴牒、九月十一日、

復使 公領西島如故、拋道鑑公旧譜、公為西島地頭、見上元亨
三年、名名・米米原文皆称中原氏女、蓋中
原、当是三池氏姓、然考諸家大

系圖、中原之族無三池氏、俟考、

1995

「巡狩録」

千葉貞胤ハ鎮西將軍ノ宮御下向ノ時、供奉シテ九州へ下
り、大隅守ニ叙任シ、肥前國ヲ知行云々、

建武三年十一月廿八日、足利高經北陸道四ヶ國ノ勢三千

余騎ニテ、蕪木浦ヨリ越前ノ府ニ歸リ陳ス、太平記

1996

「宗久公道鑑公御譜中」
長男

「寫在三三卷」

（尊氏）
御判

下 嶋津大夫判官宗久

可令早領知信濃國太田庄内大藏郷貞頭地頭職事

右人、為勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀

如件、

建武五年正月廿四日

（今川貞世）
（花押）
（花押）
「統目ノ裏判アリ」

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書ニ番箱中歴代龜鑑中ニ在リ」
（島津家文書ノ正文ニハ足利尊氏ノ花押アリ、一九九三号文書ト同文ナリ）

1997

「頼久傳」

五年戊寅正月廿七日、足利尊氏教書袖判賜頼久大隅桑東郷

・桑西郷、以賞其勲功也、註略

1998

「南山巡狩録追加」

（尊氏）
御袖判

下 嶋津三郎左衛門尉頼久

可令早領知大隅國桑郷東事西事

右以人、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

建武五年正月廿七日

(一)之巻統目裏判(今川貞世) (二)之巻統目裏判(長川海頼) (花押)

〔此文書、宗久御譜中ニ在リ、片書ニ写在二三之巻ト記セリ〕

1999

『兼重傳』

延元三年戊寅八月改曆應二月、揖宿成榮初屬泰季師、躬經數戰、子次郎忠泰等多至死傷、五日、言上其狀、亦兼重之徒也、

2000 『高岡土揖宿十郎右衛門藏書』

〔道鑑公御譜中〕

加一見了(花押)

薩摩國指宿彦次郎入道成榮謹言上

欲早致度々軍忠上者、賜御一見狀、備後證龜鏡事、

右、去年三月十七日、薩州御大將三條侍從殿御下向之間、

任綸旨之旨、馳參最前、及數十ヶ度合戰、爲御敵嶋津上

總入道々鑑一族大隅五郎兵衛子息孫六・穎娃三郎等、成

榮子息次郎并一族親類若黨數輩令打死早、將又市來院後

卷之時、代官高野中務丞朝久致散々合戰、令分取了、至于今、每度合戰不斷絶之条、世以無其隱候、然早賜御一見狀、爲備後證龜鏡、恐々言上如件、

延元三年二月五日

2001 〔載于南山巡符録追加〕「越前島津氏七代忠兼譜中ニ在リ」

播磨國下揖保庄東方地頭職事、可令支配于白旗城軍勢恩賞之由、被仰下候、而當城之軍勢嶋津周防五郎三郎忠兼、爲本領之上者、可被宛行之旨、捧閱東安堵以下證狀望申候、可爲何様候哉、所申聊非無子細候之上、忠兼軍忠異他候之間、令言上候、可有申御沙汰候乎、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武五年二月七日

(赤松則村) 沙弥圓心 〔右名ノ下裏ニ(花押)〕

進上 御奉行所

〔右上書ニ有之〕 〔赤松入道門心吹拳 建武五年二月七日〕

〔忠兼譜中ニアリ〕

2002 〔細々要記〕

一建武三年三月廿五日、官軍赤松か籠つたる白旗の城を取圍て攻ると云々、

2003 「大日本史後醍醐天皇紀」

一延元元年三月云々、是月、新田義貞發京師、圍赤松則村白旗城、遣右衛門佐脇屋義助、略定山陽道、太平記

2004 「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防五郎三郎忠兼申軍忠事

去二月、御敵等楯籠摩耶山之由、承及候之間、自播州馳參、同十三日、攻上彼山之處、舍弟十郎忠範被射右乳上訖、此等次第御見知之上者、可賜御證判候哉、恐惶謹言、

建武五年二月廿三日

惟宗忠兼

進上 御奉行所

承了(花押)

2005 『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼謹言上

欲早任八幡天王寺所々合戰軍忠旨、預御一見狀間事、

右、三月十三日、於八幡致合戰条、大隅助次郎入道・東郷小三郎令見知早、同十六日、於天王寺・安部野濱手令生虜二人乎、生虜奉行人高橋中務丞致見知訖、然早預御

一見狀、爲備後代亀鏡、恐々言上如件、

建武五年三月 日

承了(花押)
【道繁公】

2006 『兼重傳』

三月十三日、蓋直顯將以明日進入河北、在日州 國富庄、乃贈土

持宣榮書曰、足下其帥兵會之、

2007 『御領日州大田原村新助藏本』

爲凶徒退治、明十四日所發向也、早馳向國富庄河北、率

當庄軍勢、可被忠勤、仍執達如件、

建武五年三月十三日

(島山直顯) 在判

土持新兵衛尉殿

2008 『兼重傳』

三月十八日、兼重及野邊盛忠率薩徒衆、圍築瀬左衛門太

郎於其宅、乃橋木・姬木・荒瀬等兵發出救之、兼重等退

保鼻連山、二十日、兼重・盛忠帥兵攻橋木城、及森行重等戰於姬木崎、○平山式部少輔等據日州大和田城、在南

種・清道等、師于南郷、或在作大 岩田城、應兼重師、七月十一日、島山直顯率禰寢清成・清種・清道等、師于南郷、日 州、清種先駈立塞要嶮、攻大和

田城、式部少輔善禦之、閏月、直顯聞薩州諸兵來援、兼重乃二日、以執達狀、命澁谷弥四郎重名、徑赴其城、攻以遮之、初直顯之伐兼重徒也、徧募諸郡曰、方討兼重、凡莊官等不來會者、皆爲敵矣、今於此役、國富莊名主莊官等不獨來會、直顯乃九月二十日、以執達狀、命土持宣榮、如南北鄉、使悉率來曰、若莊官等猶於不從發、宜燔其宅以捉來之、

2009 「重久篤兼辭中」

三年十二月、篤兼乃赴屬直顯師、攻兼重城有功、○四年丁丑十一月、前此肝付兼重及野邊孫七盛忠・大隅助三郎忠國・谷山郡司当矢上・鹿兒島郡司当矢上・知覽郡司当又四等、率數千騎、入我大隅、築壘於郡田・清水寺・鼻連山、至是二十九日、同攻我橋木城、篤兼迎戰禦之於吉水、地名在曾於郡、家僮多被疵者、○曆應元年戊寅三月十四日、兼重寺乘黨人澁谷吉岡孫次郎入道那答院祖等、夜取日當山城、西光徒覺乘法眼所守、而今遺墟在日當將兵據之、十五日、篤兼及守護御代官森三郎次郎行重、其他地頭御家人等合兵、與攻日當山城、十八日、肝付兼重・野邊盛忠率薩州賊、數百發出鼻連山、圍築瀨左衛門太郎宅放火燒之、篤兼乃發

城兵、即橋木城、及姬木城・荒瀨城等兵俱續救之、兼重・盛忠退保鼻連山、二十日、兼重・盛忠帥薩兵、數百復攻橋木城、篤兼及森行重地頭御家人等俱拒戰、禦諸姬木崎悉却之、篤兼殊戰、躬亦被疵、二十三日、以聞主將、主將未考乃加花押、還賜篤兼、

2010 「正文重久氏家藏」

大隅國重久孫八藤原篤兼軍忠事

一 去年十一月廿九日、肝付八郎兼重・野邊孫七盛忠并薩州谷山郡司（薩也）・鹿兒嶋郡司（矢上高連）・大隅助三郎・智覽郡司以下凶徒等、率數千騎、取郡田・清水寺・鼻連山於向城、押寄御方城橋木之間、出逢吉水、依致散々合戰、若黨等數輩被疵訖、
一 今年三月十四日夜、兼重・盛忠之黨類、并澁谷吉岡孫次郎入道以下凶徒等、押取西光寺衆徒覺乘法眼之城、日當楯籠彼城之間、同十五日、當國守護御代官森三郎次郎行重并地頭御家人相共押寄當城、日當致散々合戰畢、
一同十八日、兼重・盛忠并薩州凶徒等、率數百騎、取鼻連山於向城、押寄築瀨左衛門太郎本宅、燒拂之間、御

方城橘木・姫木荒瀬軍勢相共懸出致散々合戦、即凶徒等追籠鼻連山畢、

一同廿日、兼重・盛忠并薩州凶徒等、率數百騎、押寄橘木城之間、當國守護御代官森三郎次郎行重并地頭御家人相共、出逢姫木崎、數寇致懸逢合戦、篤兼懸先、追落凶徒等、隨而自身被疵早、

右、合戦軍忠之次第、守護御代官森三郎次郎行重見知早、然早被經御注進(給之)、浴恩賞、爲令成向後弓箭勇、粗言上如件、

建武五年三月廿三日

藤原篤兼

承了(花押)

2011

『池端氏文書』

(端裏書)
「うはたらうわらわのせうもん」

いけはたとのノ御うち、子息うはたらうわらわ、生年九になり候を、ようとう二百もんにいれをきまいらせ候事、

右、今年ハきムンにて候ほとに、わか身もかのわらわもうゑしぬへく候あいた、御うちにおきまいらせ候、たゝしたうしの二百もんハ、日ころの二くわん三くわんもん

にもあたり候うゑ、さうせいと申、かのきムんに給ハリ候御をんをわすれまいらせ候て、もしらい九月中にふほうなる事候は、かのわらわをゑいたいをかきりて、さうてんの御とうの人を、めしとられまいらせ候へきなり、

又この御ようとうハ、らい九月中にいちはいをもて、わきまゑ申候へく候なり、もし又九月中すぎ候は、このしやうを、はうけんとしてゑいたいをかきて、かのうはたらうわらわを、さうてんふくしせられまいらせ候へきなり、よて狀如件、

建武五年四月八日

うはたらうかは(略押)

2012

日向國凶徒誅伐事、度々軍忠尤神妙也、向後亦可抽忠勤之狀如件、

建武五年五月六日

在判

土持新兵衛尉殿

(重卷)
(本文書ハ伊東家古文書所収垂水文書ニアリ)

2013

『正本在權執印』

勢万名内僧膳饗膳米貳石捌斗參舛四合、道嚴被入置雜掌用途質券之間、致結解、依致其弁、不殘彼請文一通、被

撰出候早、但明年壹ヶ年卯許者、可被引募彼借膳米、其以後者、可被致弁之狀如件、

建武五年五月廿八日

執印(花押)

2014 『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼謹言上

欲早任度々軍忠旨、賜御一見狀間事、

右、自四月十七日、兵庫警固御共仕、同六月二日、御敵湊河城寄來間、屬御手致合戰早、同三日、押寄前城、追散御敵訖、此等次第、加藤式部丞令見知早、然早下賜御一見狀、恐々言上如件、

建武五年六月 日

(右繪額傍)
承了(花押)

『張紙ニ』
『石塔殿御一見狀と有り』

2015 『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼謹言上

欲早任度々軍忠旨、賜御一見狀間事、

右、自四月十七日云々、已下同文故略之、

建武五年六月 日

「張紙ニ」「宗久欲」
承了(花押)

「押札ニ有之」
『嶋津大夫判官殿御一見狀と有り』

2016 『載于南山巡符録追加』「越前嶋津氏七代忠兼譜中ニ在リ」

日安

嶋津周防五郎三郎忠兼軍忠条々

一 去四月、丹生寺凶徒等、擬令當國福田庄乱入間、則馳向三草山、致合戰、若黨荒木又五郎被射右足早、
一 同六月、兵庫嶋御發向之間、於生田前致合戰、舍弟十郎被射害乘馬訖、条々御見知之上者、賜御證判、欲備後日支證、仍日安如件、

建武五年六月 日

「赤松内心」
承了(花押)

2017 『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼軍忠事、属于當御手、自六月廿七日、馳向八幡城、今月九日、洞塔下後攻、御敵構城塙楯籠之間、押寄彼城塙、自南手致合戰、令分取頸之条、小笠原孫六・愛甲九郎、同所合戰之間令見之、於頸者捨

畢、然早且預御注進、且下賜御證判、爲備向後龜鏡、恐
言上如件、

建武五年七月 日

承了(宗久)
(花押)

『張紙二』
『嶋津太夫判官殿御一見狀』

2018 『入來本田氏文書』

本田次郎左衛門尉久兼軍忠事云々、已下同文故略之、

建武五年七月 日

承了(花押)

2019 『日州御領大田原村新助藏』

軍忠事、日向國大將軍島山上野修理亮七郎令注進早、殊

神妙也、向後弥可抽忠節之狀如件、

建武五年七月十一日

土持新兵衛尉殿(直榮)

在判

2020 『上相殿御狀案文』

宗貞

藤馬左衛門入道自聽申、嶋津院東方内石寺之田島事、可

渡付自聽之由、度々被仰之處、若林(秀信)大炊左衛門尉林輔房
不及遵行云々、所詮、差遣代官、可被沙汰付下地於自聽
之由、被仰下也、仍執達如件、

建武五年七月廿二日

沙弥(花押)
沙弥(花押)

白杵院御代官

内田次郎兵衛入道殿

〔コノ文書「上相殿御狀案文」トフレド疑ッ存ス〕

2021 『入來臣寺尾善右衛門家藏』

兼重以下凶徒爲誅伐、發向三侯院之處、薩州御敵等可致
後卷之由、依有其聞、先度被成御教書早、被馳向彼等城

壩、可被致忠勤也、仍執達如件、

建武五年後七月二日

澁谷弥四郎殿(重名)

源(花押)
(島山直顯)

2022 『入來院氏文書』

〔本文書ハ二〇二一號文書ト同文ニシキ者略ス〕

2023 『見于南山巡狩錄追加』『越前島津氏七代忠兼譜中ニ在リ』

嶋津周防五郎三郎忠兼申軍忠事

去月廿六日、丹生寺凶徒等、寄來當國明石城之間、馳向之處、同廿七日、於加爾坂北致合戰、及至極打物、被突害乘馬、若黨山田左衛門次郎令討死了、凡自最初不去御陣頭、致日夜警固、於所々每度致軍忠次第、御見知之上者、可賜御證判候哉、恐惶謹言、

建武五年閏七月廿九日

惟宗忠兼

進上 御奉行所

承候了〔赤松門心〕
(花押)

2024

〔道鑑公御譜中〕

〔写在田布施衆二階堂三左衛門定行〕

寺社并本所及武家輩所領等事、々書一通遣之、早守彼狀、當國分來月中嚴密可遵行、將又土貢以下令先納者、悉可糺返之、若猶遲怠者、任定置之旨、可處罪科之狀如件、

建武五年閏七月廿九日

御判〔尊氏〕

薩摩國守護〔貞久〕

〔右「書」有之〕
〔新田宮執印又三郎所進〕

〔右統目裏判(酒匂久景)
(花押)〕

2025

〔道鑑公御譜中〕

〔写在田布施衆二階堂三左衛門定行〕

諸國守護人事

右、被補守護之本意、爲治國安民也、爲人有德者任之、爲國無益者可改之處、或募勲功之賞、或稱譜第之職、押妨寺社本所領、管領闕所地頭職、預置軍士、宛行家人之條、甚不可然、固守貞永式目、大犯三ヶ條之外不可相綺、爰近年不叙用引付等奉書、不及請文、徒涉旬月、多累催促、愁鬱之輩不可勝計、政道之違亂、職而斯由、仍就違背之科條、須有改定之沙汰、寺社并本所及武家輩所領等事、今年閏七月廿九日御教書并御事書案遣之、所詮、且任被仰下之旨、嚴密致沙汰、且可相觸薩摩國地頭御家人等之狀如件、

建武五年八月十一日

道鑾在判

守護代〔酒匂久景〕

〔新田宮執印又三郎所進〕

〔統目裏判(酒匂久景)
(花押)〕

2026

〔載于南山巡狩錄追加〕〔越前島津氏七代忠兼譜中ニ在リ〕

播州白旗城軍勢、當國下揖保庄西方地頭嶋津周防五郎三

郎忠兼申、同庄東方地頭職事、依爲闕所、可配分當城中

軍勢恩賞之旨、就被仰下候、令支配候之處、捧本領之支

證、忠兼望申候、可爲何様候哉、軍忠異他候之間、令言

上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武五年八月十三日

進上 御奉行所

2027 「載于南山巡狩錄追加」 「越前嶋津氏七代忠兼譜中ニ在リ」

播磨國下揖保庄壹分地頭職事、爲白旗城軍勢勲功之賞、

任被仰下之旨、所令支配周防五郎三郎忠兼也、早守先例、

可被知之狀如件、

建武五年八月廿一日

沙弥(花押)

2028 「御領日州大田原村新助藏本」

日向國凶徒肝付八郎兼重誅伐最中、於令住宅之輩者、可

爲御敵之旨、被定之處、國富庄名主庄官等、背制法不馳

參之上者、早馳向彼南北郷、相催之、可被具參、若至不

叙用族者、令放火住宅、可被召進其身也、仍執達如件、

建武五年九月廿日

土持新兵衛尉殿

2029 「道鑑公御譜中」

「写在田布施家二階堂三左衛門定行」

寺社并本所及武家輩所領等事、今年閏七月廿九日御教書

并御事書案、同八月十一日御施行如此、早任被仰下之旨、

可被致嚴密沙汰候、仍執達如件、

建武五年九月卅日

謹上 薩摩國地頭御家人御中

平久景在判

2030 「水引泰平寺文書」

薩摩國泰平寺塔婆事

院宣如此、爲六十六基之隨一、定于祈所可造立、可被存

其旨之狀如件、

曆應一年十月十四日

泰平寺長老

左兵衛督判

2031 「兼重傳」

十月、國富莊人、猶不來會、宣榮亦不報情由、於是、蓋直

顯將以八日移陣於雀尾、乃三日、贈宣榮書、令速率會之、

2032

「御領日州大田原村新助藏本」

肝付八郎兼重對治之處、國富庄名主庄官等、依不馳參、可被進催之由、先度雖被仰、無音条、太無謂、所詮、來八日所被召陳於雀尾也、急速可被具參之狀如件、

建武五年十月三日

判
〔直顯款〕

土持新兵衛殿
(宣卷)

2033

「載于南山巡狩錄追加」 「越前島津氏七代忠兼譜中ニ在リ」

播磨國下揖保東方地頭職事、爲關所、〔建武三年三月廿五日城ノ圍上被支配白旗城之軍〕

勢恩賞畢、而當方内屋鋪島貳段事、爲累代地頭之敷地云々、麥島事、雖未配分、先任重代、可被知行也、仍執達如件、

曆應元年十一月廿四日

沙弥(花押)
(余松御封)

周防五郎三郎殿
(忠卷)

2034

「道鑑公御譜中」

「写在田布施衆二階堂三左衛門定行」

薩摩國一宮八幡新田宮執印又三郎友雄重言上

爲同國阿多郡北方領主隱岐三郎左衛門入道行存扶持當社御領五大院田平民名主五郎兵衛友氏同兄弟數輩、押

取御年貢并神用米等、押領友雄知行宮下跡田地友氏所

當米代引田以下間、含鬱訴刻、如被仰下御教書・御事

書等者、可停止寺社領妨、違背輩者可被罪科云々、依

此旨御施行、就注申御催促間、爲收納御年貢、差遣神

人等處、行存不恐神慮、不憚御教書、破損大菩薩變化

神王面衣裳、或殺害神人平太郎太官司、或致打擲蹂躪

狼藉上者、重科難遁、然早任定法、先被逐大拔節、於

神敵御教書違背科者、且任鯨嶋行願例、被經御沙汰、

且欲預御注進子細事、

副進

一通 御教書案

一通 御事書

一通 御施行

一通 御催促狀

一通 行存可弁年貢由同御催促狀

一通 被殺害神人以下輩交名注文

一通 行存令殺害神人致打擲蹂躪下等人等交名注文

右巨細、先度具言上早、爰行存扶持神敵友氏等、奉忽諸

神威、背御教書・御事書等、破損王衣之結句、与殺害以

下恥辱、於御年貢沙汰、神人等狼藉咎難遁之上者、任定

法、先被遂大袂節、且被責渡彼濟物等、且於神敵之段者
任行願例、被經御沙汰、爲預御注進、重言上如件、

曆應元年十一月 日

〔右統目裏到六箇久景〕
(花押)

2035

『樺山家文書』

尊氏御判

下 嶋津安藝守

所領付有此奧ニ、右勲功賞如常有、

〔南朝延元三年戊寅即曆應元年也〕
曆應元年十二月廿七日

(高節直)
武藏守在判

2036

『全』

尊氏御判

下 右爲勲功之賞、所宛行也者、(在脱)先例、可致沙汰也、狀
如件、

曆應元年十二月廿七日

高武藏守在判

嶋津安藝守殿

(本文書、前号文書共ニ採ハシ)

2037

『戴伊地知文書』

井田郷御施行案

豊後國井田郷事、被預置于嶋津上總入道道鑿之處、戸次
豊前太郎頼時、号有一色入道預狀、(龜氏)致押領狼藉云々、頗
難遁其咎欵、早停止彼妨、可被沙汰付于道鑿之狀、依仰

執達如件、

曆應元年十二月廿七日

〔節直カ〕
武藏守在判

大友式部丞殿

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

2038

『兼重傳』

興國元年己卯、即此北朝
曆應二年、猪俣新左衛門尉據上財部城、應
兼重師、正月十三日、畠山直顯使禰寢清種及其族平六兼
安等攻之、新左衛門拒戰、兼安等傷退、四月、平山式部
少輔據大和田城、受圍久矣、清種等立塞、日夜攻之、凡
數十戰、十三日、式部等棄城走、二十日、直顯贈清種書、
以賞其功也、

2039

『日州御領大田原村新助藏』

日向國土持新兵衛尉宣榮申軍忠事、申狀副具如此候、自
最前爲御方、無貳軍忠異于他仁之候、雖然、多年疲身難

儀之至候、早被宛行恩賞、爲合戰要路、被成勇之、亦可致忠功候、忠勤之段爲申候者、八幡大菩薩御爵於可罷蒙候、此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年二月五日

源義顯裏判

進上 御奉行所

2040

『正文在小根占池端氏』

日向國凶徒肝付八郎兼重黨類等、楯籠大岩田城之間、没落之時、被抽軍忠条神妙、亦可勵其賞也、仍執達如件、

曆應貳年四月廿日

源山直顯(花押)

衾寝弥次郎殿

2041

『伊地知文書』

〔守護代請文大友殿〕

豊後國井田郷事、御教書謹而承候訖、任被仰下旨、擬沙汰付鳴津上總入道道鑿候之處、戸次豊前太郎代不叙用之由、守護代宗能副救、捧請文候、仍進上之、子細載之狀子カ候欵、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年五月四日

沙弥正全請文

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

2042

〔市來崎氏文書〕

讓与 嫡子二郎太郎所

薩摩國山門院内城入道屋敷并西桃木田五段事

四至堺者見本證文

右、田屋敷等者、妙義重代相傳私領也、然者、相副次第證文等、限永代讓与訖、有限地頭所役者、任先例、可勤仕也、仍讓狀如件、

曆應二年五月十日

妙義(花押)

2043

〔全〕

讓与 熊松所

薩摩國山門院古城園壹段事

一所古城四至東限田縁 南限田縁 西限川路之道通 北限城之中道通

一所宮郷田壹町五反内 下白石壹町内貳段

一所高小野名内太郎丸作參段 四至者見本證文、

右、田屋敷等、爲親父妙義禪門之讓、無當知行無相違、

然間、限永年、讓与熊松丸畢、致子全カ孫々無相違可領知也、仍讓狀如件、

2044

讓与 熊松所

薩摩國山門院高小野名内太郎丸作參段事

右、田地者、秀貞相傳之間、無當知行無相違、然間、熊

松讓与處也、但御公事等者、本證文明白之間、不及注之、

任此讓狀、致子^(至)孫々永代無相違可領知也、仍讓狀如件、

〔年間シレス〕

2045

〔兼重傳〕

六月二十日、泰季使南方衆及和泉・牛屎等兵、俱攻碓山

城、成將酒勾左衛門尉久景等拒戰却之、時和泉人梶伴三

郎保末及關圖書允實弘・羽月人高橋八郎入道慈阿等馳來、

助久景師、南方衆退據淵上城、在入來二十九日、比志嶋

彦一丸範平・椎原次郎惟種・東郷次郎三郎・蒲生太郎・

和泉保末等往攻淵上、保末先登被疵、南方兵乃逆戰於上

原、同上

2046

〔水引權執印藏〕

爲御方、楯籠碓山城、被致軍忠之条、神妙之間、關所地

薩摩國宮里六郎次郎入道跡田地事、所被預置也、可被知

行候、且此子細可令注進京都候、仍狀如件、

曆應二季六月廿三日

(酒匂)
久景在判

道顯在判

權執印三郎次郎殿

2047

〔和泉實忠譜中〕

曆應二年己卯、初右兵衛尉伴保久之爲郡司於給黎院也、

兼領島津御莊辨濟使於泉莊、徙而治之、因號泉氏、如上

籠・石村兩村、係郡司領者百有餘年于茲矣、惣覽書元年九月五日御下文、

今也實忠亦由領出水、蓋恐上籠・網屋二城爲敵所奪、遣

其將士守二城、至是四月二十一日、島津圖書助忠國率村

田輔阿闍梨如嚴等攻陷之、如嚴有戰功、○澁谷石見權守

重棟遣其將士、守祇答院温田城、六月朔日、澁谷安藝權

守經重及村田如嚴等攻陷之、遂據其城、二日、澁谷又次

郎入道及在國司弥二郎・東郷彦三郎左衛門入道等帥牛屎

・和泉・山門・莫禰軍數百騎、攻温田城、經重等善禦之、

十三日、又次郎等不克敗走、是時忠國・如嚴・經重等應

南朝、而於實忠及澁谷重棟又次郎入道重幸老等、屬幕府

勵軍忠也、

2048

〔正文在村田五郎左衛門家〕

二三条侍從泰季
一見了(花押)

村田輔阿闍梨如嚴申軍事

延元四年卯月廿一日、属于嶋津圖書助忠國之手、押寄

薩摩國給黎院上籠・網屋二ヶ所城、嶋津豊後守 實忠代橋籠、令追落

御敵等候畢、

一同六月一日、澁谷安藝權守經重相共押寄同國那答院温

田城、澁谷石見權守代橋籠及散々合戰、令追落御敵於、經重相共

橋籠彼城之處、同二日、澁谷又次郎入道・同八郎三郎

・同彦六并在國司弥二郎・東郷彦三郎左衛門入道、其

外牛屎・和泉・山門・莫禰軍勢等數百騎寄來之間、至

于同十三日、及晝夜合戰、打留御敵等數輩、悉追散早、

然早給御判、爲備後證、言上如件、

延元四年六月 日 阿闍梨如嚴上

2049

〔山田氏文書〕

雜訴決断所牒 薩摩國衙

沙弥道慶申當國谷山郡内山田・上別符兩村地頭所務并

得分物等事

右、件兩村所務以下事、任谷山五郎入道覺信代教信請文、

可知行之由、可被下知者、以牒、

〔曆元元年也元之〕 建武六年七月廿一日 右衛門大尉坂上宿祢(花押)

左少辨藤原朝臣(花押)

2050 『正文在財部延時氏』

爲御方橋籠碓山城、被致軍忠候之段、神妙之間、闕所地

薩摩國薩摩郡竹内平八跡田地内青木田壹町、并竹内藪壹

所、各半分事、所被預置也、弥可被致忠節候、且此子細

可被仰達候、仍狀如件、

曆應二年七月廿六日 (酒分) 久景(花押)

延時又三郎入道殿 (忠徳)

2051 『比志島文書』

御還住比志嶋由、悅承候了、京都今者悉靜謐之間、日出

次第候、就其而者、(貞久) 總州御下向事、無子細候、近日御着

國奉待候、恐々謹言、 〔年間不詳〕

八月三日 久景(花押)

2052 『比志嶋氏藏』

薩州凶徒等、(貞久) 寄來守護御方并荆山城、依及令致合戰、

承、同國比志嶋彦一丸代権原次郎惟種爲後卷、御方仁馳

参刻、同國入來院於瀨上々原、去六月廿九日、令致散々

懸合之戰條、且同時合戰輩、薩州東郷次郎三郎并隅州蒲生太郎等見知訖、此等次第、爲預御注進、言上如上件、

曆應二年七月 日

〔守護代酒勾左衛門尉久兼承了〕(花押)

2053

『高尾野士人出水藤之丞本』

自最前爲御方令致忠節之處、南方凶徒等、去六月廿日、寄來碓山城攻戰之間、爲後卷保末馳向之處、引退御敵碓山、楯籠入來院洲上之城之間押寄、同廿九日、捨身命先懸之處、最前仁堀江被馬共切落、自身被疵左手存命不定之處、同所和泉閔圖書允實弘并牛屎院羽月高橋八郎入道慈阿、證據分明之上者、賜證判、爲預御注進、粗言如上件、

曆應二年七月 日

〔酒勾久兼承了〕(花押)

2054

『水引權執印文書』

薩摩國宮里郷一分領主權執印良邇代子息三郎次郎俊正申軍忠事、今季六月十八日、當國南方凶徒等、可寄來之由依有其聞、自同日楯籠碓山城、請取水手矢倉、所致警固也、同十九日、爲對治御敵式部藤三郎、被遣御方勢之間、

2055

『兼重傳』

俊正自身令發向、燒拂藤三郎宿所早、同月廿日、凶徒等押寄碓山城、致合戰之間、俊正於水手致軍忠者也、同廿二日南方凶徒并澁谷孫二郎・同小四郎入道・同平次五郎以下御敵等押卷當城、致散之合戰之間、俊正爲水手致合戰之處、同日酉刻御敵打破城大手之由承及之間、走向大手致軍忠、追歸御敵之条、酒勾兵衛四郎・高城彦六爲同所令見畢、同廿五日夜合戰之時、御敵欲破水手之間、自水手之小城戸、被出御方之勢、令追拂御敵之間、俊正爲彼人數打出城之外、追歸御敵之条、當御奉行御見知早、同廿九日、凶徒等引退碓山城、楯籠入來院洲上城之間、即時馳向彼戰場、欲致合戰之處、城内無人數也、可致警固由被仰之間、致警固早、然早任軍忠之實、且預御注進、且爲給御證判、粗言如上件、

曆應二季七月 日

〔酒勾俊正承了在判〕

八月、直顯率禰寢清種等復入三俣院、十三日、攻圍我高城、兼重本城、連日數戰城且陷、兼重乃欲死之、先是、江田式部少輔家定與其父家房家房高祖曰小野太郎家綱、事顯朝公、爲薩州日置庄下可職、領

田三十町居於大田、因為氏、曾孫家氏、法号忍阿、遷肥、從肥之
前松浦庄早濠村及福万名地頭職、易氏江田、其子即家房也、

松浦來居三侯、有恩於兼重、至是、家定諫之曰、吾死

誑敵、君為後圖、兼重不聽、強而後可、乃誓曰、幸得

不死、子女一息竭力報汝、餘期黃泉、乃二十七日、家

定遂自呼三侯八郎兼重、伏劍死之、以逃兼重、江田家

定素有名士、恐敵迹之、爰有木前肥後者、乃詐呼江田

式部家定、亦自殺之、兼重乘間乃走笠野、得入本城、

肝付直顯遂拔高城、既而兼重徵家定之子、手加之冠、

名曰兼政、字金太郎、異姓伴氏、兼政後復本姓大江氏、由是江田氏世名兼字、不與氏異云、

又兼重之困高城也、會子規來集旗鳩居、因本

族後世禁言時鳥、為故事云、此月、

後醍醐帝崩于吉野、【嘉永元戊申迄五百年】

後村上帝立、

2056 「水引權執印家藏文書」

楯籠碓山城、被致軍忠候之段、神妙之間、雖被預置宮里

六郎次郎入道跡田園、為小所之間、闕所之地出來者、追

可有計沙汰旨、可令披露候、仍執達如件、
(酒匂) 久景在判

曆應二年八月六日

權執印三郎次郎殿

2057 「正文在西侯氏」

為御方楯籠碓山城、被致軍忠之条、神妙之間、雖被宛行

小所、重闕所之地出來者、追而可有計沙汰旨、可令披露

候、仍執達如件、

曆應二年八月十日

西侯兵衛入道殿

(酒匂) 久景(花押)

2058 「水引觀樹院藏」

去六月廿二日、薩摩國南方御敵并澁谷人々押寄碓山城、

及散々合戰、御敵既取破城壁垣立、攻入之時、自八幡新

田宮御山、鎬音二三度響入于寄手凶徒等中、其時神慮令

然哉、御方軍勢乘勝致合戰之間、彼凶徒等討負引退畢、

神明貴仰而猶可奉仰者哉、仍為御不審、注進言上如件、

曆應二年八月十五日

進上 御奉行所

左衛門尉久景
(酒匂) 在裏(花押)

「道鑑公御譜中ニハ、正文在隈之城聚有馬休右衛門ト記セリ」

2059 「正文在水引泰平寺」

奉安置薩摩國泰平寺塔婆

佛舍利二粒一粒東寺

右、於六十六州之寺社、建一國一基之塔婆、忝任申請、

既爲勸願、仍奉請東寺佛舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、安置之儀、旨趣如件、

曆應二年八月十八日

左兵衛督朝臣直義(花押)

〔道鑑公御譜中ニアリ〕

2060

『見写本』

爲誅伐日向國凶徒肝付八郎兼重以下輩、去建武三年十二月五日、大將御發向三侯院之間、大隅國祢寝八郎清道馳參、同十八日、押卷兼重城塚、至于同建武十月、日夜合戰、自身被疵畢、將又去年七月十一日、爲誅伐兼重以下凶徒等、日向國南鄉御發向之時、楯籠兼重与黨平山式部少輔、可攻大和田城由蒙仰之間、押寄彼城取向城、致連日合戰、今年曆應四月十三日夜、攻落彼城畢、然今月十三日、押卷兼重城塚御合戰之時、清道又致合戰、同廿七日、攻落兼重城塚、度々合戰致軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年八月廿七日

建部清道上

進上 御奉行所

〔畠山直顯判
承了(花押)〕

2061

『正文在小根占池端氏』

爲誅伐日向國凶徒肝付八郎兼重以下輩、去建武三年十一月廿日、大隅國祢寝弥次郎清種馳參日向國太田城、付御着到、御使結城弥七行郷・友永七郎澄雄相共、令對治南郷櫛間城、同十二月六日、兼重以下凶徒等楯籠、押寄下財部新宮城、取向城數合戰之刻、御發向于三侯院之間、同九日、馳參三侯院、押卷兼重城、致合戰之處、同十八日、自南城戸打出數輩凶徒等之間、懸先致散々合戰、追卷御敵等於城内、於城戸口被疵右瀝射疵、訖、次同四年正月十日、隨于御命、攻破石山城之時、懸先致散々合戰被疵左手射疵、訖、隨而自建武三年十二月迄于同四年十月、日夜致合戰令抽軍忠畢、次去年七月十一日、爲對治兼重以下凶徒等、御發向之間、御共仕、賜御前陣、打入日向國南郷之處、兼重与同平山式部少輔等依楯籠于同郷大和田城、可取向城之由、蒙仰之間、取向城日夜致合戰、今年四月十三日、攻落彼城訖、又兼重与同猪俣新左衛門尉等楯籠上財部城、取向城之時之合戰、親類平六兼安被疵、左眼射疵將又今月十三日、押卷兼重城、日夜致合戰、同廿七日、攻落彼城訖、然所々數ヶ度合戰、捨身命懸先、令抽軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年八月卅日

建部清種上(裏花押)

進上 御奉行所

〔畠山修理亮直顯判〕
承了(花押)〕

2062 〔重久篤兼譜中〕

曆應二年己卯、南朝興 國元年、八月、篤兼屬直顯師、入三侯院、

十三日、與園兼重於高城、連日數戰攻之、城且陷、兼重欲死之、江田式部少輔家重嘗有恩於兼重、乃諫代之、二十七日、自呼三侯八郎兼重、伏劍死之、以遁兼重、兼重乘間乃走笠野、直顯遂拔高城、篤兼有功、於是九月五日、以關直顯、直顯乃加花押、還授篤兼、

2063 〔重久文書篤兼家藏云〕

大隅國重久掾篤兼自去建武三年十二月、奉屬當御手、致肝付八郎兼重城攻、至于去月廿七日、當城破却之時、連日致合戰、抽軍忠候之上者、急速被經御注進、可預恩賞候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年九月五日

藤原篤兼上(花押)

進上 御奉行所

〔畠山直顯〕
承了(花押)〕

2064

〔載于南山巡狩錄追加〕「越前嶋津氏七代忠兼譜中ニ在リ」

嶋津周防三郎左衛門尉忠兼軍忠事

播磨國爲山田丹生寺御敵對治、大將軍御發向之間、今年七月十三日、馳參志染軍陣、同八月四日、馳向男神山、同十三日、發向押部神澤城、同廿日、於志武礼陣合戰、同廿九日、赤松律師坊相共破却淡河・岩峯三田城、九月八日、於櫛谷城、數刻合戰之條、當日、大將軍赤松律師坊・河原二郎等同所合戰之間、令見知者也、其後于今不罷去山田軍陣、致忠節之上者、可賜御證判之由、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年十月九日

左衛門尉忠兼

御奉行所

承候了(花押)

〔右土書ニ有之〕
〔嶋津周防三郎左衛門尉〕

2065

〔高岡土河上次郎左衛門文書〕

參御方致軍忠者、本領事、可注進京都也、仍執達如件、

曆應二年十月廿九日

〔幕氏將軍之時鎮西ノ奉行也〕
沙弥(花押)〕

河上又次郎入道殿

〔家久〕
二色少輔太郎入道殿〕

菊池黨類以下凶徒事、致退治沙汰之最中也、忿馳參御方、可被抽軍忠候、仍執達如件、

曆應二年十一月七日
大宰少貳(花押)

河上又次郎入道殿

『建武四年八月十四日、市來平城ニ於テ戰死、疑道乘也、且建武四年ニスレハ逢ス、曆應四年八月十五日、公親ヲ称援ノ兵等ヲ率ヒテ、伊集院ニ如キ玉ヒ、助三郎忠國ヲ平ノ城ニ攻玉フ事アリ、此時ナラシ、三國擾乱記等ハ、建武四年ニ作ル、後考而已』

嶋津周防三郎左衛門尉忠兼申、本領訴訟事、属于頼房之手、於播磨國山田丹生寺合戰最中、雖致軍忠候、浮沈之由、歎申候之間、令注進候、急速被經御沙汰、於其身者、則可下給候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

十一月十三日
源頼房(花押)

進上 御奉行所

「上書ニ有之」
「源藏人狀曆應二正廿二」
(ヨメス)

嶋津周防三郎左衛門尉忠兼申、本領訴訟事、於播磨國山

田丹生寺合戰最中、雖致軍忠候、以代官難申披之由申之、令參上候、急速被經御沙汰、可下給候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應二年十一月十三日
沙弥圓心(花押)

進上 御奉行所

「右書ニ有之」
「赤松入道狀曆應二正廿二」

口宣

惟宗友雄

右人、宜任左衛門大夫者、宣下之旨如此、悉之、以狀、

曆應二年十一月廿一日
大藏卿

日向國凶徒誅伐事、軍忠之由、畠山修理亮七郎義顯所注

進也、尤神妙者、狀如件、

曆應二年十二月十三日 判

土持新兵衛尉殿

奉入置本錢返南郷石永圖合田内田園等事

合直錢拾伍貫文者、

右、田園等者、爲本錢返所奉入置長谷場殿方實也、弁本錢候程者、雖爲何ヶ年可有御耕作候、仍彼田園坪付別紙在之、如此契約申上者、縱雖有直錢、明年三ヶ年之間者不可請、若不慮之事出來有相違時者、以本錢壹倍參拾貫文可弁勤候、仍本物契約狀如件、

曆應貳年十二月廿五日 隆増(花押)

2072 「長谷場氏文書」

南郷石永圖合内田園等坪付事

五斗代得樂圖合田伍段 五斗代同所財万參段

五斗代同垣本參段 五斗代同所肆段

五斗代松本伍段

以上伍切貳町定

一定善古居園壹ヶ所

一實圓房古居園壹ヶ所 以上貳ヶ所

右、彼圖合田并園等者、奉入置本錢返上者、御勤以下可

爲本主沙汰也、仍坪付如件、

曆應貳年十二月廿五日 隆増(花押)

2073

「道鏡公御譜中」

「正文在出水野田感應寺」

鎮國山感應禪寺廻本州最初法窟也、曆應第二之年 本州刺史藤原朝臣嶋津公之京謁見 「上歌」大將軍尊氏殿下、殿下喜色之餘、問公曰、公之國今有緇林之可與禮樂者否、答言、有也、蓋遊窟之魚不大也、故殿宇隨地小矣、豈其預 叡問乎、殿下便下使价問本寺來由并主盟家風、主盟雲山和尚不說其攸來由事、唯賦一偈、答 叡問、其偈云、
休將名字問禪徒 利養紛華與道疎 只憶祖庭秋已晚 山家村裏送居諸、
殿下展書感歎相甚、輒聯三十一字詠歌答焉、其歌云、
さそなけに都のとをき山のはに
くもらぬ月のひとりすむらむ

繇焉、終登本寺、加初地之列刹焉、諒太守之豪華、和尚之德力也、當主席徹堂禪師、求豫斯記、忽奔筆云、
南太門拜首、

辭世 歸元一曲 說侶虚空 泥牛吼月 木馬嘶風

康永三年甲申九月廿日、歲七十一入定

2074

『兼重傳曆應二年』

是歲、秋兼率鹿屋矢、龜丸・入部七郎等、與平岡四郎等戰于

長谷山、鹿屋矢、龜丸進接四郎、爲之被壓殆喪其首、時秋

兼及入部七郎續救之、七郎乃斬平岡獲其首級、秋兼賞之、

昇七郎兼字、令更兼衆列同族云、見入部氏系圖、按是歲兼重

尾擊之、然入部譜不言其詳、疑此秋兼、迎父防戰爾、入部之走肝付也、直顯軍兵應必氏由是子孫世名兼字、不与同族異、亦猶江田氏本姓占部云、

2075 『高山土入部氏古系圖』

兼衆、興國元年號入部七郎、鹿屋矢、龜丸、十七歲而長谷

山之合戰時、敵方平岡之四郎云者有、矢、龜丸取押、既頸

取、其時肝付秋兼・入部七郎落合、敵打伏頸取、其時忠

節依無比類、家字被成訖、

2076 『志布志宝滿寺文書燒殘古写』

奉安置日向國寶滿寺塔(婆)

佛舍利二粒一粒東寺

右、於六十六州之寺社、(建)國一基之塔婆、忝任申請、

既爲勸願、仍奉請東寺佛舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、

衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、(受)置之儀旨趣如件、

曆應三年正月一日 左兵衛督源朝臣直義(花押)

2077 『宗久公譜中』

一曆應三年庚辰正月廿四日早世、享年十九、

法名久阿弥陀佛、無繼子、

宗久

師久

生駒丸 上總三郎左衛門尉 大夫判官

氏久

2078 『水引權執印文書』

薩摩國凶徒事、相催當國并隅州地頭御家人等、嚴密可退

治之狀如件、

曆應三季三月三日 (直義之)御判

嶋津上總入道殿 (貞久)

「右上方カキ」
「御教書案」

「道鑑公御譜中ニ在リ」

2079 「正文在文庫」 「伊作家二代宗久譜中正文在手鏡トアリ」

薩摩國凶徒事、不日令發向、嚴密可退治之狀如件、

曆應三年三月三日 (直義)(花押)

(伊作家久)嶋津左京進入道殿

2080

「御文庫廿二番箱一巻中」
〔本文書ハ二〇七九号文書ト同文ニツキ省略ス〕

2081

『志布志寶滿寺文書古序』

日向國島津庄内寶滿寺塔婆事、爲六十六基⁽²⁾隨一、寄祈
所可令興隆也、可被存其旨之狀如件、

曆應三年三月廿七日

左兵衛督源朝臣直義

當寺長老

2082

『全』

日向國寶滿^(寺塔婆カ)事、爲勅願之^(儀送カ)修造之功、殊可^(奉折カ)

天下泰平者、院宣如此、仍^(執達如件)、

曆應三年四月八日

舜律上人御^(房)

2083

「水引權執印文書」

薩摩國凶徒退治事、去三月三日御教書如此、急速致用意、
相催一族、可被發向狀、依仰執達如件、

曆應三季五月十五日

沙弥^(貞久)(花押)

新田宮權執印殿^(良通)

2084

「宮之城柿木原平右衛門藏」

薩摩國凶徒退治事、去三月三日御教書如此、急速致用意、
相催一族、可被發向之狀、依仰執達如件、

曆應三年五月十五日

沙弥^(貞久)御判

柿木原左衛門太郎入道殿

2085

「道鑑公御譜中」

「正文在田布施乘二階堂三左衛門定行」

於薩摩國阿多北方構城塚、建武四年四月以來致軍忠由事、
守護人所注申也、尤以神妙、弥可抽忠節之狀如件、

曆應三年七月十日

二階堂^(貞久)紀伊權守殿^(貞通)(花押)

二階堂紀伊權守殿^(行世)

2086

「正文在長谷場氏」

〔端裏書〕
「貞阿讓狀正文」

讓与

日向國南郷末弘名水田壹町參段、門貫蘭付水田蘭田貳段、
前田貳段、千与木圖田參段、口無壹段廿、以上貳町壹段

肆文坪之事、

上丸參段 下丸貳段 益太夫作貳段

又太郎作壹段 北原卅 門貫藺田貳段 以上壹町卅

藺四ヶ所内門貫北園卷ヶ所
野間東園卷ヶ所

右、件水田藺等者、沙弥貞阿重代所領也、而長谷場兵庫

殿爲養子、限永代所讓与也、乍謂同養子、有奉公忠之間、

彼所領讓渡了、有限領家御米者、五社のたんく、春日大

神正月廿一日も(辨)ちい六十枚、北毗門堂(沙脱カ)二月一日もちい六

十枚、代米四斗、地頭米五斗内二斗可勤仕、子息六郎と

致兄弟之契、成水魚思候、雖後々末代、無他妨可知行、

就中、件下地ヲ、有令沽却事者、与傍例眞物於于一人可

知行、更不可渡他人方、如此讓上者、雖有何子孫全不可

成異論煩、若有左様輩時者、永教仁(不脱カ)として、返(考)て罪科可

申行也、仍爲後日、以自筆讓狀如件、
曆應參年七月十三日 沙弥貞阿(花押)

2087

「道鑑公御譜中」

「正文在川辺衆大井七右衛門実延」

薩摩國凶徒退治事、去三月三日御教書如此、急速致用意、

相催一族、可被發向之狀、依仰執達如件、

曆應三年七月廿日 沙弥(花押)

大井小四郎殿

2088 『写在雜書』

(本文書ハ二〇八七号文書ト同文ニツキ省略ス)

2089 「道鑑公御譜中」

「案文有之」

(本文書ハ二〇九六号文書ト同文ニツキ省略ス)

「此文書末ニアリ、見合スヘシ」

「此文書、旧御番所御文書二番箱中御外祖御讓狀一巻ノ中ニ在リ」

2090 「正文在長谷場氏」

(端裏書)

「六郎殿契約狀」

日向國南郷末弘名水田貳町一反卅、藺四ヶ所内水田壹丁

卅、藺二ヶ所ハ、長谷場兵庫殿を貞阿之養子として、永

代讓与所也、有限領家御米、五社檀供等ハ、任親父貞阿

讓狀之旨、可被弁之、於其外御公事成物ハ、被停止了、

如此契約申上者、成一味同心之思、可全知行候、若何成

子孫あて、彼所にしさいを申さん時ハ、相互加合力、を

やの讓狀にまかせて、さいくわに申おこなうへく候、但

本證文ハ貞命あてたふ間、案文をかき、裏をふしてたて

まつるへく候、仍契約之狀如件、

曆應三年八月六日

源貞命(花押)

2091

〔長谷場氏文書〕

講堂 留主所本壇供六十枚、請取候了、

正慶二年正月三日 上座代有榮

納留守所御壇供六十枚、末弘弁

正慶貳年正月八日 大宮

西御堂本且供六十枚、末弘名弁

正慶二年正月十五日 寺家

毗沙門堂大且供六十枚、留守所弁

正慶六年二月一日 寺家

曆應參年八月十九日

沙弥貞阿(花押)

2092

〔正文在長谷場氏〕

〔端裏書〕

〔門貫壳之状正文〕

ようく候にて、うりわたし候水田壹町卅坪と井園事、

南郷末弘名内上丸三反、下丸二反、益太夫作二反、又

太郎作一反、北原卅、園田二反、門貫北園壹ヶ所

野間東園壹ヶ所

右、件水田園等者、貞阿重代相傳所領也、而長谷場兵庫(久純)

2093

『兼重傳興國二年』

二年庚辰、北朝曆 應三年八月、公率禰寝清種・重種・又五郎

清増・梶伴三郎保末等、如伊集院、攻一字治及市來二城、

重種・清増等爲先鋒皆下之、市來時家乃降、當此時、兼

重既收散兵又入鷹島、與中村彈正忠秀純秀純乃鷹島郡司矢上

村、因以爲氏、觀一色入道文和三年五月下知状及據東福寺城、矢上

比志島氏藏書等可以考也、又矢神肥前地名也、

高純據催馬樂城、交爲應援、公反役、乃十二日、使公

弟島津師忠佐多 別祖、率禰寝清増・重種等、攻東福寺城、兼

重等善拒之、十五日、又使公弟資忠・資久各帥兵、分道

擲手、攻催馬樂城、日夜戰鬪、十二月六日、師忠夜攻東

福寺城、兼重・秀純麾衆執弓禦之、傷重種等、師忠曠日

不能拔之、滿家征人乃還休兵、十八日、公賜比志島彦

一書詰之、且戒師期曰、方今戰鬪、君其率族來會、毋必後二十五日矣、

2094 「正文在長谷場氏」
(付札)

一乘院政所下七通之内

一乘院政所下 嶋津庄日向方飫肥北郷

可早以藤原鶴一丸爲弁濟使代官職事
(長谷場)

右、於當郷弁濟使職者、被附于給主之處、榮證法眼并子
(水田)

息忠政等、掠号爲私相傳之所職、押領地下、年々令抑留

御年貢以下、不及弁濟之條、奸謀之至、太以不可然之間、

被停廢父子之所務畢、仍所被宛仰鶴一丸也者、早隨彼所

堪、御年貢以下恒例臨時之課役等、無懈怠可令弁勤之狀、

依仰下知如件、庄家宜承知、勿違失、故下、

康永參年十月三日 知院事權專當法師(花押)

權專當法師(花押)

權專當法師

上座大法師(花押)
(曾孫)

寺主大法師(花押)

權專當法師(花押)

都維那法師(花押)

勾當法師(花押)

2095 「正文在文庫伊作家文書」
「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

下 嶋津大隅左京進宗久法師道惠

可令早領知信濃國太田庄内神代郷、薩摩國伊作庄半分

南方、同國日置庄地頭職等事、

右、任亡父久長法師道惠文保元年十月廿二日讓狀、領掌

不可有相違之狀如件、以下、

曆應三年十一月廿一日

源朝臣(花押)
(重勝)

2096 『在藤野氏写本四十四通ノ一』

三池三郎藏人近房

欲早被賦一番御引付 一具御沙汰、任相傳當知

行 郡岡村内西嶋地頭職事、
(河内國丹下)

副准

一卷 系圖并手繼已下讓

右、彼西嶋地頭職者、祖父三池安藝全助入道、智之所

而道智以彼地頭職、雖讓与女子字名、悔返之、

弘安十一年六月 日、以自筆讓与後家尼如圓之間、知

返之、嘉元三年十二月廿日、如圓讓給孫女氏、
(中原氏)

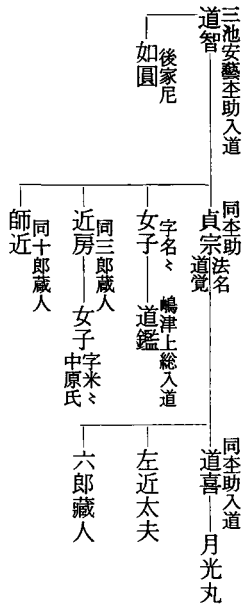
字免、令死去之間、任 氏女當知行無相違之處、嶋津

2098

『全』
「校正了」

かハちのくにししまハ、道智せんそさうてんしりや

『此文書二通銘々年間ノ場ニ補入スヘキ旨
ナレトモ道智ノ文書故此所ニ入置ナリ』



2097

『藤野氏写本四十四通ノ一』

「此文書前ニアリ、参照スヘシ」

曆應三年八月 日

上總入道と鑿、不帶一紙之狀、關當知行□氏女、對於不知行之田村助三郎、致作沙汰、爲安威左衛門入道奉行、今年六月廿五日、掠申御奉書□被打渡之間、支申之、捧訴狀之處、自賦被与奪者、可申沙汰□由、奉行人返答上者、被与奪之、被經一具御沙汰、任相傳之旨、爲蒙御成敗、恐々言上如件、

2099

『全』

「同前」

うなり、むすめ(名々)なこせんニゆつりたれとも、けんさいのはなれハゆつりまいらせ候、たのさまたけなくちきやうすへきなり、

こうあん十一ねん六月十三日 道智在判

2100

『全』

任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

かけん三ねん十二月廿日 女ゑん在判
『嘉元』

文保二年三月廿三日

相模守御判(高時)

武藏守御判(貞朝)

2101 『戴伊地知文書 安富民部太夫状』

豊後國井田郷地頭職事、一色入道被宛行軍勢否、彼注進

狀、可寫給候、恐々謹言、

時曆應三年十二月五日

貞副判

治部兵衛太夫入道殿

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ」

2102 『比志島氏家藏』

合戰最中、捨軍陣被引歸輩事、有其沙汰之處、或差置代官、或自身歸宅之条、甚以無謂、所詮、今月廿五日以前、可馳越之由、可被相觸歸宅一族等、若於令違期者、載起請之詞、可被注申交名、隨其左右可注進也、仍執達如件、

曆應三年十二月十八日 沙弥(貞久)(花押)

比志嶋彦一殿(範平)

「道鑑公御譜中ニ在リ」

(表紙)

貞久公

自 曆應四年
至 康永四年

前 編
舊 記 雜 錄
卷 廿 一

2103

『池端氏文書』

ゆつりたてまつる しんふいけはたとのに

大すみのくにねしめのるんみなミまたさたのむらのうち、はまた七反・やまのくちのそのならひにくわんと

う御くたしふミいけのせうもんらの事、

右のちにおきてへ、きよてるかちうたいさうてんのしよりやうなり、しかるにらうせうふちやうのさかひたるうゑ、うんひやうところせきあひた、さやきてし(ん脱カ)ふいけはたとのに御くたしふミいけのせうもん等をあひそへて、あいたいをかきりて、ゆつりたつまつるところなり、よ

てこうせうのために、ゆつりしやうくたんのことし、

りやくおう四ねん二月十五日 きよてる判

2104

「延時氏文書」

(繪巻書)
御奉書

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申、神領下地押領神役對捍以下事、訴狀七通副具如此、爲有其沙汰、各可召進代官之由、可被相觸東郷三郎左衛門入道・弘・野田又太郎・山門院郡司弥次郎入道・惠・延時又三郎入道・宮里郷郡司九郎入道跡輩并武光掃部左衛門入道日妙・同大學入道忍性等之狀、依仰執達如件、

曆應四年三月廿四日

(高裏氏)
大和權守在御判

(東郷馬場)
澁谷又次郎入道殿

2105

「氏久公御譜中」

曆應四年辛巳四月一日、逼迫于鹿兒島郡司矢上左衛門五郎高純之所楯籠催馬樂城、挑戰攻責者、夜以續日、無敢止時、是以同十六日、退治也、

2106

「全御譜中」

老父道鑾賜鹿兒島於氏久、故去山門院而入部鹿兒島、于時遷宮山門諏方大明神於鹿兒島、以崇宗廟矣、又遷正八幡宮三之御輿於鹿兒島、號若宮八幡、崇敬者也、鹿兒島東福寺城、宅地不平、褊狹而無可營屋舍之地、由是、先假築土墻於城脇、

2107 『水引執印文書』

左衛門大夫友雄申、所領薩摩國新田宮執印職并五大院之主職、及散在名田島等地頭職安堵事、去三月廿九日御奉書謹拜見仕候畢、抑彼所領所職并五大院之主職、及散在名田島免田等、當知行無相違候、將又支申仁無之候、若此条偽申候者、

八幡大菩薩御罰お可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應四年四月七日 沙弥禪巖請文
在裏判

右裏ニリ於彼狀正文者、依路次難儀、留置國之間、案文仁可封裏之旨、被望申之間、所封裏也、

貞和五年十二月十三日 久景(花押)
裏判右同

『戴伊地知氏文書』

〔治部兵衛太夫入道狀〕

豊後國井田郷地頭職事、不見一色(範氏)少輔太郎入道之猷配分狀候、戸次豊前太郎頼時者、佐伯庄領家職并日向國伊東藤内左衛門尉跡地頭職被預候者也、被載彼配分狀候畢、恐之謹言、

時曆應四年卯月廿二日

宗榮在判

安富民部太夫殿(貞顯)

〔此文書、道鑑公御譜中ニアリ御返事〕

2109 〔戴伊地知氏文書〕

〔御施行案 奉行安富民部太夫〕

豊後國井田郷地頭職事、依被預置嶋津上總入道道鑾、可沙汰付之由、被仰之處、戸次豊前太郎頼時、爲鎮西合戰之賞、宛給之由依支申、不及打渡云々、如一色少輔太郎入道(範氏)之猷恩賞支配狀者、頼時分者、爲各別地之旨、所見也、早任先度被仰下之旨、可被沙汰付于道鑾代之狀、依仰執達如件、

曆應四年閏四月二日

武藏守在判(前直)

大友式部丞殿(氏季)

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

『兼重傳興國三年』

山臥便宜之狀委細承了、

一國いまゝて城の一をも不被落候者「由カ」承候へハ、一二年ニ

も靜謐あるまじきやうにうけ給候へハ、無御心本存候、

これも下候へんとて、暇申て候へハ、執事方より思も

より候へんと候間、今すこしも候て、重いとま申候て

罷下へく候、

一和田城こしらへられ候よしうけ給候、相構くひきた

ゝれ候て、こしらへらるへく候、領内にしやう一所候

へてハ、かなうましく候、若黨共の中へハ莫祢二郎下

候時、ふみくたして候間、不下候、

一何事も入道殿に申合られ候て、よきやうに計へく候、

一那良西阿城せめられけに候、此いくさ無何ひさしくあ

らうするけに候へハ、歎入候、其外京都無殊事候、

一必々七八月比ハ可下候、早々城こしらへ候てをかるへ

く候、委細難盡狀候、恐々謹言、

『曆応四年ナラン』

壬四月四日

道惠(花押)

山田諸三郎殿

『兼重傳興國三年』

三年辛巳北朝曆 應四年四月二十六日、師忠率清種及和泉保末等、

復攻東福寺城、兼重麾下拒之城門、二十八日、攻尾頸堡、

兼重等不能拒保、乃棄而走、師忠皆拔之、閏月朔日、資

忠亦率清種・重種等、復攻催馬樂城、十六日、高澄禦戰

城兵不利、○八月十五日、公親將禰寝兵等、如伊集院、攻

助三郎忠國於平城、十六日、和泉相伴三郎保末・弥三郎

保三等來屬公師、入阿多郡、二十八日、保末・保三及多

田彦六等、屬島津資忠師、戰于垣本城、

在加世田 別府

却敵有功、保三族人平九郎清元蒙創、

2112

「在道鑑公御譜中」

『在小根占池端諸右衛門』

大隅國祢寝弥次郎清種軍忠事

右、爲誅伐薩摩國凶徒等、御發向之間、最前馳參、賜御前

陣、『曆応三年』去年八月、御對治同國伊集院一字治城并市來城等之

時、致合戰忠節訖、爰屬于嶋津三郎左衛門尉師忠手、可

致軍忠之由、依被成御奉書、同月十二日、肝付八郎兼重

・中村彈正忠秀純等楯籠押寄于鹿兒嶋郡東福寺城、日夜

致合戰、今年四月廿六日、攻落東福寺山城矣、同廿八日、

尾頸小城同没落訖、將又今月一日、矢上左衛門五郎高純

楯籠押寄于同郡催馬樂城、致合戰之處、同十六日、御對治訖、然早自去年八月迄于今日、於所々數ヶ度合戰、致軍忠之上者、預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年後四月 日

承了(貞久)(花押)

2113 『高尾野士出水藤之丞文書』

目安

薩摩國和泉相伴三郎保末申所々軍忠之事

自最前爲御方而屬于御手、押寄市來城之處、市來入道道尊令降參之間、同自曆應三年八月十五日、押寄矢上左衛門五郎高純城催馬樂、迄于同曆應四年四月、令日夜合戰之條、大手大將嶋津七郎左衛門尉資忠見知候之處、同郡内東福寺被追落之間、攻入肝付八郎兼重大手城戸口ニ、及散々合戰次第、濱手大將嶋津三郎左衛門尉師忠御見知候之上者、給證判、爲預御往進、恐々言上如件、

曆應四年閏四月 日

承了(貞久)(花押)

2114 『根占越右衛門藏本欵』

大隅國祢寝又五郎清增軍忠事

右、薩摩國凶徒等爲對治、御發向之間、最前馳參、賜御前陣、去年八月、伊集院一字治城并市來城等御對治之時、致軍忠訖、爰屬于嶋津三郎左衛門尉師忠手、可致合戰之由、依被成御奉書、同月十二日、楯籠肝付八郎兼重・中村彈正忠秀純等之押寄于鹿兒嶋郡東福寺城、日夜致合戰、去四月廿六日、攻落東福寺山城矣、同廿八日、尾頸小坡同没落訖、將又今月一日、楯籠矢上左衛門五郎高純之押寄于同郡催馬樂城致合戰之處、同十六日、御對治畢、然【矢上乃城へ下伊敷村と坂元村の界也とアレハ、此間四月十六日御對治アリテ、直ニ師忠下伊敷村の地頭と爲リテ守リ玉へる事】早自去年八月迄于今日、於所々數ヶ度合戰、致軍忠之上者、預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年後四月 日

承了(貞久)(花押)

2115 『根占越右衛門藏本欵』

大隅國祢寝孫四郎重種軍忠事

右、薩摩國凶徒等爲對治、御發向之間、最前馳參、賜御前陣、去年八月、御發向于同國伊集院一字治城并市來城等之時、致忠節訖、爰屬于嶋津三郎左衛門尉師忠手、可致合戰之由、依被成御奉書、同月十二日、楯籠肝付八郎兼

重・中村彈正忠秀純等之押寄于鹿兒嶋郡東福寺城、日夜致合戰之刻、同十二月六日夜合戰、致散々太刀打、御敵

數輩切臥、重種被疵左腰射疵、訖、次去月廿六日、攻落東福寺山城、同廿八日、尾頸小城同没落訖、將又今月一日、

楯籠矢上左衛門五郎高純之押寄于同郡催馬樂城、致合戰之處、同十六日、御對治訖、然早自去年八月迄于今月日、

於所々數ヶ度合戰、致軍忠之上者、預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年後四月 日

承了(貞久)(花押)

2116 『水引執印文書』

去三月廿九日御奉書謹拜見仕候訖、抑左衛門大夫友雄申、所領薩摩國新田宮執印職并五大院々主職、及散在名田畠

免田等安堵事、當知行無相違候、將又可支申仁有無事、不令存知候、若此条僞申候者、

八幡大菩薩御爵可罷蒙候、以此旨、可有御披露候哉、恐惶謹言、

曆應四年六月廿三日

左衛門少尉宗久謹文

2117 『道鑑公御譜中』

「正文在郡山勘右衛門」

薩摩國凶徒退治事、相催一族、致用意、今月廿日以前、可被發向也、仍執達如件、

曆應四年七月七日

沙弥(貞久)(花押)

郡山弥五郎殿

2118

「末吉宮里氏文書」

『写在雜書』

薩摩國凶徒退治事、相催一族、致用意、今月廿日以前、可被發向也、仍執達如件、

曆應四年七月七日

沙弥(道兼公)(花押)

宮里了性房

2119

『水引權執印家藏文書』

薩摩國凶徒退事(治脱力)、相催一族、致用意、今月廿日以前、可被發向也、仍執達如件、

曆應四年七月七日

沙弥在判

新田宮權執印殿(貞通)

就薩摩國新田宮執印友雄掠申、去一月廿九日御教書案文、六月五日御催促狀、七月廿日到來、拜見仕候了、抑世上動乱以後、元貞最前爲御方、京都天王寺御合戰之時、致軍忠之處、可下向鎮西之由被仰下之間、對於菊池・八代・内河并求磨・多良木以下輩、數ヶ度合戰之刻、依薩州南郡凶徒蜂起事、守護人嶋津上總入道之鑑被成御教書、下向以後、自去年八月合戰最中也、爲御敵退治、令相向之族沙汰事、合戰落居之程者、可闕之由、當時御沙汰定法之旨、所承及也、仍元貞一族牛屎恩賞訴訟事、敵方申狀可被闕之由、爲治部兵衛大夫奉行入所有其沙汰也、所詮、元貞雖相向合戰、蒙御免者、企上洛、彼奸訴之趣可申披候狀、不然者、南郡合戰落居之間、可被闕件謀訴候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應四年七月廿五日

左衛門尉元貞讀文

(裏花押)

進上 御奉行所

『島津凶書臣柿木原某藏』平石衛門トアリ

薩摩國凶徒退治事、於大隅軍勢者、先度成奉書早、來月七日、可令發向南方、彼日限以前、可被打寄大隅守護所

之旨、面々重可被催促之狀如件、

曆應四年七月廿九日

道鑿判

嶋津下野三郎左衛門尉殿

『道鑑公御譜中』

(端裏書) 信政本解案

澁谷千代童丸代信政謹言上

欲早被經御沙汰、被召上其身、被處重科、爲澁谷石見權守重棟子息弥四郎重春・車内三郎・西岡弥次郎以下一族、以故敵宿意、去五月五日、押寄千代童丸所領薩摩國那答院太郎丸名長野宿所、致放火狼藉及合戰間、雖訴申守護嶋津上總入道道鑿、兩月無沙汰間事、

副進

一通 放火狼藉人等交名注文

右、澁谷石見權守重棟子息弥四郎重春以下一族、去五月五日、押寄當國那答院太郎名長野宿所、致放火狼藉及合戰之条、希代無雙之悪行、狼藉何事如之哉、仍雖訴申守護人道鑿、兩月無沙汰之条、難堪之次第也、所詮、仰御使被鎮當時狼藉、至于重棟子息重春以下交名人者、急速被召上、各爲被處重科、粗言上如件、

曆應四季七月 日

〔雜目纂判〕
(花押)

2123 放火狼藉人等交名注文
澁谷弥四郎本人

西岡弥次郎左衛門尉

車内三郎

山口平次三郎

同平四郎

二渡弥四郎

大井小四郎

同四郎

同六郎

右、此外雖有數輩、且交名注文如件、

曆應四年七月 日

〔統目纂判〕
(花押)

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

2124 『藤野氏藏本』 「在文庫中」

澁谷千松丸代種重申、澁谷石見權守重棟差下子息弥四郎

重春以下輩、於薩摩國東郷内鳥丸村、致夜討殺害由事、
訴狀副具如此、早可被致尋沙汰之狀、依仰執達如件、

曆應四年八月廿三日

(吉良貞家)
修理權太夫(花押)

鳴津上總入道殿

2125 『正文在官庫』 『写見雜書』

鳴津上總入道と鑿代季能申、河内國丹下郡西嶋地頭職事、
右所者、道鑿外祖父三池全助入道と智所領也、弘安十一

年三月十三日、讓与女子中原氏字名、氏女、亦正安三年二

月廿六日、讓附息女字阿久里、道鑿字實名帶元亨三年七月十

日兄弟和与狀、相傳領知之處、田村助三郎不知、無故濫

妨之由、就訴之、所申無相違者、可打渡道鑿代、若又有

子細者、可注申之由、去年曆應六月廿五日、仰細河兵部

少輔顯氏、遣奉書之處、如顯氏執進守護代泰光同七月十

七日請文者、任被仰下之旨、茲彼所領濫妨、沙汰付于鳴

津上總入道代官資光酒介氏也候畢、至田村助三郎者、可參洛之旨、

雖加催促候、不及請文云々、起請詞然後、道鑿領知之處、

号三池三郎藏人近房女子中原氏、屬賦訴申之間、道鑿捧

陳狀畢、氏女乍爲當參、爲訴人無音之間、書下之上、去

後四月十日、以大野弥五郎光尚并性遵使者、重催促畢、

雖然、于今不參、亘遁難溢之科、仍就訴陳狀、所有其沙

汰也、相論之趣子細雖多、所詮、如氏女訴狀者、道智雖

讓与女子名々、悔返之、弘安十一年六月十三日、讓附後

家尼如圓、々々嘉元三年十二月廿日、讓給孫女中原氏之

由、載之、道智讓与道鑒母堂之條、氏女自稱已畢、云如

圓相傳之讓、云氏女所得狀、不被成外題安堵、將亦兩通

和与狀之外、不帶各別之證文、輒亘指南之上、道鑒就當

嶋事、元德二年四月廿七日、預六波羅下知之由所見也、

氏女帶嘉元讓狀令知行者、此時爭不支申乎、相傳之條、

旁髣髴之上、剩難溢畢、無理之所致也、然則、於當嶋者、

弃捐氏女之濫訴、任元亨讓狀・元德下知狀等、道鑒領掌

不可有相違之狀、下知如件、

曆應四年九月十一日

源朝臣(直德)(花押)

〔雜目裏〕
(花押)

〔此文書、道鑑公御譜中ニアリ〕

〔右正文、旧御番所御文書二番箱中、御外祖御讓狀一卷ノ中ニ在リ〕

2126 「宮之城阿久根徳右衛門藏」

目安

薩摩國莫祢次郎太郎入道圓也軍忠事

右、當國谷山城并伊集院城合戰事、大將御存知之間、不

能巨細、次東福寺城警固事、去年八月以來至于今年九月

十二日、雖爲一日片時、無歸宅之儀之上者、早爲預御注

進、恐々言上如件、

曆應四年九月十二日

(貞久)
承了(花押)

2127 「池端文書」

大隅國祢寢又五郎清増軍忠事

右、爲對治薩州凶徒等、御發向之間、最前馳參、以去月

十五日、(伊集院)助三郎忠國楯籠對于伊集院平城、致軍忠畢、將

又、被寄于阿多郡・加世田別符等之時、於所々御合戰之

間、致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年九月 日

(貞久)
承了(花押)

〔本文書ハ、池端文書ニアラズ、根占越右衛門文書ナルベシ〕

2128

『全』
大隅國祢寢孫四郎重種軍忠事

『高尾野士出水藤之丞文書』

〔此一通、道鑑公御譜中ニアリ〕

右、爲對治薩州凶徒等、御發向之間、最前馳參、以去月十五日、助三郎忠國楯籠對於伊集院平城、致軍忠畢、將又、被寄于阿多郡・加世田別符等之時、於所々致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年九月 日

承了(貞久)
(花押)

「全」

大隅國祢寢弥次郎清種軍忠事

右、爲退治薩州凶徒等、今年八月十五日、御發向之間、最前馳參、助三郎忠國以下之凶徒等楯籠于伊集院平城之間、對於彼城致忠節訖、將又、被寄于阿多郡・加世田別符以下之時、於所々御合戰之間、致軍忠訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年九月 日

承了(貞久)
(花押)

(前号文書ニ同ジク池端文書ニ非ズ)

『高尾野士出水藤之丞文書』

目安

和泉杉弥三郎保三申所々軍忠事

自去八月十六日、打入伊集院并阿多郡、致合戰、同廿八日、押寄加世田別符垣本城、及散々合戰、自身長刀打被疵左膝、將又、親類平九郎清元右足手負候之段、嶋津七郎左衛門尉資忠御見知畢、然早預御注進、且給御判、爲備後代龜鏡、恐々言上如件、

曆應四年九月 日

目安

薩摩國和泉楯伴三郎保末申所々之軍忠事

自去八月十六日、打入伊集院并阿多郡、致合戰、同廿八日、押寄加世田別符垣本城、及散々合戰、數輩之凶徒於追返、令致忠節之條、嶋津七郎左衛門尉資忠御見知畢、猶以多田彦六爲同所合戰之間、見知之者也、如此度々令致忠節之條、大將御存知之上者、給御證判、爲備後證龜鏡、恐々言上如件、

曆應四年九月 日

承了(貞久)
(花押)

〔貞久承了〕(花押)

〔裏三有之〕
於此正文者、恐海路之難、可留國之間、被正校案文、可封裏之旨、就所望加判形了、

曆應四年十月五日 沙弥道鑒(花押)

2132 「正文在國分宮内澤氏」
「本家御教書案」

在御判

板越保事、任先例、田所等相向彼所、遂實檢、云下地、云土貢、任實正、載起請之詞、可注進之由、可被下知候旨、依長吏仰、執達如件、

曆應四年十月廿日 沙弥尚順 沙弥道延

謹上 正八幡宮留守左衛門入道殿

2133 「小根占池端氏藏本」

欲早被經急速御沙汰、自去建武三年迄于曆應二年八月卅日、所々合戦、捨身命度々懸先、清種并親類平六

預御注進、浴恩賞事、

副進

一卷 御着到御感御教書御一見狀等

右、清種軍忠事、所令備進□御教書□等明白也、仍預御感御教書迄、而自去建武三年迄于曆應二年、數ヶ度合戦、捨身命懸先、清種・兼安以下兩度被疵、攻落所々城、抽軍忠之上者、預御注進□浴恩賞、粗言上如件、

曆應四年十一月 日

〔直顯判〕(裏花押)

2134 「池端氏文書」

うけとるこくかの十月五日、十五日、十六日、十九日、四ヶとのでうかくまいの事、

合 二舛七合三夕

みき、さたのむらのうち、女子二人分、いけはたとの御わきまゑ、くんたんのことし、

りやくおう四ねん十一月十日

二判一郎はんくわんたいすへもと

2135 「藤野文書正文四十三通ノ一」

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申請拔事

凶徒等、自去年六月廿二日至同四日、乱入社壇畢、可致

清拔之由申之者、云觸穢之段、云清拔之例、早可被尋注申之狀、依仰執達如件、

曆應四年十一月十三日

武藏守(花押)

嶋津上總入道殿

〔御文庫三番箱〕卷中ニ在リ、在判トアリ

〔道鑑公御譜中ニあり〕「此文書、御宝鑑中ニアリ」

〔前ノ十一月十三日ノ文書ノ裏ニ左ノ如シ〕

爲後證、以案文、可被封于裏之由、依望申、所加判形也、

曆應五年七月廿三日

道鑑御判

2136 〔延時氏文書〕

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申神領下地押領神役對捍以下事、重御奉書并訴狀如此、早任被仰下候旨、可被左右申候、仍執達如件、

曆應四年十一月十四日

沙弥覺禪(花押)

延時又三郎入道殿

2137 〔正文在國分宮内澤氏〕

〔京都進請文案〕

正八幡宮御領西加札河内、邊木山村名主職事、被下安堵御教書候、畏入候、云佛神役、云本所御年貢以下、任先例、無懈怠可致其沙汰候、且奉爲本所不可存不忠腹黒、

於事可抽忠勸候、且又以當職、不可讓与沽却權門他所輩

候、若背此請文候者、被召放所職、可被處別罪科候、此

条爲申候者、日本國中大小神祇冥道御爵可罷蒙候、仍

請文如件、

曆應四年十一月廿二日

山上執行祐殿在裏判

2138 正八幡宮新御領板越保事、今年十月廿日御教書、同十一月卅日御施行、謹拜見仕候訖、任御教書之旨、今月三日、

莅彼所、遂實檢、彼檢注帳進上之、若此条爲申候者、正

八幡大菩薩御爵各可蒙候、以此旨、可有御注進候哉、恐

惶謹言、

曆應四年十二月五日

田所檢校永珍

所司執當長澄

2139 〔社司澤氏文書〕

〔本文書ハ二三八号文書ト同文ニツキ省略ス〕

『正文在小根占土池端氏』

注進

大隅國祓寢弥次郎清種、自去建武三年迄于曆應二年八

月兼重城没落期、於日向國屬直顯手軍忠事、

一建武三年十二月十八日、兼重城合戰、

清種自身被疵、右脛射疵、

一建武四年正月十日、石山城合戰、

清種自身被疵、左手射疵、

一曆應二年正月十三日上財部向城合戰

親類平六兼安被疵、右膝射疵、

落城事

三俣院 南郷 下財部
石山城 大和田城 新宮城 兼重本城

右、注進如斯、若此条偽申候者、

日本國中大小神祇御討於可罷蒙候、仍注進如件、

曆應四年十二月廿日

源直顯
〔ウラニニ〕(花押)

進上 御奉行所

『藤野氏正文四十三通ノ一』

(直懸)

依三條殿御達例事、諸人不可馳參、其上既御減氣之間、

所御心安也、存其旨、可被相觸大隅薩摩兩國地頭御家人

等之狀、依仰執達如件、

曆應五年二月五日

嶋津上總入道殿

〔師直〕
武藏守(花押)

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

〔又、御宝鑑中ニ正文アリ〕

『載伊地知文書 写在官庫』

〔守護代請文大友殿〕

豊後國井田郷地頭職事、去年閏四月二日御教書謹承候畢、

早任被仰下之旨、以守護代宗頼、欲沙汰付嶋津上總入道

道鑿候之處、戸次豊前太郎頼時代官妙性、捧請文不避退

云々、仍宗頼并妙性請文貳通謹進覽之、以此旨、可有御

披露候、恐惶謹言、

〔七月十日秀四國宮云々、八月五日発向云々、七日合戦、十三日発向伊集院云々、九月一日見状アリ〕
曆應五年二月六日 沙弥正全請文

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

『水引執印文書』

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申、神領下地押領、神役

對捍以下事、任去季三月廿四日御奉書之旨、相觸面々候

之處、野田又太郎・宮里郷郡司九郎入道跡、并武光掃部

「島津國史」
道鑑公下

康永元年壬午、是年四月改元康永、自三月以前、
猶是曆應五年、南朝興國四年、夏四月二十七日

左衛門入道日妙・同大學入道忍性請文如此候、但此內在國司三郎左衛門入道と弘分者、不可相觸之旨、友雄在國代長秀依令申候、不及催促候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應五年三月五日

(東郷軍書)
沙弥覺禪諱文
(裏花押)

「大口高城氏藏」

なり
ゆつり申へく候

かめわう御せんの所

一所 ひこのくにをうのゝそふ、なかむら〇の内、た

ちたミやうてんはく
やしきてくれう

一所 ちくせんの國ほなミのしやう、しやく〇わんの

をミやうのうち、あてのきのした〇事、

みきのところ、ゆつりにまかせてちきやうあるへく候、

よつて、ゆつりしやうくたんのことし、

りやくおう五ねん三月十七日 よりしけ(花押)

改元、参考太平記、曆應五年四月二十七日改元、和事始、曆應五年四月
月戊辰改元、此年四月壬寅朔戊辰即二十七日、統本朝通鑑、曆應
五年四月壬申改元、按此年四月、秋八月五日、公自將擊谷山、
月無壬申、壬申疑是戊辰之誤、
明日、杉保末軍佐佐野木原、與戰於中手尾崎、又明日、
篠原國道・杉保末・禰寝清種・重種等大戰於谷山、拋道
鑑公
足利直義教書、使島津道惠擊薩摩國凶徒、拋伊作
家譜
二年癸未、南朝興
國五年、春三月二日、足利直義賜島津大隅宗四
郎愛壽丸、改稱
大隅宗四郎、改稱 教書、賞軍功也、拋伊作
家譜 又賜二階堂行仲教
書、亦如之、拋道鑑
公旧譜、二十六日、下文使島津道惠領相模
六郎時敏舊領薩摩加世田別府半分、拋伊作家譜、加世田別府、
即郡村高辻帳、河辺郡加
世田郷地、按建久岡田帳、薩州地名、或稱某院、或稱某郡、
又稱加世田別府百町、東郷別府五十三町二段、蓋別府之稱、猶某院、某
郡之類、非有地
名目別府者也、秋九月十二日、公攻催馬樂城、冬十一月
七日、夜拔之、比志島彦一丸・邊牟木又太郎入道頼秀・
石原忠充有戰功、拋道鑑公旧譜、比志島準人、伊集院十右衛門、
家藏文書、按催馬樂、城主矢上氏、結局不詳、
三年甲申、南朝興
國六年、事缺不書、
貞和元年乙酉、是年十月改元貞和、自九月以前、
猶是康永四年、南朝興國七年、春正月二十二
日、教書使 公討薩摩凶徒、拋道鑑
公旧譜 薩摩凶徒伊集院助三
郎入道道忍國
法名等、侵奪南都一乘院領伊作莊河北之地、
遂築三城而據之、曰田尻、曰坂本、曰今田、由是、百姓

失業、田野荒蕪、夏四月七日、島津道惠應梨原法眼下狀、

與院家代官直人名主俱攻三城、皆下之、拋伊作家譜、郡村高辻帳、阿多郡伊作郷

有田尻村・今田村、今伊作郷中原村、有地名坂本、秋八月二十九日、幕府臨天龍寺法

會、後隊三十二騎、島津下野守預焉、拋太平記、此事先史載於道義公譜、蓋拋道義

公称下野守、以此為道義公事、而郡山遜志有浮帖云、道義公歿於正中二

年、至是二十年矣、則太平記所書、恐非道義公、遜志考配是也、然亦未

言其為誰人、今按源姓島津忠氏一流系図、道義公次子忠氏称下野守、幕

府命補丹後国田辺莊地頭職、又補肥前国松浦早濠村地頭職、建武元年、

道鑑公如京師、忠氏從之、与高越後守師泰、斎藤弥四郎左衛門尉利泰共

為侍所奉行、觀此則太平記云島津下野守乃忠氏也、而系図不載忠氏、

在幕府後隊三十二人中、亦承旧譜之、拋和事始、謬焉爾、忠氏事見下第八卷應永二年、冬十月二十二日改元、

島津上總入道、鑿代得貴謹言上

欲早被直用捨御沙汰、就鎮西管領御下向、寺社本所領

半成可有御管領旨、被成御教書由、承及間事、

副進

一通 右大將家御下文案文治三年九月九日敦通、雖有之、依繁略之、

二通 鎮西警固御教書案文弘安九年三月卅一日、正應六年三月廿一日

右、道鑿鼻祖豐後守忠久去文治三年九月九日、以嶋津庄

日向大隅薩摩号奥三、拜領之条、右大將家御下文以下炳焉

也、其後大宰筑後守先祖号武藤小、次郎實頼、建久年中、筑前豊前肥

前号前三、拜領之、大友刑部少輔貞親先祖齋院次官親能、

建久年中、豊後肥後筑後号後三、拜領之、如此無勝劣、自

充行九州於三人以來、面々守護職管領無相違云々、就中、

日向大隅薩摩三ヶ國者、為嶋津庄内条、御下文明鏡也、

下文

康永元年四月十日

(安) (本文書後出卷二十六ニアリ、島津家文書一) (三一) 康安元、四、十付ノ文書抄記ナルベシ)

「水引權執印文書」

薩摩國凶徒為退治、來月十五日、可令發向南方、相催一

族、可取向城致用意、可被打越白羽也、仍執達如件、

曆應五年五月廿六日

(貞心) 沙弥在判

新田宮權執印殿

薩摩國一宮八幡新田宮所司神官等謹進覽之、清拔所見狀

二通之内、一通、建久五年八月廿二日注文狀、一通、鎮

西御教書嘉元二年十一月十九日狀□者、去曆應二年六

月廿二三四日、南方凶徒等當宮濫妨之時、令紛失候之間、

不撰出候、若此條偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰各候、

以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應五年六月五日

檢校僧融俊
檢校僧融榮

檢校僧永榮

僧榮範

經官僧暹智

學頭僧兼隆

權大宮司惟宗友光(花押)

執行貫首散位紀

御前檢校長嚴

殿上檢校靜範

殿上檢校春嚴

殿上檢校隆宗

座主榮宗

權執印良運

〔銘、裏判アリ、略ス〕

2149

〔写在島津圖書久通家来阿久根猪右衛門〕

号四國宮落下、當國南方成廻令旨、依相語御方軍勢候、

國中以外騒動之間、馳越千臺(川内)、雖相催軍勢候、依有所存

遅参之處、御一族不残自最前馳加、被致忠節之条、就公

私憑敷存候、且此段可注進申候、恐、謹言、

曆應五 七月十日

道鑒在判

莫祢遠屋次郎太郎入道殿

2150

〔前ニ入ルベシ〕

曆應五年壬午七月、公戒諸城兵、將屯千臺、以伐泰季

黨、乃莫祢遠屋次郎太郎入道等、率其族會之、十日、賜

書賞之、

2151

〔道鑑公御譜中〕

〔案文在吉田次郎兵衛為清〕

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申請清拔事、去年十一月十

三日御教書謹拜見候訖、抑如被仰下者、云觸穢之段、云

清拔之例、可尋注申云云、於觸穢者無子細候、次清拔事、

如所司神官等出帶建曆元年九月十六日在廳等連署狀者、

致清拔之由載之、彼案文謹進覽之、於武家者清拔事無支

證候、此條偽申候者、八幡大菩薩御罰於可罷蒙候、以此

旨、可有御披露候、恐惶謹言、

曆應五年七月廿二日

沙弥道鑒裏判

2152

〔御文庫三番箱卷中〕

爲御證、以案文、可被封下裏之由、依望申、所加判形也、

曆應五年七月廿三日

道鑒御判

也、仍執達如件、

曆應五年八月一日

(貞久)
沙弥(花押)

2153 『水引執印文書』

薩摩國一宮八幡新田宮執印友雄申下地押領神役對捍以下

事、重申七通(伏脱之)副具如此、武光大學入道忍性・澁谷新平次

入道定円・羽月四郎左衛門尉・石塚平太郎・同小四郎入

道・大隅式部六郎三郎・武光伴三郎入道等、不日可參決

之旨相觸之、載起請之詞、可被申請文之狀、依仰執達如

件、

康永元年七月廿九日

(高重忠)
大和權守(花押)

澁谷又二郎入道殿

2154 「重久馬兼譜中」

五年壬午、是年四月
改元康永

八月朔日、公將以五日討賊於谷山、

乃賜篤兼書、使必來會四日以前、勿敢違期矣、而五日、

公自帥兵、往擊谷山、

2155 「正文重久氏藏」

薩摩國凶徒退治事、背度之催促、不參之条、何様事哉、

所詮、來四日以前、可被發向、若於令違期者、可有後悔

重久殿

2156 『兼重傳』

八月四日、公親將兵伐泰季黨於自在原、在伊集院和泉保末

等從有功、五日、進入谷山、禰寢清種等領兵從之、六日、

立營於佐々野木原、未尅保末戰於中手尾崎、七日、南方

兵與之戰於谷山、○十三日、又率清種等入伊集院、擊助

三郎忠國於平城、立塞攻之、

2157 『高尾野士出水氏藏』

目安

薩摩國和泉伴三郎保末申所之軍忠事

以今年八月四日、伊集院内自在原於始而、同六日、谷山

郡佐之野木原取陣、同未尅於中手尾崎合戰畢、同七日、

重以令致散之合戰之條、大將御見知之上者、給御證判、

爲預御注進、恐之言上如件、

曆應五年九月 日

道業公一
承了(花押)

2158

『池端文書』

大隅國祓寝孫四郎重種軍忠事

右、爲對治薩摩國凶徒等、去月五日、御發向于谷山郡之間、最前馳參、同七日、致散々合戰訖、將又同十三日、御發向于伊集院之時、對于助三郎忠國以下之凶徒等、楯籠平城致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應五年九月 日

承了(貞久)(花押)

〔本文書ハ池端文書ニアラズ、根占越右衛門文書ナルベシ〕

2159

『全』

大隅國祓寝又五郎清増軍忠事

右、爲對治薩摩國凶徒等、去月五日、御發向于谷山郡之間、最前馳參、同七日、合戰之時、致散々合戰訖、將又同十三日、御發向于伊集院之時、對于助三郎忠國以下之凶徒等、楯籠平城致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應五年九月 日

承了(貞久)(花押)

2160

〔在道鑑公御譜中〕

『正文在小根占池端氏』

大隅國祓寝弥次郎清種軍忠事

右、爲對治薩摩國凶徒等、去月五日、御發向于谷山郡之間、最前馳參、同七日、致散々合戰畢、將又同十三日、御發向于伊集院之時、對于助三郎忠國以下之凶徒、楯籠平城致合戰、取向城訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應五年九月 日

承了(貞久)(花押)

2161

『全』

さり去わたしたてまつる、ねしめ渡のいや二らうとのニ
大す佐多みのくにねしめのあんさた浜田のむらのうち松壽はまた七た
ん・をなしきやしき、やま山口のくち口のそのらの事、

みきのてんち、やし松きらハ、はうふ即のそんしまつしゆま
ろ、いま即はいや二らう即きよてるに、ゑ給いたい給をかきりて
ゆつり給たひて候を、このほとあつかりもちて候へとも、
御く池うしなとかひくしくさたするましく候あひた、い
けはた端との一きよてるかをやにてを御へ一しまし候うゑハ、

【諸方】
しよほうの御くうしをきんし候て、きよてるニゑいた
をかきりてさうてんちきやうせさせらるへく候なり、よ
てこ日のためにさりしやうくたんのことし、

りやくおう五ねん九月二日 あまねんほう(花押)

2162 在國司四郎入道爲凶徒間、所令誅伐也、急速參馳、可被

抽軍忠之狀、執達如件、

曆應五年九月廿日一日

(貞久)
沙弥御在判

大平左衛門三郎殿

2163 「道鑑公御譜中」

「正文在都之城衆野村大右衛門」

目安

篠原園田孫六國道申軍忠事

一薩州南郡凶徒爲誅伐、去曆應三年八月、鹿兒嶋城御發

向之間馳參、迄于同四年閏四月、度々抽軍忠畢、

一曆應四年八月、同國伊集院・阿多郡并加世田別符合戰

之時、致忠勤畢、

一去八月七日、谷山合戰之時、致度々忠節之段、預御注

進、且給御證判、爲備後代亀鏡、言上如件、

曆應五年九月 日

(貞久)
承了(花押)

2164 「道鑑公御譜中」

「正文在比志嶋左京義時」

右合戦ちうをいた [] 早々けんしをおこな
うへく候也、

昨日土橋城かつせんニついでの使者いし并弥 [] 今夜丑
時到參、自是使福崎入道下人同時到來、委細承候了、散
々かつせんニついで、御敵引退之由事、殊悦入候、是も
昨日申時きこへ申候間、やかて打立候、重たるさうにし
たかい、明日早旦ニうちたち候之處、如此うけ給候、返
々悦入候、是非ニ付て、やかて重可承候、尚々是よりも
用意候之間、其さうニしたかい候て、うしろまきいたす
へく候、又入せいともハさためて今夜入候ぬらん、もし
遅々候仁候者、不残かのしやうに可馳籠之由、即時可被
仰候、又自是も明日者人をつかハすへく候、このふみす
なわち、きいれとのゝ方へ可被遣候、恐々謹言、

九月二日寅時

道鑿(花押)

[] 殿

道鑿

2165

「道鑑公御譜中」

「正文在比志島左京義時」

伊集院土橋城警固事、日限之處、二番衆遅参之間、及難

儀了、日限以前、早々可被馳越也、仍執達如件、

曆應五年十月十六日

沙弥(真久)(花押)

滿家院一族中

2166

『比志島氏文書』

〔本文書、二一六五号文書ト同文ニツキ省略〕

2167

「正文在文庫伊作家文書」 「伊作家二代宗久譜中正文在手鏡トアリ」

薩摩國凶徒誅伐事、不日令發向、可致軍忠之狀如件、

康永元年十二月廿一日

嶋津(真久)(花押)

嶋津左京進入道殿

2168

「在蒲地帯刀」

(花押)

薩摩國河邊郡内、黒嶋硫黄郡司職、かめまつ丸にあて給

候早、兩所年貢せんきにまかせて、とり沙汰可被申候、

依仰執達如件、

與國二年十月廿二日

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

2169

『入來院氏文書』

讓与 所領等事

所 子息平次五郎重勝〔定内ノ嗣子〕

一所 相模國吉田庄内藤意村藤次在家、同屋敷付田島荒

野〔自道西仁立野
在之、副南〕

一所 薩摩國入來院内清色北方

一所 筑前國柏原内惣檢校屋敷田島

一所 筑後國長洲屋敷地頭職

右、於彼所領等者、爲定圓重代相傳所領之間、子息平次

五郎重勝仁相副手繼證文安堵御下文所讓与也、於諸御公

事等者、任先例、可令勤仕、至子と孫と、不可有違乱妨

之、仍讓狀如件、〔脱字トミテ、正本ノマ、〕

康永貳年二月八日

沙弥〔四代新平次重基〕定圓(花押)

2170

「載伊作下野守親忠譜」 「正文在文庫」

薩摩國凶徒誅伐事、致軍忠之由、嶋津上總(真久)入道所注申也、

尤以神妙、弥可抽忠節之狀如件、

〔南朝興國五年也〕
「癸未」
康永二年三月二日
〔直義〕
〔花押〕

〔親忠〕
嶋津大隅宗四郎殿

〔伊作家三代親忠譜中、正文有手鏡トアリ〕

2171 「正文在文庫」 「伊作家宗久譜中正文在手鏡トアリ」

〔尊氏〕
〔花押〕
下 嶋津大隅左京進入道宗久と惠

可令早領知薩摩國加世田別符相模六郎時敏跡半分事

右、爲越中國田中保惣領分同國横江三郎入道跡替、所充行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

康永二年三月廿六日

2172 「正文在文庫伊作家文書」 「伊作家宗久譜中正文在手鏡トアリ」

薩摩國加世田別符相模六郎時敏跡半分事、任今年三月廿六日御

下文、可被沙汰付嶋津大隅左京進入道と惠之狀、依仰執達如件、

康永二年四月五日

〔高節直〕
武藏守〔花押〕

澁谷下總權守入道殿

〔重基〕
澁谷新平次入道殿

2173 參御方、可致軍忠之狀如件、

康永二年四月十二日

〔足利直義〕
〔花押〕

〔重匹〕
澁谷孫次郎殿

2174 「藤野文書正文四十三通ノ一」

參御方、可致軍忠之狀如件、

康永二年四月十二日

〔直義〕
〔花押〕

〔忠世〕
智覽四郎殿

2175 「道鑑公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入之志々目正兵衛義辰」

度々合戰抽忠節之条、尤以神妙、向後弥可致軍忠之狀如件、

康永二年五月四日

道鑿〔花押〕

祢寢与四郎衛門殿

2176 康永二年癸未

九月、邊牟木又太郎頼秀催馬業城を攻られしに従ひ戰て死之、九月十二日より十一月七日に至り攻るへし、

2177

『兼重傳』

興國五年癸未、北朝康永二年、九月十二日、公率比志島彦一範平等圍催馬樂城、十一月七日、城將高純夜棄城走、見此月忠狀、而不言城將姓名、然先是三年、曆應四年閏四月、攻高純於此城、拋此高純時尚保城、至此棄走可以知也、

2178

「水引權執印家藏文書」

目安

新田宮權執印代三郎次郎俊正申所之合戰軍忠事

一薩摩國南方市來城爲退治、去曆應三季八月八日、大將

御發向之時、致軍忠畢、

一同十一日、阿多郡池邊城可警固之由、被成御奉書問、

罷向之處、同廿九日、御敵等打出觀音寺、刈取作毛之

刻、馳向致合戰畢、

一同十一月八日、馳參鹿兒嶋、取向城催馬樂城、此手迄

于矢上左衛門五郎降參之期、連之致合戰忠畢、

一同四季八月、伊集院爲平城退治、御發向之時、屬御手

致軍忠畢、

一同月、阿多郡鮫嶋城御發向之時、屬于御手致軍忠畢、

次加世田別府御發向、同致合戰畢、

一同五季八月、谷山城爲退治、御發向之時、屬于御手、

馳向濱手、致合戰畢、

一同九月、在國司入道之超可誅伐之由、依被成御奉書、

酒勾次郎左衛門尉久景相共馳向之處、道超没落畢、

同又阿多郡池邊城可警固之由、被仰之間、馳向致忠畢、

一碓山城可警固之由、被成御奉書之間、自去季十月迄于

今季七月致忠畢、

右、如此度之軍忠拔群之上者、且預御注進、且給御判、

爲備後代龜鏡、言上如件、

康永二季九月 日

承了(貞久)總州在判

2179

『池端文書』

請取國衙てう樂米事

合貳舛二合八夕者

右、さたのむらのうち、四女五女分、いけはたとの、御

代官さう五郎弁如件、

康永二年十月四日

國衙定使弥平太官首定盛判

2180

「水引權執印文書」

薩摩國新田宮權執印代子息三郎次郎俊正申軍忠事

『比志島氏文書』

目安

薩摩國比志嶋彦(範平)一丸軍忠事

右、自今年九月十二日、押卷催馬樂城、致合戰、迄于十一月七日夜没落之期、抽忠節訖、然早賜御證判、爲預御注進、恐言上如件、

康永貳年十一月 日

承了(貞久)(花押)

〔此文書、道鑑公御譜中ニ在リ〕

『池端文書』

うりわたしませ候大すみのくにねしめのみんみな「孫」またまかとたのうちなた壹たんの事「馬門田」

右のてんちへ、かくあかちうたいさうてんのち也、しかるにかのたにおきてへ、こきやくのときへ、いけはたとの「活」にうりまいらするへきよし、はうふせんあゆつりしや「神阿」うにのせられ候あいた、代のようとう六くわんもんにはほんせうもんをあいそへて、あいたいをかきて、いけはたとのにうりわたしませ候ところなり、よて、こうせうのためにこけんしやう如件、

かうあ「康永」い貳年十一月十一日 かくあ「寛惠」(花押)

『長谷場氏文書』

(花押)

下 日向國櫛間院

仰下雑事三箇條

一可勤行佛神事々

右、云神事、云佛事、專守式日、宜令勤行矣、

一可致農業事

右、土民之業、農作爲不漏段歩、宜令滿作矣、

一可勤仕課役事

右、恒例之勤臨時之役、宜令致合期沙汰矣、

以前三箇條、所仰如件、以下、

康永三年正月一日

『入来院氏文書』

ゆつりあたふ所領の事

女子平氏法名宗如ところに

一所 さつまのくにたきのこほりの内田地壹丁あさなゆくた又

貳段同所并屋敷壹所さちやう也矣、

一所 肥前國佐嘉下領内与賀り貳坪壹丁、同十壹坪壹丁、

石江り廿貳坪壹丁、蘇宜り九坪壹丁、吉田り廿陸坪壹

丁、庚太田貳坪七反三文、由比り廿四坪壹丁、庚太田

り拾貳坪八段并屋敷壹所号大石、伊賀法橋本給也、

一所 同國三根西郷内ひんかし津ならひにいつみの空閑

事、抑當所におきてハ、壹期知行の後ハ、三方ニわけ

て、一分をハ子息九郎重興に讓給へし、壹分をハ女子

王壽にゆつり給へきなり、のこる一分と兩所の田地屋

敷等ハ、且おきふミをまほり、且代々のいましめを存

知して、宗如か心にまかせてゆつるへき也矣、

右のところへ、永代ゆつりわたすところ也、おきふミ

をまほりて知行相違あるへからず、仍讓狀如件、

2184

康永参年二月三日

(重興) 沙弥(花押)

2185

『入来院氏文書』

(端裏書)

「重興」

讓与 所領事

孫子九郎重興所分

在筑前國驛家村内光清名号牛隈、地頭職一所、肥前國三

根西郷のうち、東津・泉空閑三分一、但、件三分一者、母堂宗如存生間へ知行

すへし、春期の後ハ、永代領知すへき也、

右、ところへ、勲功賞として拜領之間、孫子重興を

養子として、永代所讓与也、奉公のあとをおひて知行を

全くすへき也、若跡をつくへき子孫なくハ、宗真か子孫

中に志あらん仁にゆつるへし、仍後證讓狀如件、

康永参年二月三日

(重興) 沙弥(花押)

2186

『水引執印文書』

紀伊國冷水浦住人後藤三等申、奪取船已下勝載物由事、

重訴狀副具如此、子細見狀、先度被仰之處、無音云々、

甚無謂、所詮、今月中可参洛之旨、相觸小河小太郎・同

弥次郎等、載起請之詞、可被注申、使節更不可有緩急之

狀、依仰執達如件、

康永三年二月四日

藤原(花押)

散位(花押)

山城守(花押)

執印又三郎殿
(友雄)

2187

『水引執印文書』

「ゆたの六郎とのゝ狀也 みつとみのめんてんの代下邊引狀也」

さつまの國光富名内忠經知行分、新田宮めんてん米、(康)か

うゑい元年のとしよりして、いせん(以進)のミしん(未進)かたニ中む

た壹丁を、康永三年より貳作を、所當公事とゞめて、ひ

き渡進候所也、此やくそくのとしすき候ハ、如本可返

給候、仍如件、

康永三年二月廿五日

忠經(花押)

2188

『道鑑公御譜中』

「正文在垂水衆野口孝左衛門」

所差副千大隅國守護代加羅壽丸也、守先例、可致其沙汰

之狀如件、

康永三年四月八日

道鑑(花押)

本田次郎左衛門入道殿

2189

『長谷場氏文書』

「二乘院政所下 七通之内」

一乘院政所下 嶋津庄日向方飫肥北郷

可早以藤原鶴一丸爲弁濟使代官職事

右、於當郷弁濟使職者、被附于給主之處、榮證法眼并子

息忠政等、掠号爲私相傳之所職、押領地下、年々令抑留

御年貢以下、不及弁濟之條、奸謀之至、太以不可然之間、

被停廢父子之所務畢、仍所被宛仰鶴一丸也者、早隨彼所

堪、御年貢以下恒例臨時之課役等、無懈怠可令弁勤之狀、

依仰下知如件、庄家宜承知、勿違失、故下、

康永參年十月三日

知院事權專當法師(花押)

權專當法師(花押)

權專當法師

權專當法師

上座大法師(花押)

寺主大法師(花押)

權專當法師(花押)

勾當法師(花押)

2190

「正文在長谷場氏」

宛行 嶋津庄日向方飢肥北郷弁濟使代官并收納使職等事

藤原鶴壹丸

右、依申重代之旨、被宛行御下文畢者、早致知行、御年貢内於參分貳者、毎年無懈怠可弁進之、至殘參分壹者、可爲代官得分也、但致御領興行、御年貢令出來之時者、次第任現在、可被加増員數也、仍無指不法者、致子^(到)孫々、不可有相違之狀如件、

康永參年十月八日

給主法眼和尚位^(琳乘)(花押)

2191
^(端書)『御宛正文』
^(付箋)「二三条殿御判形」

宛行 嶋津庄日向方飢肥北郷弁濟使代官并收納使職等事

藤原鶴壹丸

右人、被宛行彼職畢者、早致知行、御年貢内於參分貳者、毎年無懈怠可弁進之、至殘參分壹者、可爲代官得分也、但致御領興行、御年貢令出來之時者、次第任現在、重令治定員數、可被加増也、仍所宛行之狀如件、

康永參年十月八日

給主法眼和尚位^(琳乘)(花押)

2192
^(端書)『琳乘法眼』

嶋津庄内日向方飢肥北郷之收納使、同弁濟使鶴一丸代官

久幸申、榮證法眼并子息藏人大夫忠政等、以當門跡御領、掠稱私領之由、構城郭、令押領所務、致狼籍間事、重申狀如此候、子細見狀候欵、急速下給御舉狀、可訴申武家候、以此旨、可有洩御披露候、琳乘恐惶謹言、

^(貞和二年)八月六日 法眼琳乘

進上 兵部卿公御房

2193
『池端文書』

すこ御せちれう、きよねんこんねんの分代

合八十四文者

右、さたのむらのうち、によし二人のふん、いけはたとの弁件^(加脱)

かうゑい三年十一月廿二日 政位判

2194
『正文在官庫 写載道鑑公御譜中』

今曉三條御所炎上畢、依此事、大隅薩摩兩國地頭御家人等、不可馳參之由、可被相觸國中^(高御直)之狀、依仰執達如件、

康永三年十二月廿二日 武藏守^(高御直)(花押)

嶋津上總入道殿(貞久)

〔右、御宝鑑中ニアリ〕

2195 〔写在文庫〕

薩摩國凶徒誅伐事、以澁谷石見權守重棟、爲使節所被仰也、早任事書之旨、相談之、可致嚴密沙汰之狀如件、

康永四年正月廿二日

(尊氏) 御判

嶋津上總入道殿(貞久)

〔上カキ
御教書案〕

〔道鑑公御譜中ニ在リ〕

2196 〔都城富山氏藏〕

島津御庄廳政所補任

貴船宮大宮司職事

散位藤原義(采)

右職者、尼妙覺与左衛門太郎邦兼、多年(及)訴陳之處、邦兼依無理、相副御下知以下調□避渡于妙覺畢、雖然妙覺依爲非式之身、及知行之間、被召置彼職畢、爰義榮爲本□子孫之間、任重代之實、所令補任也、早可被□狀如件、

康永四年三月五日

目代僧緣實□

2197 〔長谷場氏文書〕

留守所下 長谷場十郎兵衛尉幸純所

可早任下知旨、令存知嶋津庄日向方南郷中野助法橋隆增跡石永圖合田内水田貳町并園貳箇所事、

右、於田園者、隆増与長谷場十郎兵衛尉幸純令契約、當知行之處、於御聽守公神春日大宮司、每月一日御供米老年四分斗者、可致沙汰之旨、目代緣實定申之由、出彼書狀之上者、早令相續彼田園、無懈怠可勤仕之、爰有子孫雖成違乱、此地爲春日御供田、至于末代不可有相違之狀如件、

康永四年三月十六日

留守所法眼和尚位(花押)

2198 〔正文在長谷場氏〕

〔一乘院留守所下〕

留守所下 長谷場兵庫允久純所

可早依當知行安堵嶋津庄日向方南郷門貫末貞兩壹町參拾并園貳箇所事、

右、於田園等者、門貫二郎左衛門入道貞阿令与久純欵者、早任讓狀、至久純之子之孫々、無相違可知行之狀如件、

康永四年三月十六日
(麻卷)
留守所法眼和尚位(花押)

2199 『池端文書』

うけとる大きいふの御りやう物のようとうの事

合三百五十四文内

但五十五文ハ祇寢院得富五分一の内、四十五文ハおなじきはたけ田三分、五十五文ハ同山本村の内、ひわたし田二分、百十五文ハさたのむらの女子二人分

右、祇寢院南侯内池縁殿代草五郎弁如件、

康永四年四月五日

大きいふの御つかいすいせんはん

同一郎三郎はん

2200 『道鑑公御譜中』

「正文在入佐四郎左衛門景鏡」

降参之上者、可致軍忠之狀如件、

康永四年六月十六日

道鑑(花押)

入佐八郎殿

「道鑑公御譜中」

「正文在渋谷如兵衛重増」

被参御方之間、所領白濱村内、賣残田壹町并蘭三ヶ所、
公方御計之程所預置也、可被致忠節之狀如件、

康永四年七月十日
道鑒(花押)
白濱五郎殿

2202 「羽嶋氏文書」

譲与 松土与丸所

可早領知薩摩國々分寺原田壹丁中間三段、刑部入道千
臺園一所事内光富名半分事、

右、件所職田畠者、友重重代相傳無相違地也、松土与丸
可知行也、仍爲後代讓狀如件、

康永四年七月廿五日
惟宗友重(花押)

2203 「市來崎文書」

薩摩國山門院院東方高小野里内小長田五反卅事

をやにて候道惠之手より、市來崎彦七郎殿方ニ、かの田
地を御さうてんのよし承候了、仍爲後證之狀如件、

康永四年八月三日
家貞(花押)

2204 「全」

ゆつりあたふ 彦七郎殿所

さつまの國山門院東方高小野里田地事

合小長田五反卅定四至者
やなきをうへらるへし、

右田地ハ、道惠重代さうてんの所領也、彦七郎殿秀雄あ
さからさる心さしあるに由て、永代をかきりて、ゆつり
あたふるところ也、たゞし國かりやうけの御年貢以下の
御公事等に在いてハ、そうりやうのかゝゑとして、きん
しすへき也、若道惠か子ミ孫ミの中に、かの田地にいら
んをなし、けいはうをいたさんともからに在いてハ、道
惠か子孫として、ゆつる所の所領をちきやうすへからさ
る物也、仍爲後日、ゆつり狀如件、

康永二年八月三日 道惠(花押)

2205 「忠宗公御譜中」

在太平記廿四卷、忠宗公ハ正中二年御逝去テレハ二十年ノ後ニ當
レリ、國史ニ誤ノ弁解前ニ載タリ、參照アルヘシ、
康永四年乙酉八月廿九日、爲天龍寺供養、尊氏卿・直義
朝臣參堂也、行列前後左右不違記、御後三十二騎其不守
次第打度之内、忠宗于時島津
下野守在之、同晦日、上皇御幸也、
導師金欄袈裟鞋著、蓮道進行、二階堂丹後三郎左衛門尉
執蓋、島津常陸前司・佐々木三河守兩人執綱之役也、

忠宗匪翹專文學深嗜歌道、由是有所載和歌集之歌、記左
方矣、

新後撰和歌集卷第十四 戀歌四

波こゆる袖のミなとのうき枕うきてそひとりねハなけれ
ける

同集卷第十八 雜歌中

中々にうきもつらきもしられすハ心のまゝに世をやすく
さん

續千載和歌集卷第十六 雜歌上

風わたるなつみの川の夕暮に山かけ涼し日くらしのこゑ

2206 『入来院氏文書』

澁谷九郎重興申軍忠事

去八月廿七日、同廿八日、於薩摩國鹿兒島谷峰城、致御
目前合戰忠節上者、預御一見、爲備後訴龜鏡、粗言上如
件、

康永四年九月三日

『高山修理大夫義顯
承了(花押)』

2207 『臺明寺文書』

奉寄進

臺明寺衆集院阿弥陀如來御祈田袴田伍段事

右、祈田者、爲 正八幡宮經田、相傳知行之地、志

趣者、爲父母師長六親眷屬、自身他身往生極樂、相副調度之證文、命後仁奉寄進之狀如件、

康永三年九月十五日 法眼和尚位榮快在判

『元應三年正月廿八日、もりへのうちの女うりわたす文書ニ、正八ま
んくうのしやうにん、大はんにやのきしやうてん、あなざは^(まなか)かま田
伍段の事云ミアリ、上篇ニ載セ置也』

2208 『山田氏文書』

さつまのくにいしゆ^{【伊集院】}あんのふく^{【福】}万ミやうの内ふる^{【古里】}さとの
その二か所か事

右、かのそのへ、たうきんちうたいさうてんのちなり、

しかるを、たうきんかち^ニかうつけのちふはうりやうき

んといひ、たうきんといひ、しまつ^{【式部】}のしきふのまこ五郎

入道殿御ひけいにて、りやうきんあんとつかまつり候

事も、たうきん十五のとしより御中にほうこうつかまつ

り、おやをもたすけ、さいしをもかへりミ、いまもても

いのちいきて候御をんあさからす候あひた、かのその二

か所、したいせうもんらをあひそへて、永代まいらせ候

をはぬ、御ちきやう候へく候、いらんわつらい申ものも

候ましく候、よてこ日のために狀如件、

『康永』
かうゑい四ねん十月廿一日 たうきん(花押)

『上書ニ』
「ちぶさへもん入道園ニケ所か狀」